東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

— 平成15年度 —

2004. 3

東大阪市教育委員会

はしがき

東大阪市は、大阪府の東部、奈良県に隣接し、生駒山の懐に抱かれ、自然に恵まれた50万都市です。

生駒山地のふもとには、先人の残した貴重な文化遺産、遺跡が数多く眠っています。本市ではこれら遺跡・埋蔵文化財を保護、顕彰する立場から昭和47年に文化財課を設置、郷土博物館を開館するなど、広く市民の方々に文化財の活用と普及に努めてまいりました。平成14年11月には、市立埋蔵文化財センターがオープンし、多くの市民に利用されています。

本書では、平成15年度国庫補助事業による発掘調査の成果を報告します。今回の報告では、本調査関係で若江遺跡3件、宮ノ下遺跡1件の調査概要を掲載していますが、いずれも中世の良好な遺構・遺物に恵まれ、既往の調査成果に新たな知見を加えることができました。このように限られた調査範囲ではありますが、各々の地域史の解明に大きく寄与できたものといえます。これらは次世代に引き継ぐべき貴重な考古資料であり、本書が埋蔵文化財保護の報告書としてだけでなく、文化財の普及啓発冊子として市民の方々に広く読まれることを期待します。

最後になりましたが、調査の実施や報告書の刊行にあたり、個人・関係諸機関から多大なご協力を賜りましたことに深く感謝し、今後とも文化財保護にご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

平成16年3月

東大阪市教育委員会

目　　次

はしがき
目次・例言
第1章　平成15年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要……1
第2章　山畑遺跡第23次発掘調査……4
第3章　芝ヶ丘遺跡第13次発掘調査……7
第4章　若江遺跡第78・79・80次発掘調査……9
第5章　宮ノ下遺跡第12次発掘調査……71
第6章　善根寺遺跡第2次発掘調査……129
第7章　馬場川遺跡第15次発掘調査……132
第8章　山畑古墳群の第24次調査……135

例　　言

1　本書は、国庫補助50％・市負担50％（総額10,000,000円）で実施した、個人住宅建設工事及び個人・小規模事業主による賃貸共同住宅建設工事に伴う発掘調査の概要報告書である。

2　調査は、調査原因に係る個人・小規模事業主の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。

3　現地の土色および土器の色調は、農林水産省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』(2000年版)に準拠し、記号表示も同書に従った。

4　本書の執筆は次のとおりである。
第2章2)の出土遺物、第3章2)の出土遺物、第4章2)③・3)③、第5章5)は釜田有理絵、第4章4)③、第8章2)は古岡實吾、その他の章節及び編集は菅原章太。

5　考古学用語については、佐原真・田中琢『日本考古学事典』(2002年)の表記に従った。

6　本書には、平成14～15年度に実施した民間開発にかかる調査の成果を併載した(第6章・第7章・第8章)。

7　調査では、遺構名称に略号を使用した。略号は以下のとおりである。

SP	ピット・柱穴	SD	溝・濠・溝状遺構
SK	土坑	SE	井戸
SX	その他の遺構		

8　現地調査の実施及び報告書作成にあたり、下記の方々や関係諸機関からご協力いただいた。記して謝意を申し上げる次第である。
小川　高英・山田　宏二・正木　啓之・鷲尾　尚代・松本健太郎・松本オチヨ
井上　英美・安尾　保・藤木　昌子・石山　功・清水　亮利
日興産業株式会社・安西工業株式会社東大阪支店

第１章　平成15年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要

平成15年度の文化財保護法第57条の２・３に基づく埋蔵文化財包蔵地での届出(通知)件数は、平成16年２月29日現在で届出733件、通知120件で合計853件である。届出(通知)にかかる工事内容の内訳は次のとおりとなる。

個人住宅	96件	分譲住宅	241件	共同住宅	20件	工場	3件	店舗	12件
その他建物	38件	道路	8件	学校	10件	宅地造成	2件	公園造成	2件
ガス	128件	電気	0件	上水道	41件	下水道	252件	電話	0件

853件の届出(通知)の指導内容は、発掘調査76件、工事立会336件、慎重工事441件であった。

東大阪市教育委員会では、上記の工事内容のうち、個人専用住宅建設ないし個人・小規模事業主による賃貸共同住宅建設に伴う確認調査と発掘調査について、次ページ一覧表のとおり平成15年度国庫補助事業として実施している。その内容は、個人住宅建設に伴う確認調査が７件、事務所ビル兼用住宅建設に伴う確認調査が１件、個人・小規模事業主による賃貸共同住宅建設に伴う確認調査が３件で、合計11件であった。これらのうち、個人住宅、賃貸共同住宅各１件、計２件については、確認調査で遺物包含層が検出され、届出者との協議を経て、本調査に至っている(№７・13)。なお、平成15年度については、埋蔵文化財包蔵地外での試掘調査は実施していない。

近時の傾向として、昨年度の調査概報でも指摘したが、個人住宅建設に際し地盤改良として簡易鋼管杭や柱状改良杭など基礎工事に杭打設を伴う工事が多い。耐震設計の一環で施工されるわけだが、埋蔵文化財の保護の観点でいえば、杭打設工事の規模に比例して埋蔵文化財の影響が懸念される。

いっぽう、分譲住宅ではベタ基礎ないし布基礎工法による掘削深度は概ね浅く、位置指定道路下の排水管埋設に伴い実施する確認調査の結果を踏まえて、慎重工事の指導になるケースが多い。上記の慎重工事指示件数はこのことに拠っている。また数年前まで浄化槽埋設に伴う立会調査が比較的多く見られたが、市域の下水道工事進展に伴い、このケースはほぼ消滅した。

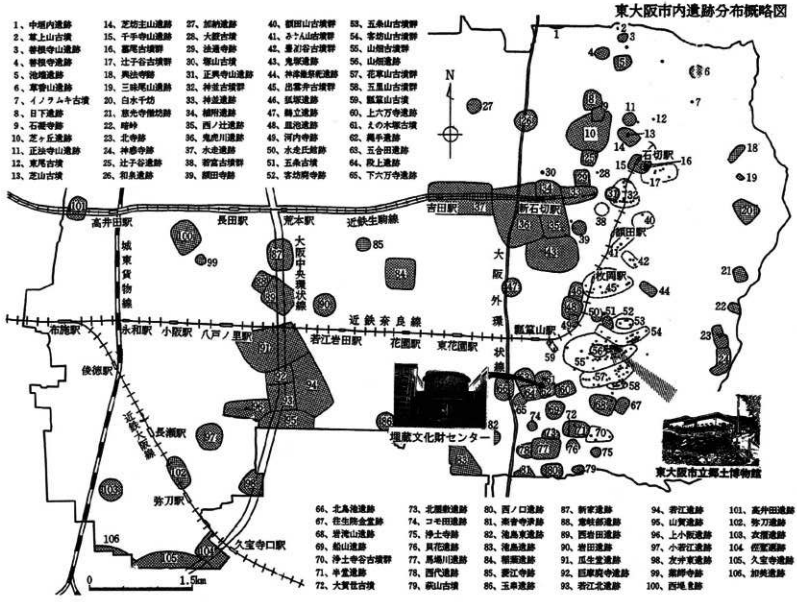
また、届出(通知)件数を見ると平成14年１月～12月で810件なのに対し、平成15年１月～12月が927件で、117件14％の増加となっている。これには種々の要因が複合した結果と考えられる。一例として、埋蔵文化財包蔵地内の排水設備全額助成工事がほぼ悉皆届出の状勢になったことが挙げられる。なお件数がこの趨勢のまま経過するかどうかについては埋蔵文化財の行政指導を行なう中で見守っていきたい。

次に、平成15年度で調査成果を得つつ発掘調査に至らなかった確認調査事例を報告しておきたい。馬場川遺跡では、平成14年度に発掘調査を実施した隣接地で調査依頼書に基づく確認調査を実施した。調査成果は前記の調査(第13次調査)をそのまま裏付けるもので、縄文時代晩期の遺物が多く出土した。依頼者は調査で検出した遺物包含層を破壊しない掘削深度での住宅建設を企図し、届出書を提出されたため、その後の埋蔵文化財の取扱いとしては慎重工事を指示し、本調査には至っていない。本書では調査成果を公開する観点から第７章に調査の概況を掲出した。参照いただきたい。

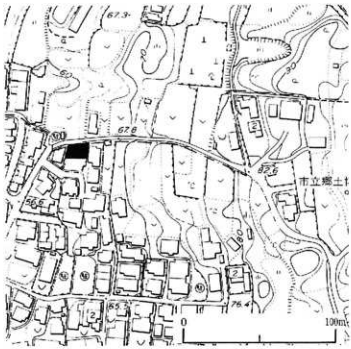
№８の巨摩廃寺遺跡では、中世から近世期の遺物包含層を検出し、その下面で粗粒砂～シルト層をベースに土坑ないし溝、ピットが検出された。遺物包含層の検出レベルが現地表から深く、地中梁工事は埋蔵文化財に抵触せず、基礎杭のみについて取扱いの協議を行なった。工事主体者は届出書再提出の上、杭長を長くする代わりに杭の本数を減らす設計に変更された。このため発掘調査には至らず杭打設工事の立会調査を実施した。指導の変更は「大阪府における開発事業等に伴う埋蔵文化財の取扱いについて」に準拠した。今後前記「取扱い」に沿った行政指導例の増加が予想される。

平成15年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況

	調査事業名及び用途	実施場所	担当	調査期間	調査面積	備考
	山畑遺跡第23次発掘調査 (個人専用住宅)	上四条町1716 3番地の一部	菅原	平成14年12月5日・ 12月16日	11㎡	本書第2章。
	芝ヶ丘遺跡第13次発掘調査 (個人専用住宅)	中石切町4丁目2176 2, 2178-4番地	菅原	平成14年12月25日・ 平成15年2月28日	6.0㎡	本書第3章。
	若江遺跡第78次発掘調査 (個人専用住宅)	若江北町3丁目704-1番地	菅原	平成14年12月13日 ～平成14年12月24日	48㎡	本書第4章。
	若江遺跡第78次発掘調査 (個人専用住宅)	若江北町3丁目860-3番地	菅原	平成14年12月13日 ～平成14年12月24日	60㎡	本書第4章。
1	山畑古墳群確認調査 (個人専用住宅)	上四条町1556-17番地	菅原	平成15年6月19日	2.3㎡	GL-2.0mまで確認。埋蔵文化財検出せず。
2	神並遺跡確認調査 (個人専用住宅)	西石切町1丁目764-8番地	菅原	平成15年6月24日	3.0㎡	GL-1.5mまで確認。埋蔵文化財検出せず。
3	額田山古墳群確認調査 (個人専用住宅)	山手町2142-82番地	菅原	平成15年6月27日	4.0㎡	GL-1.6mまで確認。埋蔵文化財検出せず。
4	鬼塚遺跡確認調査 (事務所ビル兼用住宅)	箱殿町458-9番地	菅原	平成15年7月7日	4.0㎡	GL-1.4mまで確認。埋蔵文化財検出せず。
5	佐堂遺跡確認調査 (賃貸共同住宅)	大蓮東4丁目18-8番地の一部	菅原	平成15年7月31日	9.0㎡	GL-2.6mまで確認。埋蔵文化財検出せず。
6	若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	若江本町4丁目966番地	菅原	平成15年8月5日	2.0㎡	GL-1.7mまで確認。GL-0.2mで中世～近世期の遺物包含層、南から北へ傾斜する落ち込みを確認。本調査実施(No.9)。
7	若江遺跡第80次発掘調査 (個人専用住宅)	若江本町4丁目966番地	菅原	平成15年8月18日 ～平成15年9月5日	90㎡	本書第4章。
8	巨摩廃寺遺跡確認調査 (個人専用住宅)	若江北町3丁目776-1, 775-3番地	菅原	平成15年8月25日	4.0㎡	GL-2.3mまで確認。GL-0.8mで中世～近世期の遺物包含層、その下面でピット、溝など検出。基礎杭の本数を減少する再届出提出の上、立会調査実施。
9	鬼虎川遺跡確認調査 (賃貸共同住宅)	弥生町1401-2番地	菅原	平成15年9月30日	8.0㎡	GL 1.1mまで確認。GL-0.3～0.4mで弥生時代遺物包含層を検出。本調査実施(No.13)。
10	小若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	小若江4丁目344-3番地	菅原	平成15年10月 3日	4.0㎡	GL-1.1mまで確認。埋蔵文化財検出せず。
11	水走遺跡確認調査 (賃貸共同住宅)	島之内2丁目14-15番地 の一部	菅原	平成15年10月16日	9.0㎡	GL-3.4mまで確認。埋蔵文化財検出せず。
12	池端遺跡確認調査 (個人専用住宅)	池之端町103,104, 105番地	菅原	平成15年12月 2日	4.0㎡	GL-1.8mまで確認。埋蔵文化財検出せず。
13	鬼虎川遺跡第59次発掘調査 (賃貸共同住宅)	弥生町1401 2番地	菅原	平成15年12月16日 ～平成16年 1月28日	270㎡	GL-0.5mで弥生時代中期の大溝、土壙墓など検出。詳細は次年度報告予定。
14	若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	若江本町4丁目536-8番地	菅原	平成16年2月2日	2.3㎡	GL 0.9mまで確認。GL-0.2mで戦国時代、その下面に室町時代の遺物包含層を検出。遺構面2枚検出。本調査実施(No.21)。
15	若江遺跡第81次発掘調査(個人専用住宅)	若江本町4丁目536-8番地	菅原	平成16年2月12日 ～平成16年2月18日	22㎡	室町～戦国時代のピット・溝と遺物を検出。詳細は次年度報告予定。
16	河内寺跡第11次発掘調査 (個人専用住宅)	河内町443番地	菅原	平成16年3月4日 ～平成16年3月31日	171㎡	塔跡を調査。礎石・基壇を検出。詳細は次年度報告予定。
17	五合田遺跡確認調査 (個人専用住宅)	御幸町706 8番地	菅原	平成16年3月18日	4㎡	GL-2.0mまで確認。GL-1.6mで弥生～古墳時代の遺物包含層を検出。基礎杭面積を減少する再届出提出の上、立会調査実施予定。
18	西代遺跡確認調査 (個人専用住宅)	横小路町5丁目770-2番地	菅原	平成16年3月23日	6㎡	GL-2.3mまで確認。埋蔵文化財検出せず。


東大阪市内遺跡分布概略図
1、中垣内遺跡
2、東上山古墳
3、善根寺山遺跡
4、善根寺遺跡
5、池端遺跡
6、東釜山遺跡
7、イノフムキ古墳
8、日下遺跡
9、石切神社
10、芝ヶ丘遺跡
11、正法寺山遺跡
12、東尾吉墳
13、芝山古墳
14、芝垣志山遺跡
15、千手寺山遺跡
16、墓尾古墳群
17、辻子谷古墳群
18、興法寺跡
19、三味尾山遺跡
20、白水千坊
21、旅史寺僧坊跡
22、暗峠
23、北寺跡
24、神恭寺跡
25、辻子谷遺跡
26、和泉遺跡
27、加納遺跡
28、大蔵古墳
29、法通寺跡
30、客山古墳
31、正興寺山遺跡
32、神並古墳群
33、神並遺跡
34、植附遺跡
35、西ノ辻遺跡
36、鬼虎川遺跡
37、水走遺跡
38、若宮古墳群
39、額田寺跡
40、額田山古墳群
41、おうん山古墳群
42、皇刃谷古墳群
43、鬼塚遺跡
44、神津島祭祀遺跡
45、出雲井古墳群
46、弧塚遺跡
47、鶴立遺跡
48、皇池遺跡
49、河内寺跡
50、水走氏館跡
51、五条古墳
52、客坊廃寺跡
53、五条山古墳群
54、客坊山古墳群
55、山畑古墳群
56、山畑遺跡
57、花草山古墳群
58、五里山古墳群
59、鶴富山古墳
60、上六万寺遺跡
61、えのホ塚古墳
62、鳥手遺跡
63、五合田遺跡
64、段上遺跡
65、下六万寺遺跡
66、北鳥池遺跡
67、往生院金堂跡
68、皆光山遺跡
69、船山遺跡
70、浄土寺谷古墳群
71、半堂遺跡
72、大賀世古墳
73、北瀬倉遺跡
74、コモ田遺跡
75、浄土寺跡
76、具花遺跡
77、馬場川遺跡
78、西代遺跡
79、砂山古墳
80、西ノ口遺跡
81、南吉寺津跡
82、池島東遺跡
83、池島遺跡
84、堀溝遺跡
85、愛江寺跡
86、玉串遺跡
87、新家遺跡
88、意岐部遺跡
89、西岩田遺跡
90、岩田遺跡
91、瓜生堂遺跡
92、四草跡寺遺跡
93、若江北遺跡
94、若江遺跡
95、山賀遺跡
96、上小阪遺跡
97、小若江遺跡
98、友井東遺跡
99、瓢箪寺跡
100、西堤遺跡
101、高井田遺跡
102、弥刀遺跡
103、衣摺遺跡
104、恩智遺跡
105、久宝寺遺跡
106、加美遺跡
高井田駅
長田駅
荒本駅
近鉄生駒線
吉田駅
新石切駅
石切駅
額田駅
枚岡駅
大阪中央環状線
大阪外環状線
城東貨物線
近鉄奈良線
布施駅
永和駅
小阪駅
八戸ノ里駅
若江岩田駅
花園駅
東花園駅
瓢箪山駅
鉄砲駅
長瀬駅
弥刀駅
久宝寺口駅
埋蔵文化財センター
東大阪市立郷土博物館
N
0
1.5km

第２章　山畑遺跡第23次発掘調査



第１図　調査地位置図

１）はじめに

山畑遺跡は、東大阪市上四条町の市立郷土博物館の西方に所在する弥生時代中期の集落である。本遺跡は標高約60～90mにあり、西に遠く河内平野を一望し得る高台に位地する。このような高所に存在する弥生集落は、中国の史書に見える、倭国内の地域間の緊張関係を背景に出現した、弥生時代中期～後期の「高地性集落」と捉えられる。本遺跡もその一つとして学史上著名である。山畑遺跡は、開墾時に遺物が地表面に散布することから、古くから遺跡としての認識がなされていた。しかし調査は遺物採集が中心で、昭和38年に小規模な発掘調査が行なわれた。調査の結果、方形の竪穴住居址の一部が検出された。また昭和43年には切り通しとなった道路の断面に竪穴住居址とされる遺構が発見され、弥生土器のほか、石鏃などの石器が出土している。平成２年４月～８月、第15次調査が行なわれた。後述する山畑古墳群に属する、横穴式石室をもつ古墳２基のほか、径5.8mを測る弥生時代中期末の竪穴住居址が１棟検出された。竪穴住居址に伴う弥生土器の様式から、この調査において、従前知られていた山畑遺跡の所属時期に再検討を迫る成果が得られた。

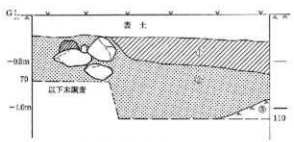
いっぽう、山畑遺跡は山畑古墳群に包摂される。山畑古墳群は東大阪市瓢箪山町・四条町・客坊町・上四条町に広がる６世紀前半から７世紀初頭にかけての市内最大の群集墳である。昭和25年以降、大阪府教育委員会をはじめ、枚岡市・東大阪市の各教育委員会、東大阪市遺跡保護調査会(現・財団法人東大阪市文化財協会)により、発掘調査ないし実測調査が行なわれてきた。古墳は標高約30～150mの山麓部斜面に分布し、現在まで68基の古墳が確認されている。消滅したものを含めると、推定では80基以上が存在したとされている。副葬品として馬具類が多いのが特徴で、馬飼部を統率した河内首一族が築いたものかと考えられている。

第２図　調査箇所位置図

２）調査の概要

平成14年11月、上四条町1716-3番地の一部において、個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が個人より提出された。予定の建物は杭打ち工法によるものであり、東大阪市教育委員会は直ちに確認(試掘)調査が必要である旨、届出者に通知した。確認調査を同年12月５日に行なったところ、現地表下23cmで人為的な石積みの痕跡とその内部から古墳時代後期の遺物包含層を検出した(後述)。その後の取扱いについて直ちに協議に入った。その結果、届出者はベタ基礎工法とし、地中の古墳状遺構や遺物包含層

を損傷しない内容の届出書を再提出した。市教育委員会はその旨了解するとともに敷地西端の深掘り基礎部について立会調査が必要である旨通知した。立会調査は12月16日に実施した。弥生時代中期の遺物包含層を確認した。深掘り工事期間を通じて立会を行ったため、その後の自余の工事は慎重に実施することとした。今回は、先の確認調査の概要について報告する。



第３図　調査地断面柱状図

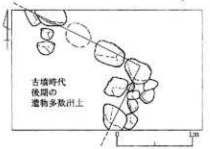
試掘坑は届出者側の事由により、予定建築物の南側に設けた。東西2.5m南北1.6m、4㎡となる。層位は次のとおり。

表土・耕土層　客土となる黄色砂層を含む。

第１層　7.5YR3/2黒褐色中礫混じり粘土。

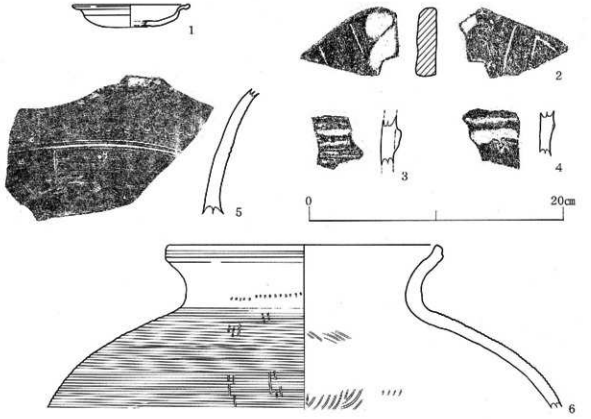
第２層　7.5YR3/2黒褐色中礫混じり砂質粘土。第１層、第２層とも古墳時代の遺物を多量に含んでいた。

第３層　2.5Y6/3にぶい黄色粘土質シルト～細粒砂。地山層。試掘坑の西側でのみ確認した。



第４図　確認調査平面略図

表土・耕土層を除去すると、人頭大の巨礫が現出した。巨礫は断面で２段組みとなっており、人為的な石積みであることが知られた。さらに表土・耕土層を慎重に掘削すると、平面形がL字状をなす石列が認められた。L字状石列の内部は上層が第１層、下層が第２層でともに古墳時代後期の遺物を多量に包含していた。これらのことから、石列は古墳石室の一部と考えられ、偶々石室内部の埋土に



第５図　出土遺物実測図

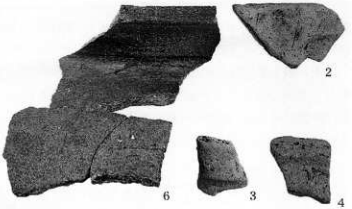
あたったものと推定される。この推定が大過なければ、石室は北西方向に開口するものと思われる。

次に主な出土遺物について説明しておきたい。遺物には古墳～平安時代の土師器、埴輪、須恵器がある。1は土師器の皿。口縁部は大きく外折し、口縁端部は内へ肥厚する。いわゆる「て」の字状の口縁をもつ皿である。口縁部外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。体部外面に煤が付着する。11世紀代。古墳の追葬に伴う資料であろう。2は形象埴輪である。外面に凹んだ部分と内外面に線刻が確認できる。3・4は円筒埴輪のタガ部分である。3はタガの断面がM字状を呈するものと考えられる。調整は風化のため不明である。4はタガの断面が三角形を呈する。外面にタテ方向のハケメ調整が確認できる。5は須恵器甕の頸部の一部である。ゆるやかに外反する。回転ナデ調整後、二条の沈線を施し、波状文を二段に亘って施す。6は須恵器甕である。体部は大きく張り、頸部はやや外反する。口縁部は端部にかけて内傾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。内外面を回転ナデ調整する。体部外面はタタキの後、カキメ調整する。内面は当て具痕による青海波文がみられる。口縁端部外面に一条の沈線を施す。

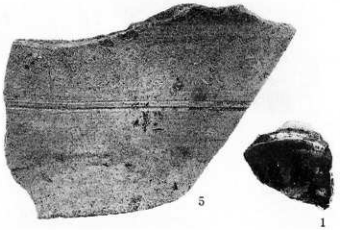
3) まとめ

今回の調査では、宅地内に小規模の試掘坑を設けたに過ぎなかったが、古墳状の遺構を検出できたのは大きな成果であった。出土遺物のうち6の須恵器甕は形状から6世紀後半の段階に位置づけられる。これは山畑古墳群の初源期にあたる。また深掘り部の弥生時代中期の遺物包含層の存在から、少なくとも調査地まで山畑遺跡の範囲が広がることが知られた。

石列検出状況



出土遺物(1)

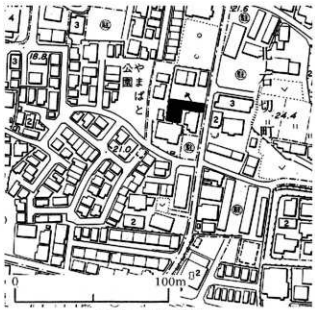


出土遺物(2)

第３章　芝ヶ丘遺跡第13次発掘調査

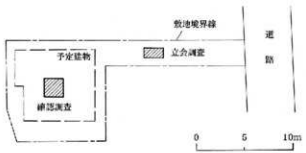
１）はじめに

芝ヶ丘遺跡は、東大阪市北石切町・中石切町４丁目を中心に一部日下町２～３丁目・中石切町２丁目にわたる縄文時代から近世期にかけての複合遺跡である。音川(辻子谷渓)の右岸に位置し、同渓谷が形成する扇状地上に立地する。昭和34年北石切町での宅地造成工事の際に弥生土器・土師器が発見され周知の遺跡となった。その後市立石切中学校内施設建設工事、下水管埋設工事、共同住宅建設工事等に伴う調査が実施されている。その結果、縄文時代後期～晩期の土器、古墳時代中期の掘立柱建物、平安時代のピット群などが検出された。



第１図　調査地位置図

平成14年12月、中石切町４丁目2176-2、2178-4番地において、個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が個人より提出された。建物基礎の形状はベタ基礎で現地表から0.5m程度であったが、平成13年10月に、個人住宅建設に伴って実施した第12次調査地に隣接して北側にあたることから埋蔵文化財への影響が懸念された。そこで確認(試掘)調査が必要な旨届出者宛て通知した。確認調査の結果については後述のとおりであるが、検出した遺物包含層のレベルから、基礎工事には支障ないものの、浄化槽埋設工事時には再度立会調査が必要となった。その立会調査は平成15年３月に実施した。



第２図　調査箇所位置図

２）調査の概要

確認調査の層位は次のとおりである(盛土層を除く)。

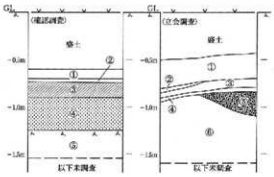
第１層　旧耕土層。　第２層　床土層。　第３層　10YR4/1褐灰色粘土混じり細礫。

第４層　2.5Y4/3オリーブ褐色粘土質細粒砂。第３～４層は古墳時代中期～後期の遺物包含層である。

第５層　10YR6/4にぶい黄褐色砂質シルト。地山層。

耕作土を除去すると、すぐ遺物包含層が露出した。現地表から0.7mであった。これを第12次調査の層準と比較すると、現地表からは浅いレベルで検出したことになる。

いっぽう、浄化槽埋設の立会調査では、以下の層位が確認された。



第３図　調査地断面柱状図

第１層　旧耕土層。第２層　床土層。第３層　5GY6/1オリーブ灰色粘土質粗粒砂。

第４層　5YR4/4にぶい赤褐色粘土混じり粗粒砂。

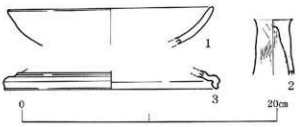
第５層　2.5Y4/3オリーブ褐色シルトと2.5GY6/1オリーブ灰色中粒砂の混合土。

第６層　2.5GY4/1暗オリーブ灰色ないし5Y4/3暗オリーブ色中礫～巨礫。

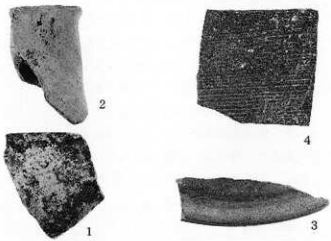
第３層と第４層は古相の耕作土を示し、それぞれ耕土と床土に相当する。第５層は古墳時代から奈良時代にかけての遺物包含層である。ただし第６層は礫層であり不安定な地盤を見せている。したがって第５層もプライマリーな堆積相ではなく、遺物包含層ごと再堆積した可能性がある。

立会調査断面

出土遺物は第４図に掲げた。１・４は確認調査第３～４層から、２・３は立会調査第５層から出土した。３は奈良時代で他は古墳時代に属す。１は土師器高杯杯部。体部から口縁部にかけてわずかに内弯しながら立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。内外面ともナデ調整する。２は土師器高杯脚部。柱状部のみ残存。細長く中空である。外面上半をナデ調整、下半をハケメ調整する。内面はナデ調整し、上半にはしぼり痕がみられる。３は須恵器杯蓋。口縁部はＺ字状にカーブし、下方へ屈曲し段をなす。口縁端部は丸く終わる。口縁部内面に稜を持つ。内外面を回転ナデ調整する。４は須恵器甕。外面はタタキの後、カキメ調整する。内面は当て具痕による青海波文がみられる。



第４図　出土遺物実測図



出土遺物

３）まとめ

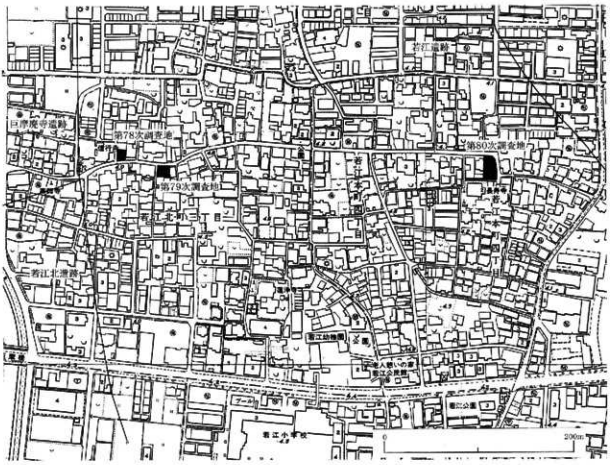
芝ヶ丘遺跡では、昭和30～40年代の宅地開発時に大掛かりな切土工事が行なわれたため、盛土層直下で地山層が露出することがしばしば見られ、開発事例に比して現在まで調査例は多くない。しかし近年の特色として、個人住宅建設に伴う調査が漸増する傾向にある。前記した第12次調査もその一つで、古墳～奈良時代の遺物が出土した。今回の遺物も同時期であり、調査地周辺に該期の集落が存在していることが推定される。継続した調査の進展を望みたい。

第４章　若江遺跡第78・79・80次発掘調査

1）はじめに

若江遺跡は、東大阪市若江本町・若江北町・若江南町一帯に広がる弥生時代から中世末期にわたる複合遺跡である。昭和９年(1934)旧楠根川改修工事の際に、弥生土器・土師器・須恵器などの遺物が採集され、遺跡としての認識が始まった。本遺跡は周知の遺跡となってから各種開発工事に伴い、拡大の一途を辿ってきた。現在では東西約750m、南北約1000mの範囲に及ぶと推定されている。昭和47年(1972)、市立若江小学校校舎増築工事に伴い第１次調査が開始されて以来、今回の調査で80次に達した。市内に点在する遺跡の中で、本遺跡は最多の調査例を数える。これには種々の原因が想定されるが、そのひとつとして、本遺跡が現今の玉串川・楠根川ないしその前身河川が形成する自然堤防や微高地上に立地することを挙げることができる。したがって、本遺跡は、後述の遺跡を一単位として土地が先史以来改変・累重されてきた経緯から、東大阪市の中部域にあって、各時期の遺構面が現地表面から浅いレベルで検出されることになり、多くの調査例が蓄積されてきたのである。

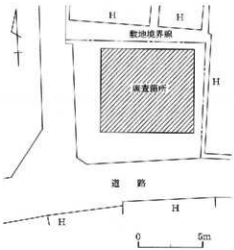
次に既往の調査成果に則り、若江遺跡の時期ごとの様相を素描してみよう。人間活動の痕跡が認められるのは弥生時代に入ってからで、第33次調査で中期の方形周溝墓が発見されたほか、後期の水田址・畦畔が遺跡南部で確認された。弥生時代末期から古墳時代中期にかけて、若江遺跡の縁辺部では、洪水に起因する砂層の堆積が随所で見られ、本遺跡を広く覆っている。砂層内の遺物の出土量は地点により大きく異なるが、後期の弥生土器や古式土師器が認められている。古墳時代後期の遺構・遺物



第１図　若江遺跡第78次・79次・80次調査地点位置図

については、発見されているものの顕著ではない。飛鳥時代になると、府道大阪東大阪線の南側一帯で該期から鎌倉時代に至る瓦や土器が多量に出土している。これらは周辺に存在した若江寺・若江郡衙や集落に伴うものと考えられている。第38次調査(若江小学校)では唐三彩・奈良二彩など寺の什器に属する遺物が出土し、調査者は若江寺の位置を若江鏡神社付近に推定されている。ただし後出の若江城築造時に大規模な整地が行なわれたため、明確な位置の決定に至っていないのが現状である。室町時代には若江幼稚園を中心とした区域に若江城が築造される。これまでの研究により、若江城は第1期若江城・第2期若江城に区分されることが判明している。第1期若江城は、室町時代中期、畠山氏が河内国支配の拠点とした守護所が設置された城館である。第2期若江城は、戦国時代、三好長慶の養嗣子、義継によって築かれ、その後義継を滅ぼした織田信長が石山本願寺攻めの中心地として使用された城郭である。織田信長が石山本願寺と和睦したのち、ほどなく若江城は廃絶したようで、城の建物・施設は破却された。さらに若江庄の存在も見逃しがたい。国史上には、醍醐寺領若江荘・石清水八幡宮領若江荘・興福寺領若江荘と見える。醍醐寺領は10世紀末から12世紀にかけて国役雑事賦課の免除申請を行なう。石清水八幡宮領は11世紀後半に若江北条に田地を有している。興福寺領は12世紀後半から維摩会料所としてしばしば現れ、とくに永正から大永の16世紀初頭には、興福寺権僧正経尋が荘園の回復を企て、河内守護代遊佐順盛・三条西実隆に依頼したことが知られる。三つの若江荘は郡内に領有した散在荘田を郡名で呼称したとされ、その範囲は推定の域を出ないが、遊佐氏は若江城に詰めることがあり、興福寺領若江荘は若江遺跡周辺に位置した可能性が考えられる。これら、幾多の遺跡の変遷を経て、江戸時代には村となった。したがって、現在の若江遺跡は、全体を一個の遺跡としてみるのではなく、少なくとも弥生時代の集落・若江郡衙・若江寺・若江城・若江荘などの遺跡の複合体と捉えるべきと考えられる。

平成14年10月、東大阪市若江北町3丁目704-1番地において、個人住宅建設の届出書が東大阪市教育委員会あて提出された。当初ベタ基礎工法で基礎掘削深度が浅かったことから、工事と併行して立会調査が必要である旨届出者に通知した。そこで12月に調査のため現地に赴いたところ、基礎の形状を急遽杭打ち工法に変更するとのことで、確認調査を実施した。調査の結果、現地表下0.5mで室町時代の遺物包含層を検出した。杭打ち工事により遺物包含層が破壊されるため、届出者との協議を重ね、事前の緊急発掘調査を実施することになった。これが第78次調査である。同じく東大阪市若江北町3丁目860-3番地において、個人住宅建設の計画があり、埋蔵文化財発掘の届出書が平成14年11月に提出された。基礎掘削深度がやや深いため、事前の確認調査が必要な旨通知した。調査は12月に行なった。調査の結果、表土の直下で落ち込みを検出し、中世期の土器も出土した。そこで緊急発掘調査に向けての協議を開始したが、偶々第78次調査を実施する運びとなった時期であり、かつそれぞれの調査地が近接していたため、第78次調査と同時に発掘調査を行なうこととなった。これが第79次調査である。第78次・79次調査は平成14年12月13日から12月24日まで実施した。



第2図　第78次調査トレンチ位置図

平成15年6月、東大阪市若江本町4丁目966番地において、個人住宅建設に係わる埋蔵文化財発掘の届出書が提出された。基礎工法は杭打ちで、工事実施により埋蔵文化財の破壊が懸念されたため、事前の確認調査が必要である旨

届出者に通知した。確認調査を平成15年８月に実施したところ、現地表下0.2mで中世期の遺物包含層を検出したほか、試掘坑の北側で大きく傾斜する落ち込みを確認した。このため、緊急発掘調査実施についての協議を届出者と重ねた。調査は平成15年８月18日から９月５日まで実施した。これが第80次調査である。いずれの調査も遺物包含層や遺構が良好に遺存しており、若江遺跡の調査に新たな知見を加えることができたのは大きな収穫であった。

２）第78次調査

第78次調査地は北面・東面に間断なく家屋が密集し、かつ敷地内の全面近くに住宅が建設されることから、排土を仮置きするスペースを確保する必要に迫られた。このため調査はまず東半部から行い、その終了後該地を埋め戻し、次いで西半部を掘削する手順で進めた。調査面積は併せて48㎡である。なお、後述する第79次調査と併行して行なったため、遺構番号は、第78次東半部→第79次→第78次西半部の順に通しとした。従って第78次、第79次両調査とも欠番を生じることになったが、調査進行の円滑化の措置として行なったものである。諒とせられたい。

① 層位(第３図)

検出した層位は下記のとおりである(現代の盛土層は除外する。以下、第79次、第80次も同様。)。

第１層　2.5Y5/2暗灰黄色細礫混じり粘土質シルト。近世期の遺物を含むが、ガラス・ハリガネなどが介在する。近代以降の堆積土。

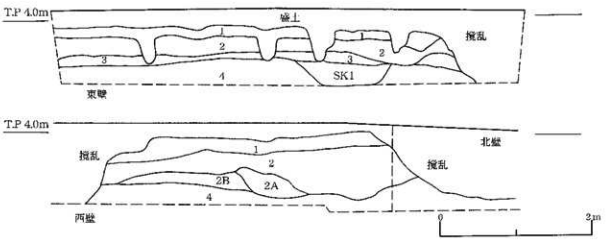
第２層　2.5Y4/4オリーブ褐色シルトに5Y5/2灰オリーブ色黄色細礫混じり粘土質シルトがブロック状に混入する層。近世期の遺物を含む。

第３層　2.5Y4/3オリーブ褐色粗粒砂混じり粘土。中世～近世期の遺物包含層。

第４層　上面は5Y5/2灰オリーブ色、下部は2.5Y5/3黄褐色の細礫～粗粒砂。上面は遺構面をなす。後期の弥生土器、庄内～布留式期の土師器、須恵器などを含む。

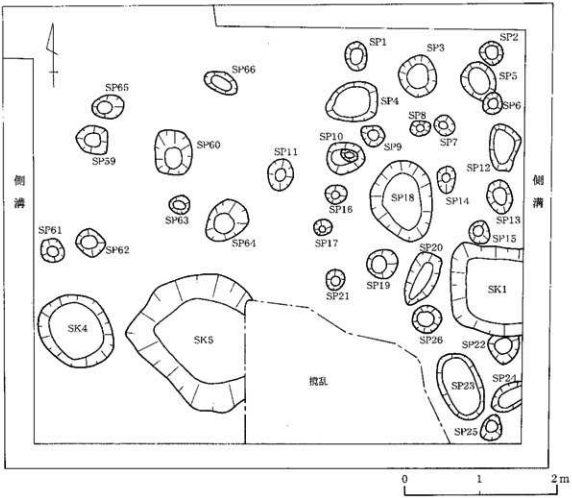
② 検出した遺構(第4図)

ピット　規模や形状は別表に示した。検出の位置関係は、東半部で密集し西半部では疎散である。規模は大小あるが、径25～30cmを測る円形のものが多い。とくに大型ピットSP18の周囲には小型の



1　2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト
2　2.5Y4/4オリーブ褐色シルトに5Y5/2灰オリーブ細礫混じり粘土質シルトがブロック状に混入
2A　第2層と第4層の混合土　　2B　第2層・第4層・7.5Y5/3灰オリーブ色細粒砂の混合土
3　2.5Y4/3オリーブ褐色粗粒砂混じり粘土　　4　(上部)5Y5/2灰オリーブ色(下部)2.5Y5/3黄褐色細礫～粗粒砂

第３図　第78次調査断面図



第４図　第78次調査遺構平面図

ピットが囲繞する。

上坑　SK1は調査地の東端で検出した上坑。隅丸方形を呈し、現存長で南北1.18m、東西0.93m深さ31cmを測る。埋土はN3/暗灰色シルトに第4層がブロック状に混入する層である。土師器皿・杯、瓦器椀、平瓦などが出土した(第5図)。SK5は西側の南よりで検出。東側は撹乱により欠失する。円形を呈し、現存長で南北1.82m、東西1.63m、深さ62cmを測る。

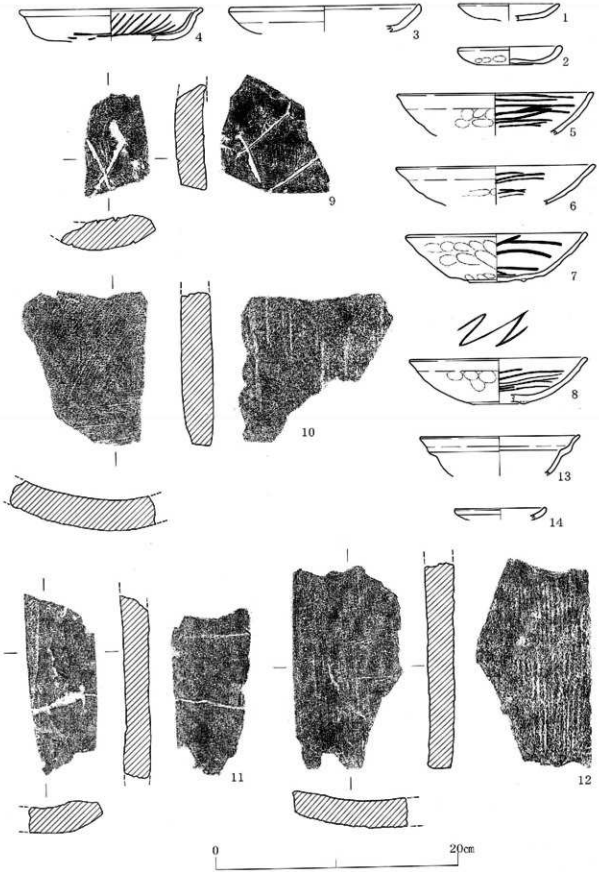
③　出土遺物

現場調査の段階でコンテナー10箱文の遺物が出土した。遺物には、土師器(中世期及び古墳時代前期)、瓦器、須恵器、弥生土器、須恵器などが出土した。以下、遺構及び遺物包含層などに分けて記す。

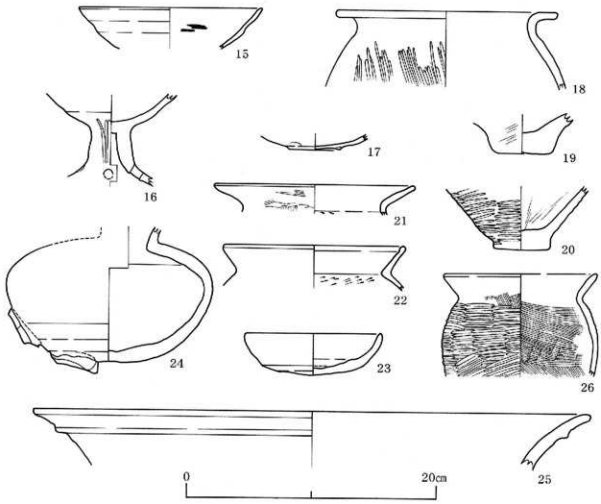
ＳＫ1（第５図１～11）

土師器、瓦器、瓦がある。

土師器には皿・杯がある。(以下、口径10cm未満を小皿、10cm以上12cm未満を中皿、12cm以上を大皿とする。)１・２は小皿である。１は体部から口縁部にかけて外へ開き気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。２は体部から口縁部にかけて内弯しながら立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。３は大皿である。３は体部から口縁部にかけて外へ開き気味に立ち上



第5図　第78次調査SK1・SK5出土遺物実測図



第６図　第78次調査第３層・第４層ほか出土遺物実測図

がり、口縁端部はやや丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。４は杯で体部が内弯し、口縁部は外反する。口縁端部は外折し、内へ肥厚する。体部外面は５条/cmのハケメ調整、口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面をナデ調整する。底部内面に連結輪状の暗文、口縁部内面に放射状の暗文を施す。１～３は13世紀代、４は奈良時代。５～８は瓦器の椀である。５・６は底部を欠損する。器高は低い。体部から口縁部にかけて外へ開き気味に伸び、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く終わる、いわゆる和泉型である。底部は断面が台形の高台を貼り付けるもの（７）と半円形の高台を貼り付けるもの(８)がある。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整、内面は数条の粗いヘラミガキ調整する。８の見込み部にはジグザグ状の暗文を施す。すべていぶしは悪い。13世紀代。９～11は瓦である。９は軒平瓦である。凹面は縄タタキ調整した後ヘラで刻む。凸面には布目がみられる。10・11は平瓦である。10は凹面には縦横８条/cmの布目、凸面には縄タタキ目がみられる。11は凹面に縦横９条/cmの布目がみられ、凸面はナデ調整する。側面はケズリで面取りする。奈良時代。

ＳＫ５（第５図12～14）

瓦、土師器がある。

12は平瓦である。凹面に縦横10条/cmの布目、凸面には縄タタキ目がみられる。側面はケズリで面

取りする。奈良時代。13は土師器の鉢である。底部を欠損する。体部は浅く、口縁部は二段で外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁部内面に稜を持つ。口縁部内外面をヨコナデ調整する。他は風化のため調整は不明である。布留式期。14は土師器の小皿である。底部を欠損する。口縁部は内弯し、口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。13世紀代。

第3層出土土器（第6図15～17）

瓦器、土師器がある。

15・17は瓦器椀である。15は底部を欠損する。口縁部は外へ開き気味に仲び、口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整、内面は数条の粗いヘラミガキ調整する。17は底部である。底部は断面が半円形の高台を貼り付ける。底部外面はユビナデ調整、内面はラミガキ調整する。15・17ともいぶしは悪い。13世紀代。16は土師器の高杯である。脚部が中位から大きく外反する。杯部は内弯気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。脚部外面はヘラミガキ調整、杯部内面は板状工具によるナデ調整する。脚部の4箇所に円孔を穿つ。布留式期。

第4層出土土器（第6図18～25）

弥生土器、庄内～布留式土器、須恵器がある。

18～20は弥生土器である。18は甕の口縁部である。体部はやや張り、口縁部が水平方向に大きく外反する。口縁端部はやや面を持つ。体部外面をヘラミガキ調整、口縁部内外面をヨコナデ調整する。内面は風化のため調整は不明である。内面に黒斑がみられる。19・20は底部である。底部外面の中央が少し凹む。底部から体部にかけて外反しながら外上方へ伸びる。19は外面に横方向の5条/cmの粗いハケメ調整、内面は板状工具によるナデ調整する。20は体部外面に3条/cmのタタキ調整、内面は板状工具によるナデ調整する。外面に煤が付着する。弥生時代後期。生駒西麓産。

21・22は庄内～布留式土器である。甕の口縁部である。21は口縁部が大きく外反し、口縁端部は丸く終わる。口縁部外面は5条/cmのハケメ調整、体部内面はヘラケズリ調整する。22は口縁部が外折し、口縁端部は内側に肥厚する。外面は風化のため調整は不明である。口縁部内面はヨコナデ調整、体部はヘラケズリ調整する。庄内～布留式期。生駒西麓産。

須恵器には杯身、平瓶、甕の器種がある。23は杯身である。底部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味に終わる。外面の3/1以下に回転ヘラケズリ調整、他をナデ調整する。奈良時代。24は平瓶である。頸部、口縁部を欠損する。底部から体部にかけて丸みを帯びる。外面の3/1以下に回転ヘラケズリ調整、他をナデ調整する。体部外面と底部内面に自然釉が付着する。外面に焼成時に付着したと考えられる杯蓋がつく。杯蓋は打ち欠かれている。奈良時代。25は甕の口縁部である。口縁部は大きく外反する。口縁端部は丸く終わる。外面に突帯を施す。内外面を回転ナデ調整する。古墳時代。

撹乱内土器（第6図26）

26は弥生土器の甕である。底部を欠損する。体部は球形である。口縁部は外折し、口縁端部は丸く終わる。体部外面はタタキ調整、口縁部内外面をヨコナデ調整する。頸部外面と体部内面は6条/cmのハケメ調整する。体部の一部に黒斑がみられる。弥生時代後期。生駒西麓産。

④　小結

第78次調査では、第4層上面でピット・土坑などの遺構を確認した。遺構内からは、古相の遺物が混入品として含まれるが、出土した瓦器椀の編年観から、概ね鎌倉時代を中心とした中世期の築造と考えられる。ただし、調査範囲の制約のため、掘立柱建物の復元までは至らなかった。現地の所見であるが、ピットは調査地の東側にやや集中する傾向がうかがわれる。

3）第79次調査

第79次調査は、第78次調査と同様、個人住宅建設に伴うものであるが、第78次調査地の住宅が杭打ち工法に拠るのに対し、第79次調査分は現地表下0.9mの掘削工事を予定されていた。このため、調査地の北側では遺構面となる第4層上面のレベルが傾斜し、-0.9mでは上層の中途にとどまっていた。第7図の第79次調査遺構平面図で、ピットの分布が南側に偏っているのはその事由による。また排土は調査依頼者の協力により場外に搬出したため一度に地域全体を調査することができた。

第7図　第79次トレンチ位置図

① 層位(第8図)

検出した層位は下記のとおりである。

第1層　2.5Y5/2暗灰黄色細礫混じり粘土質シルト。近世期の遺物を含むが、ガラス・ハリガネなどが介在する。近代以降の堆積土。土質は第78次調査と同様である。

第2層　2.5Y4/4オリーブ褐色シルトに5Y5/2灰オリーブ色黄色細礫混じり粘土質シルトがブロック状に混入する層。近世期の遺物を含む。土質は第78次調査と同様。調査地の北半部では、後述の第3層・第4層の上面に介在する層がみられる。これを第2A層・第2B層・第2C層とした。いずれの層にも近世期の染付碗片を含んでいた。

第2A層　7.5Y4/2灰オリーブ色粘土混じり細礫～粗粒砂。

第2B層　5GY5/1オリーブ灰色中礫混じり細礫～粗粒砂。下部は第4層の混入が見られた。

第2C層　10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルト。

第3層　2.5Y3/2黒褐色粘土混じり細礫。中世期の遺物包含層。

第4層　上部は5Y5/2灰オリーブ色、下部は2.5Y5/3黄褐色の細礫～粗粒砂。上面は遺構面をなす。古墳時代～奈良時代の土師器、須恵器などを含む。

② 遺構(第9図)

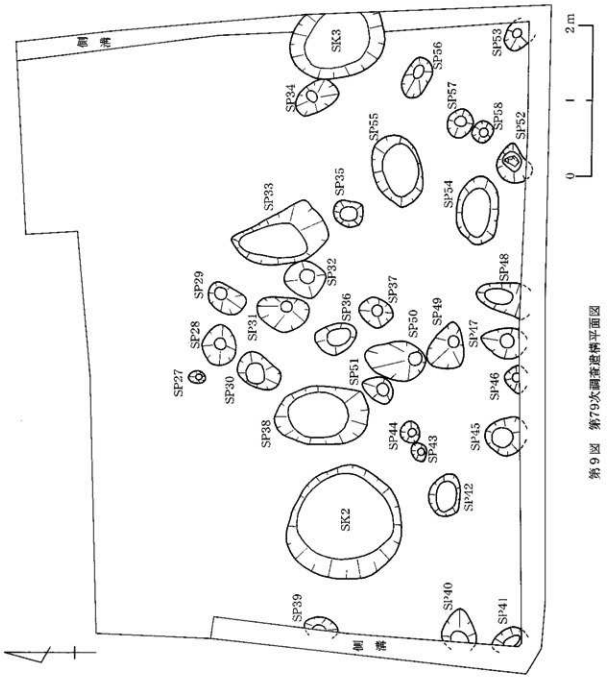
第4層上面で中世期の遺構を検出した。繰り返しになるが、北半部は遺構面のレベルに至らなかったため、遺構の分布は実態を反映していない。ピットの規模・形状は別表を参照されたい。

土坑・井戸　SK2は調査地の西側で検出。平面形は整円形をなす。南北1.50m、東西1.47m、深さ84cmを測る。壁面が直下気味に傾斜

第8図　第79次調査断面図

することから井戸とも捉えられる。埋土は3層に区分された。上層は5Y4/2灰オリーブ色粘土質中粒砂で2.5Y7/2灰黄色粗粒砂のラミナが見られた。中層は炭化物層で北側7cmほどの堆積であった。下層は7.5Y4/3暗オリーブ色粘土混じり細礫である。大型の遺構にもかかわらず遺物量は僅少であった。SK3は東側壁面近くで検出。楕円形を呈すると思われる。現存長で長径1.27m、短径0.89m、深さ63cmを測る。埋土は2層に区分される。①層は10Y3/1オリーブ黒色シルト質細粒砂に細礫層を多く含む層である。②層は第4層を主体に①層が混入する層。中世期の土器に混じり、上師器(庄内式土器)が出土した。

ピット　トレンチ南端で検出したSP45-SP48-SP52-SP53は1.8m(6尺)のピッチで東西に並ぶ。柱穴列としておく。掘立柱建物の存在が暗示される。なお、SP52には根石が遺存していた。



第9図　第79次調査遺構平面図

③ 出土遺物

縄文時代～近世期の土器がある。総量はコンテナー10箱分である。縄文土器、弥生土器、庄内式土器、土師器、瓦器、須恵器、陶磁器などが出土した。12～13世紀代のものが多い。この時期以外の遺物のみ文章中に時代を記す。以下、遺構及び遺物包含層などに分けて記す。

ＳＫ２（第10図１）

１は須恵器である。甕の口縁部である。口縁部はやや外折し、口縁端部は水平方向に面を持つ。外面はタタキの後、回転ナデ調整し、頸部の下半をカキメ調整する。内面に当て具痕による青海波文がみられる。古墳時代。

ＳＫ３（第10図２・３）

２は土師器甕の口縁部である。口縁部が外折し、口縁端部は内側に肥厚気味である。外面はヨコナデ調整である。口縁部内面は５条/cmのハケメ調整、体部はヘラケズリ調整する。内面に黒斑がみられる。庄内式期。生駒西麓産。３は灰釉陶器である。山茶碗の底部である。高台はやや内弯し、高台端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。高台と内面の一部に自然釉が付着する。平安時代。

ＳＰ33（第10図４～10）

４は土師器である。高杯の脚部である。柱状部が細長く、中位から大きく外反する。中空である。外面と裾部内面は風化のため調整は不明である。柱状部内面にはしぼり痕がみられる。脚部の３箇所に円孔を穿つ。庄内式期か。

瓦器には椀・火舎の器種がある。５～８は瓦器椀である。５・６は底部である。７は底部を欠損する。８は口縁部を欠損する。底部は断面が台形の高台を貼り付ける。器高はやや高く、内弯しながら立ち上がる。口縁端部は丸く終わる、いわゆる和泉型である。外面はユビナデ調整、または指頭圧痕が残る。内面は粗いヘラミガキ調整する。見込み部に斜格子状の暗文を施すもの（５・６）と平行線状の暗文を施すもの（７）がある。いぶしは悪い。９は瓦器火舎である。口縁部は内弯気味に立ち上がり、内側へ水平に折れ曲がる。口縁端部は丸く終わる。口縁部外面は風化のため調整は不明である。水平部分内外面はヨコナデ調整、体部内面はヘラミガキ調整する。15世紀代。

10は土師器皿である。小皿である。（以下、中世期の土師器皿は、口径10cm未満を小皿、10cm以上12cm未満を中皿、口径12cm以上を大皿と区分する。）体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。

ＳＰ36（第10図11）

11は土師器である。高杯の脚部である。裾部が大きく広がり、裾端部はやや面を持つ。裾部外面と裾端部内面は板状工具によるナデ調整、内面はナデ調整する。内外面に黒斑がみられる。

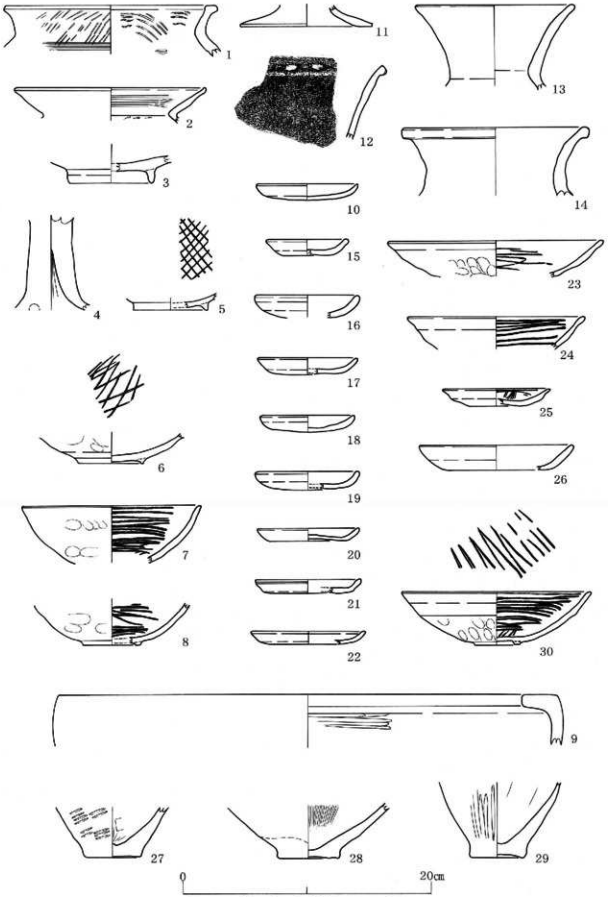
ＳＰ37（第10図12）

12は縄文土器の深鉢である。口縁部は外上方へ伸び、口縁端部は尖り気味に終わる。刻み目凸帯文を施す。縄文時代晩期。

ＳＰ38（第10図13・14）

弥生土器と須恵器がある。

13は弥生土器である。短頸壺の口縁部である。口縁部は外上方へ外反気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。風化のため内外面の調整は不明である。弥生時代後期。生駒西麓産。14は須恵器である。壺の口縁部である。口縁部は大きく外反する。口縁端部は外へ肥厚し、面を持つ。内外面は回転ナデ調整する。古墳時代。



第10図　第79次調査遺構出土土器実測図

ＳＰ48（第10図15～26）

15～22は土師器小皿である。口縁部がやや外反するもの（15・17・21）と体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がるもの（16・18～20・22）がある。口縁端部は丸く終わる。15は口径が他より小さく、16は器高が高めである。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。26は大皿である。体部から口縁部にかけて外へ開き気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。23・24は瓦器椀である。底部を欠損する。口縁部はやや外反し、口縁端部は丸く終わる。23は体部から口縁部にかけて外へ開き気味に伸びる。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部外面はヨコナデ調整、内面は数条の粗いヘラミガキ調整する。見込み部に平行線状の暗文を施す。24はやや内弯しながら立ち上がる。体部外面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整、内面は数条の粗いヘラミガキ調整する。25は瓦器皿である。底部は上げ底で、口縁部は外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁部外面はヨコナデ調整、内面は数条の粗いヘラミガキ調整する。

ＳＰ49（第10図27）

27は弥生土器の底部である。底部から体部にかけて外上方へ伸びる。体部外面はタタキ調整、内面は板状工具によるナデ調整する。弥生時代後期。生駒西麓産。

ＳＰ54（第10図28～30）

28・29は弥生土器の底部である。底部は直角気味に立ち上がる。28の体部は外へ大きく開く。外面は風化のため調整は不明、内面は８条/cmのハケメ調整する。底部内面は板状工具によるナデ調整する。外面に黒斑がみられる。29の体部は外上方へ伸びる。外面はヘラミガキ調整、内面は板状工具によるナデ調整する。弥生時代後期。生駒西麓産。30は瓦器椀である。器高はやや低い。底部に断面が台形の高台を貼り付ける。体部は内弯し、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面は指頭圧痕が残る。口縁部外面はヨコナデ調整が二段に亘る。内面は粗いヘラミガキ調整する。見込み部はジグザグ状の暗文を施す。いぶしは悪い。

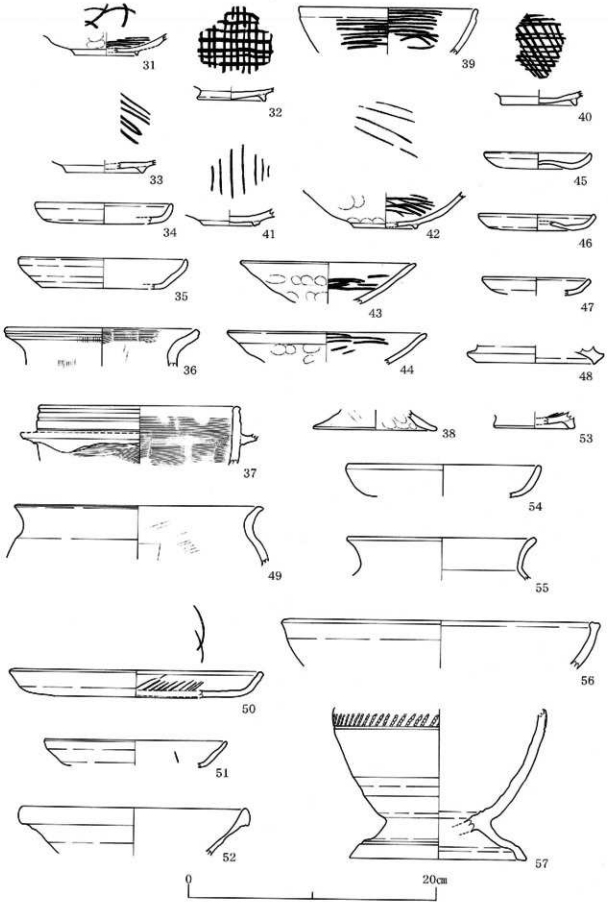
第２層（第11図31～38）

31～33は瓦器椀である。底部である。底部に断面が三角形の高台を貼り付ける。底部はナデ調整する。31は体部に指頭圧痕が残る。見込み部に斜格子状の暗文を施すもの（31・32）と平行線状、またはジグザグ状の暗文を施すもの（33）がある。いぶしは悪い。

土師器には皿・壷・羽釜・高杯の器種がある。34は中皿である。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。35は大皿である。体部から口縁部にかけて外へ開き気味に立ち上がり、口縁部が上方へやや伸びる。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。36は壷である。口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。口縁端部外面に一条の沈線を施す。外面をハケメ調整後、口縁部外面をヨコナデ調整する。口縁部内面は６条/cmのハケメ調整、体部内面は板状工具によるナデ調整する。平安時代。37は羽釜である。体部から口縁部にかけて上方へ伸び、口縁端部は丸く終わる。鍔部は上向きにやや弯曲気味に付く。口縁部外面に二条の沈線を施す。鍔部下面および内面は６条/cmのハケメ調整する。15世紀代。38は高杯の脚部である。裾部は大きく開く。外面は板状工具によるナデ調整、内面はユビナデ調整する。

第３層（第11図39～52）

39～44は瓦器椀である。39・43・44は底部を欠損する。39は体部がわずかに内弯し、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁部外面はヨコナデ調整、体部内外面は粗いヘラミガキ調整する。43・44は体部から口縁部にかけて外へ大きく開き、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く終



第11図　第79次調査包含層出土器実測図

わる。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部外面はヨコナデ調整、内面は粗いヘラミガキ調整する。40～42は底部である。底部の断面が三角形の高台を貼り付け、見込み部に斜格子状の暗文を施すもの（40）と台形の高台を貼り付け、見込み部に平行線状の暗文を施すもの(41・42)がある。底部はナデ調整する。42は体部外面に指頭圧痕が残る。内面は粗いヘラミガキ調整する。すべていぶしは悪い。43は生焼けである。土師器には皿・甕の器種がある。45～47は小皿である。45・46は上げ底で、47は底部を欠損する。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。49は甕である。体部は丸く、口縁部は外反する。口縁端部は面を持つ。口縁部外面はヨコナデ調整、内面は板状工具によるナデ調整する。平安時代。50は皿である。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がる。口縁端部は内側にやや肥厚し、丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。底部内面に連結輪状の暗文、口縁部内面に放射状の暗文を施す。奈良時代。51は大皿である。体部から口縁部にかけて外へ開き気味に立ち上がり、口縁部が上方へやや伸びる。口縁端部は丸く終わる。口縁部外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。48は須恵器の脚部端である。ハの字形の高台で、裾端部は面を持つ。内外面を回転ナデ調整する。52は白磁の碗である。底部を欠損する。体部が外へ開き気味に伸び、口縁部は大きく肥厚する。いわゆる玉縁状の口縁である。体部外面の上半と内面を施釉する。色調は灰白色を呈する。11世紀後半から12世紀前半に位置づけられる。

第4層（第11図53～57）

土師器には皿・甕・鉢の器種がある。53は杯ないし椀の底部である。断面が長方形の高台を貼り付ける。ハの字形を呈する。外面をヨコナデ調整、内面をヘラミガキ調整する。奈良～平安時代。54は大皿である。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。55は甕の口縁部である。口縁部は外上方へ外反する。口縁端部は面を持つ。口縁部内外面はヨコナデ調整する。平安時代。56は鉢の口縁部である。体部から口縁部にかけて内弯しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。口縁端部は面を持つ。口縁部内外面はヨコナデ調整する。奈良時代。57は須恵器の台付壺である。口縁部を欠損する。台部は短めで、裾部にかけて内弯する。裾端部は面を持つ。体部は内弯しながら立ち上がる。台部内外面は回転ナデ調整、体部外面の下半は回転ヘラケズリ調整、体部外面の上半と内面を回転ナデ調整する。体部に沈線を１条施し、その間に列点文を施す。

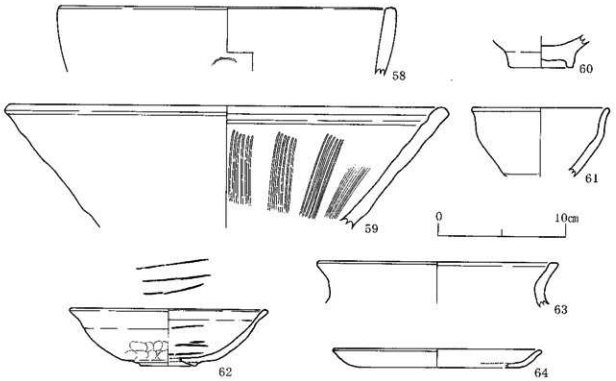
東側溝（第12図58～61）

58は瓦器火舎である。口縁部である。口縁部は外上方へ伸び、口縁端部は水平方向に面を持つ。体部に円孔を穿つ。内外面をナデ調整する。14～15世紀代に属す。

59は丹波焼の擂鉢である。底部を欠損する。体部から口縁部にかけて外へ大きく開く。口縁端部は面を持つ。内外面は回転ナデ調整する。口縁部内面に緩やかな凹みがみられる。内面に６条/1.8cmのおろし目を施す。16世紀中頃から16世紀末に属す。60は龍泉窯系青磁の碗である。底部である。高台端部は丸く終わる。高台端部以外に施釉する。色調は明緑灰色を呈する。

その他の遺物(第12図62～64)

61は瀬戸美濃焼の犬目茶碗である。底部を欠損する。体部は外へ開き気味に伸び、口縁部はやや外反しながら上方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。体部内外面を施釉する。色調は黒褐色を呈する。16世紀代。層位不明。62は瓦器の椀である。器高はやや低い。底部に断面が三角形の高台を貼り付ける。体部は内弯し、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面は数条の粗いヘラミガキ調整する。見込み部に平行線状の暗文を施



第12図　第79次調査その他の遺物実測図

す。いぶしは悪い。試掘坑出土。63は甕の口縁部である。口縁部は外反し、口縁端部は水平方向に面を持つ。口縁部内外面をヨコナデ調整する。奈良時代。試掘坑出土。64は大皿である。体部から口縁部にかけて外へ大きく開き気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他をナデ調整する。試掘坑出土。

④　小結

第79次調査では、掘立柱建物を構成するピット列や土坑を検出した。ここでは現場調査の所見を中心に調査成果についてまとめておきたい。

まず層位では、旧建物解体に伴う表土(バラス層)以下には近世期以前の遺物がみられた。ただし第1層は近現代の遺物を少量含むことから一次的に堆積した層と考えられる。いっぽう、近代以降の耕作に伴う耕土や床土層は認められない。このことは第78次調査地と共通する。したがって両調査地を繋ぐ道路(市道岩江55号線)周辺では、少なくとも近世期には集落が営造されていたことが考古学的に証明されたことになる。

検出された遺構のベース層となる第4層には、飛鳥時代の須恵器から、奈良～平安時代の土師器を含んでいる。このことから遺構の年代はその後出となる。遺構内からは、概ね13世紀代を中心とした遺物が出土しているが、SP33から15世紀代の瓦器火舎が認められることから、室町時代中期まで降るものと推定される。微量の近世期瓦は混入品と考えられる。因みにピットや遺物包含層からの遺物は、古くは縄文時代晩期凸帯文上器から、近世期初頭の陶器まで認められる。

調査地北部の遺構密度は不明であるが、南端でピット列が検出されたことから調査地の南側に該期の集落が広がることが予想される。前記市道沿いでの発掘調査はこれまで下水道関係調査を除き、希少であり、第78次調査地と併せて、ピットや土坑など集落の実態を表象する遺構が検出されたことは貴重な成果といえよう。

第1表　若江遺跡第78次・第79次調査ピット一覧表

遺構名	調査	平面形態	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	埋土	出土遺物	備考
SP 1	78次	楕円形	39	29	12	A'	土師器	
SP 2	78次	円形	31	—	12	A	土師器	
SP 3	78次	円形	54	49	16	B	土師器	
SP 4	78次	楕円形	72	54	10	A	土師器	
SP 5	78次	楕円形	53+	44	13	A	弥生土器（後期）	
SP 6	78次	円形	29	—	11	B	土師器	
SP 7	78次	円形	27	—	12	A	土師器、瓦器	
SP 8	78次	楕円形	27	21	12	A	須恵器	
SP 9	78次	円形	33	28	17	A	須恵器、土師器	
SP 10	78次	楕円形	50	41	16	A'		
SP 11	78次	楕円形	43	30	22	A'	土師器	
SP 12	78次	楕円形	63	40	16	B	陶器、瓦器	埋土に炭化物混じる
SP 13	78次	楕円形	43	32	16	A		
SP 14	78次	楕円形	33	24	18	A	土師器	
SP 15	78次	円形	31	27	16	A	土師器	
SP 16	78次	円形	29	26	21	B		
SP 17	78次	円形	25	23	8	B		
SP 18	78次	楕円形	110	82	26	A	土師器	土坑状
SP 19	78次	円形	39	36	15	A	瓦器	
SP 20	78次	長楕円形	74	37	13	A	土師器、瓦器	小土坑状
SP 21	78次	円形	26	24	9	A		
SP 22	78次	円形	39	36+	16	A		
SP 23	78次	長楕円形	90	54	28	C	土師器、陶器	小土坑状
SP 24	78次	楕円形	45+	32	27	B	土師器	
SP 25	78次	楕円形	36	27	29	B	土師器	
SP 26	78次	円形	37	—	11	B		
SP 27	79次	円形	18	—	26	A		
SP 28	79次	円形	54	48	50	A		
SP 29	79次	楕円形	50	33	34	B	土師器	
SP 30	79次	楕円形	58	43	51	B	土師器、瓦器、陶器	
SP 31	79次	楕円形	66	43	47	D	土師器	
SP 32	79次	円形	53	48	54	D	須恵器、土師器、瓦器、瓦	
SP 33	79次	楕円形	119	71	65	E	土師器、瓦器、須恵器、瓦	土坑状
SP 34	79次	楕円形	57	39	29	B	土師器、須恵器、瓦器	
SP 35	79次	円形	40	37	29	B	土師器、瓦器	
SP 36	79次	楕円形	52	39	38	B	土師器	
SP 37	79次	円形	41	38	47	D	須恵器、土師器、瓦器	

遺構名		調査	平面形態	規模(cm)			埋土	出土遺物	備考
				長軸	短軸	深さ			
SP	38	79次	楕円形	122	77	66	B	須恵器、土師器、瓦器	土坑状
SP	39	79次	円形	43	34+	65	D	土師器、黒色土器	
SP	40	79次	楕円形	65+	45	45	D	土師器	
SP	41	79次	楕円形	44	22+	31	D	土師器	
SP	42	79次	楕円形	54	40	37	B	土師器、弥生土器（後期）	
SP	43	79次	円形	26	23	24	D	土師器	
SP	44	79次	円形	27	26	27	D	土師器	
SP	45	79次	円形	49	47+	27	D	土師器	
SP	46	79次	楕円形	37	30	35	D	土師器	
SP	47	79次	楕円形	57+	48	56	D	土師器、須恵器	
SP	48	79次	楕円形	57	48	56	D	土師器、瓦器	
SP	49	79次	楕円形	63	49	49	B	土師器	
SP	50	79次	楕円形	78	55	53	D	須恵器、土師器	埋土に炭混、小土坑状
SP	51	79次	楕円形	43	35	15	B	土師器、瓦器	根石遺存
SP	52	79次	楕円形	48	39	21	D	土師器、瓦器	
SP	53	79次	楕円形	45	36	27	D	須恵器、土師器、埴輪	
SP	54	79次	楕円形	89	54	45	D	土師器	小土坑状
SP	55	79次	楕円形	90	65	35	F	土師器、瓦（近世）	小土坑状
SP	56	79次	楕円形	53	32	32	D	土師器	
SP	57	79次	円形	35	33	16	D		
SP	58	79次	円形	29	27	35	B	土師器	
SP	59	78次	楕円形	46	37	14	B		
SP	60	78次	方形	60	50	37	B	土師器	
SP	61	78次	円形	29	—	33	A	古墳期土師器	
SP	62	78次	方形	38	33	38	A		
SP	63	78次	円形	28	26	10	B		
SP	64	78次	楕円形	59	46	25	A	古墳期土師器	
SP	65	78次	楕円形	42	32	32	D	須恵器	
SP	66	78次	長楕円形	46	27	20	D		

〔凡例〕 ①「規模」欄で－はその数値以上を示す。－は長軸と同値。「出土遺物」で、「古墳期土師器」とは布留式土器などを示す。

②「埋土」欄、A：第4層に10Y3/1オリーブ黒色シルト質細粒砂が少量混じる。

A′：Aと同じだかオリーブ黒色土の混入は中量。

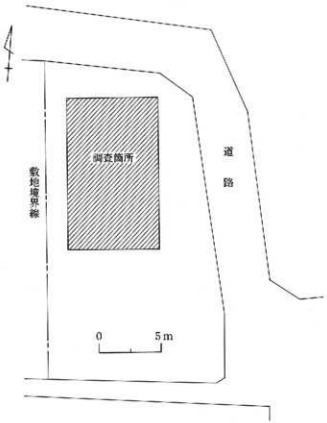
B：10Y3/1オリーブ黒色シルト質細粒砂主体で第4層が少量混じる。

C：7.5Y4/1灰色シルト混じり中粒砂。

D：N3/暗灰色シルトに同色の細礫が混じる。

E：N4/灰色シルト質粘土。

F：5Y4/1灰色シルトに同色の細礫混じる。



第13図　第80次調査トレンチ位置図

4）第80次調査

第80次調査は個人住宅建設に伴う調査で、杭打設により埋蔵文化財が破壊される部分90㎡を調査対象とした。発掘調査の地点としては、第80次調査地は第79次調査地の西約350mにあたる。発掘調査に先立つ確認(試掘)調査では、現地表下-0.2mで中世期の遺物包含層が３枚にわたって検出された。そのうち最下層は北へ傾斜することから、中世段階での遺構の存在が予想された。調査は平成15年８月18日から９月５日まで実施した。

①　層位(第14図)

検出した層位は下記のとおりである。

第１層　表土層。第２層　2.5Y4/3オリーブ褐色砂混じりシルト。近世期の遺物を含む。

第３層　7.5Y5/2灰オリーブ色砂混じりシルト。中世期の遺物が大半だが、近世期遺物を少量含む。

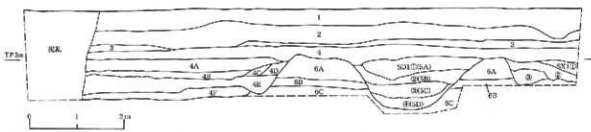
第４層　10YR5/3にぶい黄褐色細礫混じり細粒砂。中世期の遺物包含層。西壁断面では第４層の下部、第６層の上部に漸状の落ち込みが見られた。これは第６層上面を遺構面とする各種の遺構埋土と土質が大きく異なることから、便宜的に第４層の範囲内に捉えた。これらは第4A層から第4F層まで６層に区分できた。

第５層　遺構の埋土。第６層　検出した遺構のベース層。次の３層に区分できた。

第6A層　2.5Y5/3黄褐色粗粒砂。第6B層　5Y6/4オリーブ黄色粘土質シルト。

第6C層　5BG5/1青灰色粘土。植物遺体を含む。

第６層上面のレベルはT.P.約3.0mで第78次・第79次調査地と比較すると0.8mの比高差をもつ。



1　表土層　2　2.5Y4/3オリーブ褐色砂混じりシルト

3　7.5Y5/2灰オリーブ色砂混じりシルト　4　10YR5/3にぶい黄褐色細礫混じり細粒砂

4A　10YR5/1褐灰色粘土　4B　N3/灰色粘土　4C　第4B層主体に第6A層が混じる　4D　第6A層主体に第4B層が混じる

5A～5D　遺構(SD1)の埋土　6A　2.5Y5/3黄褐色粗粒砂　6B　5Y6/4オリーブ黄色粘土質シルト　6C　5BG5/1青灰色粘土、植物遺体を含む

第14図　第80次調査西壁断面図

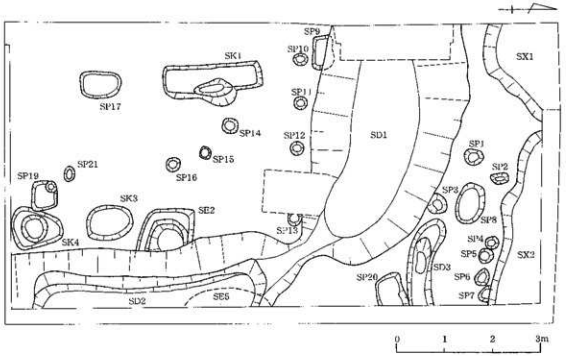
② 遺構(第15図)

主要な遺構のみ説明を加えていく。ピットの規模については別掲の表を参照されたい。

濠 2条検出した。

SD1は東西方向の濠である。全長5.0mを確認した。遺構の規模に比して底面のレベル差はほとんど認められず、滞水状況であったことがうかがわれる。断面形は緩やかな逆台形をなす。幅はSD2との接続部付近が1.5m、濠中央部で2.9m、西端部で3.1mを各々測り、接続部から漸次端ほど開く形態をとる。深さは濠中央部で0.9m、西端部で1.2mを測る。濠内の堆積土は4層に区分される(第※図)。①層は10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに5Y3/2オリーブ黒色中粒砂ないし細粒砂混じりの粘土層が混合する層である。②層は10Y4/1灰色砂混じり粘土層。③層は5GY4/1暗オリーブ灰色砂混じり粘土層。④層は7.5GY4/1暗緑灰色粘土と第6C層の混合層であった。堆積土の観察から、まずベース層である第6C層を巻き込んで④層が堆積、その後砂混じり粘土層である③層・②層が徐々に堆積し、最終的に凹地状を呈したところに①層が埋まったものと推定される。①層は土坑などの埋土と共通していることから、濠機能時の堆積土ではなく、廃棄時の埋土と思われる。これらのことから濠SD1は空堀ではなく、断続的に流水していたことが知られる。また同規模の濠は既往の調査でも検出されており、第38次調査の「小堀」に相当する。濠の規模、断面形の形態、底面に何らかの施設を持たない点など、総合して考えると、城郭・城館に伴う濠遺構とは想定できない。この濠の性格については、別項で論じたい。SD1内の出土遺物は第17～19図に示した。土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・中世陶器・砥石・瓦などが出土した。先述のように④層はベース層を巻き込んでいるため、古相の遺物を多量に含んでいるが、新相の遺物の編年観から第2期岩江城期段階の所産と推定される。

SD2は南北方向の濠である。全長6.2mを確認した。SD1と同じく濠底面のレベル差はなく、滞水状況であったことがわかる。濠の西肩部のみの検出であり、断面形は不詳だが肩部から底面にいたる傾斜面の形状から、SD1と同じく緩やかな逆台形をなすものと思われる。底面への傾斜は2段に落ちるが、



第15図 第80次調査遺構平面図

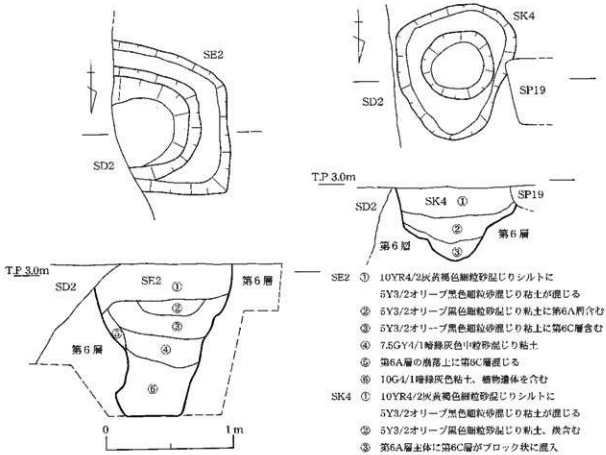
南端部で下面段が収束をみせることから、調査トレンチの南側すぐでSD2がとどまることがうかがわれる。現存長で幅1.3～1.5m、深さは0.7～0.9mを測る。規模の点でもSD1と同様と推定できる。濠内の堆積土はSD1と同じく4層に区分される。土質等は共通していた。出土遺物には土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・中世陶磁器・砥石・瓦などが見られる(第20～22図)。遺構の時期は第2期若江城期段階と推定される。

SD1とSD2とを一体の遺構として捉えることは可能であるが、その接続部(ないしは屈曲部)についてみていく必要があろう。接続部は2条の濠の接点でX字状に窄まる形態をとる。接続部の幅は1.1m、検出面からの深さは最大32cmを測る。濠の内側から、各外側へ通用するための施設で、土橋に相当すると考えられる。これらそれぞれの濠・土橋については別項で詳述したい。

土坑・井戸(第16図)　遺構検出時では、SE5を除き全て土坑と認識し各番号を付けていた。このうち1基は井戸であることが下部の掘り下げで判明した。このため、遺構の数字はそのままにし、遺構名のみを変更した。したがって土坑・井戸の全名称はSK1・SE2・SK3・SK4・SE5となる。

SK1は調査地の西側で検出した土坑である。平面形は長方形で、東側にピット状を呈する円形の膨らみをもつ。長軸2.1m、短軸0.6～0.7mだが、長軸の中央部では0.9mを測る。最深部は35cmである。埋土は5Y4/1灰色中粒砂混じりシルトに第6層が少量混じる層である。土壙墓状の形態をとるが、出土遺物は僅少で供献品とは見做しがたい。性格は不明である。出土遺物は古墳ないし奈良～平安時代に属するものが目立つが、遺構の時期は、他の土坑や井戸と同時期に位置づけられると考えている。

SE2(第16図)はSD2と切り合う井戸である。平面形は五角形状を呈すると考えられる。SE2の西南



第16図　SE2・SK4 実測図

は緩く傾斜するが、東面は底部付近で袋状に張り出す。規模は現存長で南北1.2m、東西0.9m、深さ1.2mを測る。埋土は5層に区分される。①層は10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに5Y3/2オリーブ黒色中粒砂ないし細粒砂混じりの粘土層が混合する層である。②層は5Y3/2オリーブ黒色中粒砂ないし細粒砂混じりの粘土層で炭化物を含む。③層は②層を主体に第6C層(青灰色粘土層)が混じる層である。④層は7.5GY4/1暗緑灰色砂混じり粘土で中粒砂のラミナが認められる。⑤層は第6A層(黄褐色粗粒砂層)に第6C層が混じる層で、地山層の崩落土と見られる。⑥層は10G4/1暗緑灰色粘土で、植物遺体や木片を含む層である。土層の観察から①～③層が井戸の埋土、④～⑥が堆積土と考えられる。⑥層の最下面、井戸の底面で完形の瓦器椀2点、瓦器皿2点、土師器皿1点が出土した(図版8)。井戸祭祀に伴う遺物であろう。これらの一括遺物は11世紀末葉に位置付けられ、井戸の機能時期が推定できる資料である。

SK4(第16図)は調査地南端部で検出した土坑である。平面形は洋梨形の円形状を呈する。土坑の中央部でピット状の円形凹地がある。規模は南北1.1m、東西1.0m、深さ0.6mを測る。埋土は3層に区分される。①・②層はSE2の①・②層と共通する。③層はSE2の⑤層と同様で第6層(ベース層)の混合土である。出土遺物は土師器皿などが見られる。遺構の時期は12世紀段階に位置づけられる。

SE5(図版9)は調査地の東壁断面で検出した。溝SD2が東壁面に併行して走り、深い規模をもつため、現場の保全を図る意味から東壁面には幅30cm前後の犬走りを設けていた。現場の最終日に埋め戻しを兼ねて犬走りを除去したところ当該の井戸を検出したものである。井戸の全径は1.94mを測る。深さは検出面から0.93mまで確認した。井筒には底部を打ち欠いた土師器羽釜(第23図155)1段と木製曲物2段を使用している。井筒径は0.64mを測る。遺構の時期は、供用の羽釜から13世紀代と推定される。

ピット　規模・形状は下表に掲げた。径30cm前後の円形のものが多い。溝SD1の南岸部に、SP10-SP11-SP12-SP13が併行する。SP10-SP12間は1.8m(6尺)、SP12-SP13は1.5m(5尺)である。種列と考えられる。

第2表　岩江遺跡第80次調査ピット一覧表

遺構名		平面形態	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	埋土	備考
SP	1	円形	39	33	13	A	
SP	2	楕円形	36	24	6	A	
SP	3	円形	40	36+	15	A	
SP	4	円形	26	－	13	A	
SP	5	円形	31	－	9	A	
SP	6	円形	37	29	11	A	
SP	7	円形	35	25+	8	A	
SP	8	楕円形	89	59	21	A	小土坑状
SP	9	方形	74	45	20	B	
SP	10	円形	31	26	10	A	
SP	11	円形	29	－	9	A	
SP	12	円形	29	－	11	A	
SP	13	円形	28	24+	15	A	
SP	14	円形	35	32	14	A	
SP	15	円形	26	22	7	A	
SP	16	円形	30	－	9	A	
SP	17	楕円形	85	55	30	A	小土坑状
SP	19	方形	56	53	42	C	
SP	20	方形	73+	62	19	A	
SP	21	円形	34	24	11	A	

埋土：A:10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに第6層が混入
B:5Y4/1灰色中粒砂混じりシルトに第6層がブロック状に混入
C:7.5GY4/1暗緑灰色シルト質粗粒砂

③　出土遺物

弥生時代～近世期の遺物がある。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦、土製品、石製品などが出土した。以下、遺構及び遺物包含層などに分けて説明する。口縁部のヨコナデ調整はすべての器種に認められるので記載を省略する。

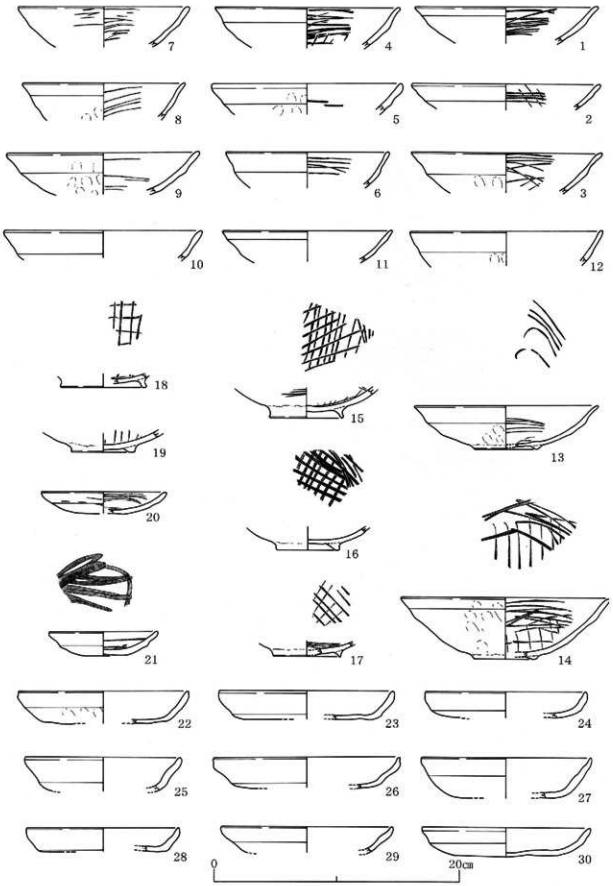
ＳＤ１（第17～19図１～84）

瓦器・土師器・須恵器・陶磁器・瓦・砥石がある。

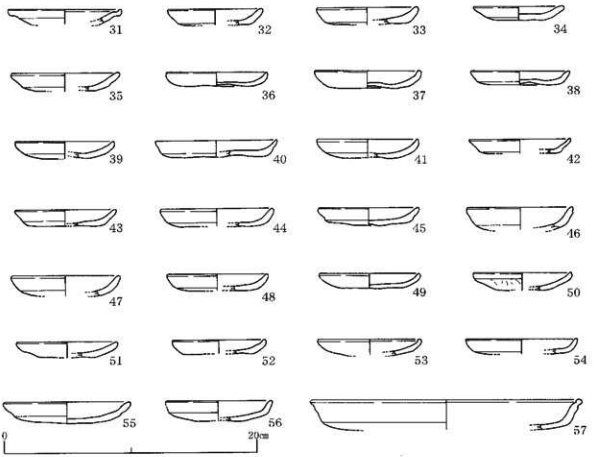
瓦器には椀・皿・羽釜の器種がある。1～19は椀である。体部は内弯し、口縁部がやや外反するもの(1～4・8～9・13)と体部から口縁部にかけて内弯しながら立ち上がるもの(5～7・10～12・14)がある。口縁端部は丸く終わる。いわゆる和泉型である（以下省略）。底部は断面が台形の高台を貼り付けるもの(13・14・16・18・19)、三角形の高台を貼り付けるもの(15・17)がある。体部外面に指頭圧痕が残るもの(3・5・8・9・12～14)がある。内面は不規則で粗いヘラミガキ調整するもの(1～9・13・14)、ナデ調整するもの(10～12)がある。13・14・19は見込み部に平行線状の暗文を施す。15～18は斜格子状の暗文を施す。20・21は皿である。底部から口縁部までなだらかに内弯しながら立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。内面は粗いヘラミガキ調整する。21は外面にナデ調整、見込み部にジグザグ状の暗文を施す。75～78は三足羽釜である。75は口縁部が内傾し、口縁端部は面をもつ。鍔は水平に伸び、端部は尖り気味に終わる。内面はハケメ調整する。76～78は脚部である。断面形が円形を呈する。1～9・13・14・19・21は13世紀前葉～中頃、10～12は14世紀、15～18・20は12世紀中頃～13世紀初頃、75～78は13世紀後葉～14世紀前葉と思われる。

土師器には皿・甕・羽釜・壺の器種がある。中世期の土師器皿については口径10cm未満を小皿、10cm以上12cm未満を中皿、12cm以上を大皿とする。22～30は大皿である。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がるもの(22～28・30)と外上方に伸びるもの(29)がある。底部は平底が多いが30は上げ底を呈する。口縁端部は面をもつもの(23～29)と丸く終わるもの(22・30)がある。内外面はナデ調整する。22は体部外面に指頭圧痕が残る。31～56は小皿である。57は大皿である。口縁端部は外反した後、内へ肥厚するもの(31・57)、体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がるもの(36・37・40・41・44～56)、外上方に伸びるもの(32～34・38・39)、外へ開き気味に立ち上がるもの(35・42・43・45)がある。底部は36～39が上げ底である。口縁端部は丸く終わるものが多いが40は尖り気味に終わる。31～39・41～44・46～56は内外面をナデ調整する。32・39・45・57の調整法は不明である。58～60は甕である。58は口縁部が内弯気味に立ち上がり、口縁端部が丸く終わる。内外面をハケメ調整する。59は口縁部がくの字形に外反し、口縁端部が面を持つ。外面はハケメ調整、内面は工具によるナデ調整する。60は口縁部が外反し、口縁端部を上方へつまみ上げる。外面はハケメ調整、内面はハケメ調整した後工具によるナデ調整する。61・62は羽釜である。61は体部が内弯する。口縁部はくの字形に外折する。鍔はやや外上方に伸び、端部が丸く終わる。外面はナデ調整、内面は工具によるナデ調整した後ハケメ調整する。62は口縁端部が外方に肥厚する。外面はナデ調整、内面はヨコナデ調整する。63は把手である。角状を呈し、把手下面に指頭圧痕が残る。22～30・32～56・62は13～14世紀、31は11～12世紀、57～60・63は奈良～平安時代、61は12世紀、62は13世紀と思われる。

須恵器には高杯・杯・甕・器台・鉢の器種がある。64は杯である。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。65は高杯である。脚部はなだらかなハの字形に広がる。内外面は回転ナデ調整する。66・67は杯である。底部に八の字形を呈する高台がつく。66は高台端部が内側に接地する。内外面は回転ナデ調整する。67は内外面に回転ナデ調整、外面端を回転ヘラケズリ調整する。68は器台である。口縁部が内傾し、外上方に伸びる。口縁端部は外に肥厚する。外面は



第17図　第80次調査SD1出土土器実測図



第18図　第80次調査SD1出土土器実測図

カキメ調整、内面は青海波の当て具痕が残る。69は甕である。69は口縁部が外反して、外上方に伸びる。口縁端部は上下に拡張し、面をもつ。外面はタタキ調整の後、回転ナデ調整する。内面は回転ナデ調整する。70は常滑・渥美焼系の甕の底部である。平底である。外面はタタキ調整、内面は青海波の当て具痕が残る。71～74は東播系の捏鉢である。体部は直線的に立ち上がる。口縁端部はやや上方へつまみ上げて面をもつもの(72･73)、上方に拡張するもの(74)がある。内外面は回転ナデ調整する。74は口縁端部に自然釉が残る。65・68・69は古墳時代、66・67は奈良～平安時代、64・71～73は12～13世紀、70・74は14世紀代と思われる。

陶磁器には青磁碗・白磁碗・国産陶磁器碗などの器種がある。79は龍泉窯系の青磁碗である。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は丸く終わる。内外面に施釉する。80は白磁碗である。高台は高く、台形を呈する。内面に施釉する。81は信楽焼系の壺の底部である。内外面は回転ナデ調整し、外面底部に糸切り痕が残る。82は瀬戸美濃焼の天目茶碗である。高台は低く台形を呈する。外面に鉄釉を施釉する。79・80は12世紀～13世紀後葉、81は16世紀後半、82は15世紀後半に属すると考えられる。

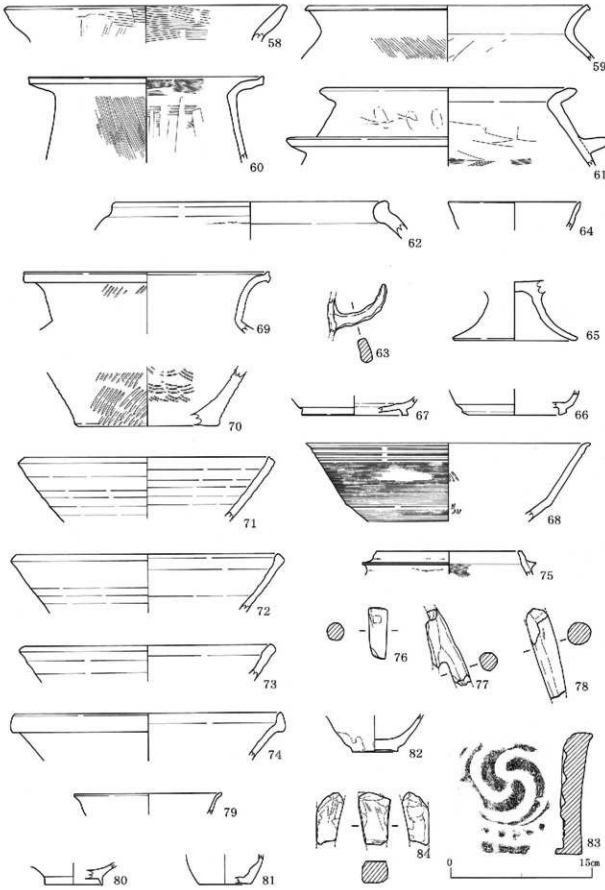
83は軒丸瓦である。右廻りの巴文である。珠文は5個残る。瓦当裏面はナデ調整する。13世紀代と思われる。

84は砥石である。長方形を呈し、3面を使用している。

ＳＤ２（第20～22図85～138）

土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・砥石・瓦がある。

土師器には甕・羽釜・皿の器種がある。85は甕である。口縁部がくの字形に外反し、口縁端部は面

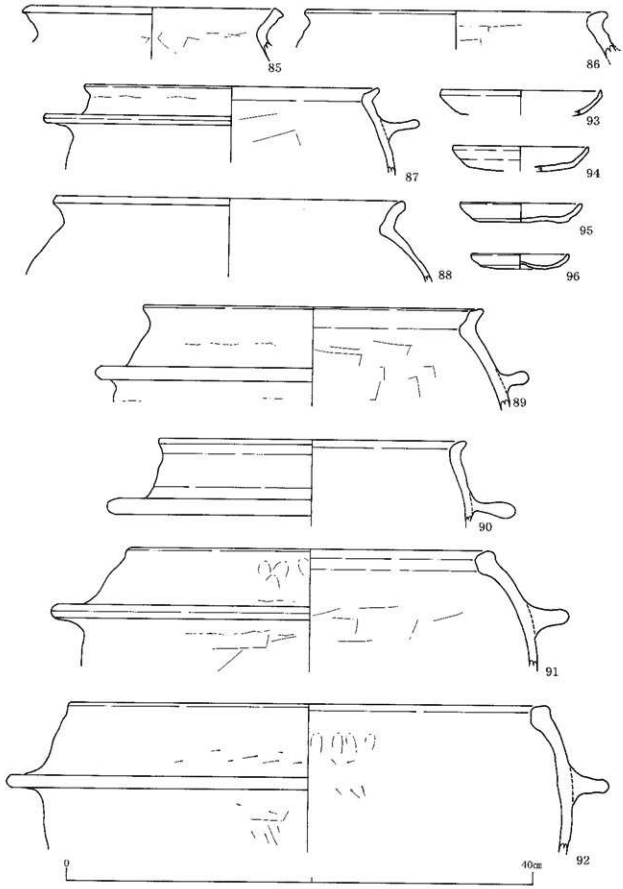


第19図　第80次調査SD1出土土器実測図

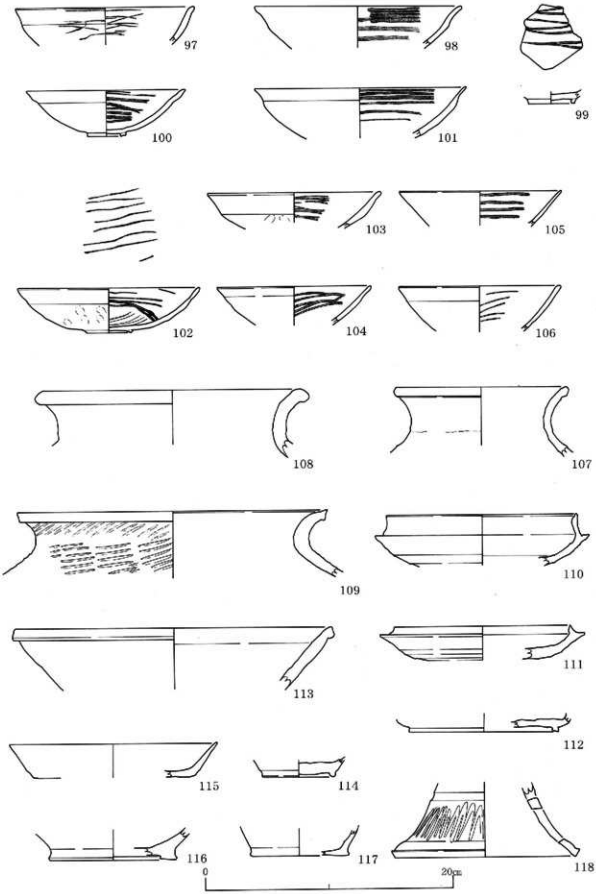
をもつ。内外面は工具によるナデ調整する。86～92は羽釜である。体部は内弯する。86は口縁部が短く外反し、口縁端部は丸く終わる。内外面は工具によるナデ調整する。87は口縁部が短く外反し、口縁端部は丸く終わる。鍔はやや外上方に伸び、端部は丸く終わる。内外面は工具によるナデ調整する。88は口縁部が長く外反し、口縁端部は丸く終わる。外面はナデ調整、内面の調整法は不明である。89は口縁部が外反し、口縁端部は面を持つ。鍔は短く、やや外上方に伸びる。端部は丸く終わる。内外面は工具によるナデ調整する。90は口縁部が短く外反し、口縁端部は丸く終わる。鍔はやや下方に伸び、端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。91・92は口縁端部が内側へ肥厚し、丸く終わる。鍔は水平に伸び、端部は丸く終わる。91は外面にケズリ調整、内面に工具によるナデ調整する。外面に煤と指頭圧痕が残る。92は内外面をケズリ調整する。外面に煤が付着し、内面に指頭圧痕が残る。93は大皿、94は中皿である。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁端部は面をもつ。内外面はナデ調整する。95・96は小皿である。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。95は平底で、96は上げ底である。内外面はナデ調整する。85は奈良～平安時代、86は13世紀、87～90は12世紀、91・92は14世紀、93～96は13～14世紀と思われる。

須恵器には甕・杯身・皿・鉢・壷・器台の器種がある。107～109は甕である。107・108は口縁部が外反する。口縁端部はやや外側へ肥厚し、丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。109は口縁部が外反し、口縁端部は面をもつ。外面はタタキ調整、内面は回転ナデ調整する。110～112は杯身である。110は立ち上がり部が内傾して伸びる。口縁端部は内傾して面をもち、1条の沈線を廻らす。受部は水平に伸びる。体部外面は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。111は立ち上がり部が内傾して伸び、口縁端部は丸く終わる。受部は水平に伸びる。底部は浅く、ほぼ平底である。112は底部である。底部は平底であり、底部端よりやや内側に八の字形の高台がつく。底部外面は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。113・114は鉢である。113は体部が外上方へ直線的に立ち上がる。口縁端部は外側に肥厚し、丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。114は底部である。底部は平底であり、底部端よりやや内側に八の字形の高台がつく。内外面は回転ナデ調整する。115は皿である。体部は外上方に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。116・117は壷の底部である。116は高台が低く台形を呈する。内外面は回転ナデ調整する。117の底部は平底であり、底部端よりやや内側に八の字形の高台がつく。内外面は回転ナデ調整。118は器台。脚部は八の字形に広がる。三角形の透かし孔を二段施し、外面は波状文を施す。内外面は回転ナデ調整。107・108・110・111・118は古墳時代、112・114・116は奈良～平安時代、109・113は12～13世紀。

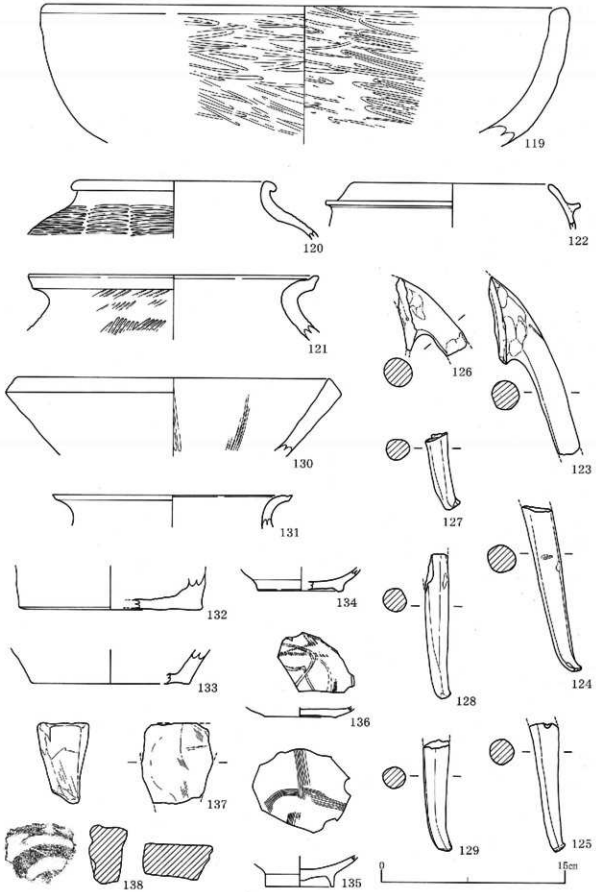
瓦器には椀・火舎・甕・羽釜の器種がある。97～106は椀である。体部は内弯し、口縁部がやや外反するもの(98・100・101・104)、体部から口縁部にかけて内弯しながら立ち上がるもの(99・102・106)、体部から外上方に伸びるもの（105）がある。口縁端部は丸く終わる。底部は断面が台形の高台を貼り付けるもの(97)がある。外面はナデ調整するものが多いが、99は不規則で粗いヘラミガキ調整する。102・103は体部外面に指頭圧痕が残る。内面は不規則で粗いヘラミガキ調整する。97は見込み部にジグザグ状の暗文を施す。102は見込み部に平行線状の暗文を施す。119は火舎である。体部は内弯しながら立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。外面はケズリ調整の後ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整の後ヘラミガキ調整する。120・121は甕である。120は体部が内弯する。口縁部はやや外反し、口縁端部は外下方へつまみだして丸く終わる。外面は平行のタタキ調整する。121は口縁部が外反する。口縁端部は外反し、外上方へ拡張する。口縁端部は丸く終わる。外面はタタキ調整する。122～129は三足羽釜である。122は口縁部である。体部は内弯し、口縁端部は丸く終わる。鍔は短く水平に伸び、端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。123～129は脚部である。断面形が円形を呈する。97・99



第20図　第80次調査SD2出土土器実測図



第21図　第80次調査SD2出土土器実測図



第22図　第80次調査SD2出土土器実測図

は12世紀前葉～後葉、98・100～106は13世紀前葉～中頃、119・121～129は13～14世紀、120は15世紀前半と思われる。

陶磁器には鉢・甕・青磁皿・白磁碗の器種がある。130は備前焼の擂鉢である。体部は外上方に直線的に立ち上がる。口縁端部は面をもつ。内面に擂り目を施す。131は常滑焼の甕である。口縁部は外反する。口縁端部はやや外反し、外上方へ拡張する。口縁端部は丸く終わる。132は瓶子類の底部である。垂直に立ちあがって伸びる。底部外面はケズリ調整、他は回転ナデ調整する。133は鉢または甕の底部である。平底。体部は外上方に直線的に立ちあがる。内外面は回転ナデ調整する。134・136は白磁の碗である。134は高台が低く台形を呈する。内外面は回転ナデ調整する。内面に施釉する。136は高台が高く台形を呈する。内外面に施釉し、内面に櫛描きによる線条文を施す。135は青磁皿である。体部はやや内弯する。内外面に施釉する。内面はヘラ描きによる割花文の中に櫛描きによる地文を施す。130・131・134～136は12～13世紀と思われる。

137は硯石である。長方形を呈し、4面を使用している。

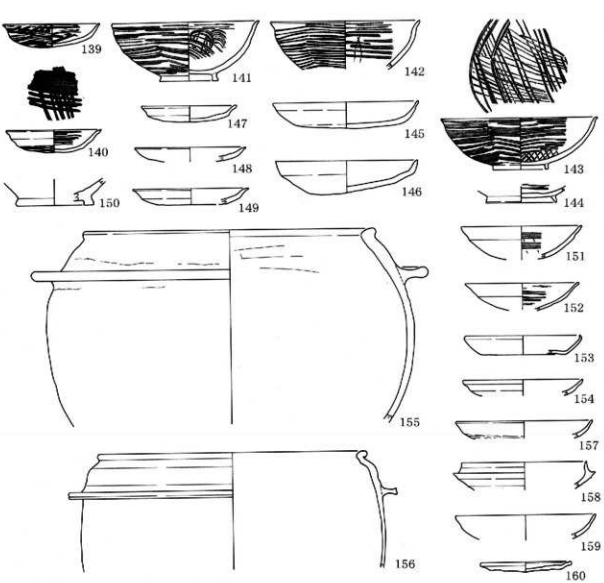
138は軒丸瓦である。巴文で、瓦当表面はナデ調整する。

ＳＥ２（第23図139～150）　瓦器には椀・皿の器種がある。139・140は皿である。139は底部から口縁部までなだらかに内弯しながら立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。外面は四分割のヘラミガキ調整、内面は不規則で密なヘラミガキ調整する。140は底部から口縁部までなだらかに内弯しながら立ち上がり、口縁部内側に沈線が廻る。外面は体部下半のみ四分割のヘラミガキ調整、内面は不規則で密なヘラミガキ調整する。見込み部に斜格子状の暗文を施す。141～144は椀である。141は体部が内弯し、口縁部がやや外反する。高台は台形を呈する。外面は四分割のヘラミガキ調整、内面は口縁部にヘラミガキ調整、体部にラセン状のヘラミガキ調整する。142は体部が内弯し、口縁部がやや外反する。外面は四分割のヘラミガキ調整、内面は不規則で密なヘラミガキ調整する。143は体部が内弯し、口縁部がやや外反する。高台は長方形を呈する。外面は四分割のヘラミガキ調整、内面は密なヘラミガキ調整する。見込み部に斜格子状の暗文を施す。144は底部である。高台が台形を呈する。内面はヘラミガキ調整する。139～144は11世紀末葉～12世紀前葉と思われる。

土師器には大皿・小皿がある。145・146は大皿である。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。146は内面に煤が付着する。147～149は小皿である。体部は内弯し、口縁部は外反する。口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。145～149は12世紀代と思われる。150は須恵器椀の底部である。高台は台形を呈する。内外面は回転ナデ調整する。奈良～平安時代と思われる。

ＳＥ５（第23図151～156）

151・152は瓦器の椀である。体部は内弯し、口縁部がやや外反する。外面はナデ調整、内面は不規則で粗いヘラミガキ調整する。13世紀後半頃と思われる。土師器には皿・羽釜の器種がある。153・154は小皿である。153は体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がる。口縁端部は内側に肥厚し、丸く終わる。内面はナデ調整する。154は体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。155・156は羽釜である。体部は内弯する。155は口縁部が短く外反し、口縁端部は丸く終わる。鍔は水平に伸び、端部は丸く終わる。内外面は工具によるナデ調整する。156は口縁部を外側に短く折り曲げる。口縁端部は丸く終わる。鍔は水平に伸び、端部が丸く終わる。内面はナデ調整、外面の調整法は不明である。内外面に煤が付着する。153～156は13世紀代と思われる。



第23図　第80次調査SE2・SE5・SK1・SK4・SX1出土土器実測図

ＳＫ１（第23図157～158）

157は土師器の中皿である。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。外面はナデ調整後ヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。奈良～平安時代と思われる。

158は須恵器の杯身である。立ち上がり部は内傾して伸び、口縁端部は面をもつ。受部は水平に伸びる。体部外面は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。古墳時代。

ＳＫ４（第23図159～161）

土師器には椀・皿がある。159は椀である。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。160は小皿である。体部から口縁部にかけて浅く内弯気

味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。159・160は11世紀と思われる。

161は須恵器の高杯である。脚部は八の字形に広がり、端部近くに凹線をもち丸く終わる。三角形の透かし孔を一段施す。外面はカキメ調整、他は回転ナデ調整する。古墳時代。

ＳＸ１（第23図162～166）

土師器は高杯・皿の器種がある。162は高杯である。脚部はハの字形に伸びる。外面はナデ調整、内面はハケメ調整する。163は小皿である。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。162は古墳時代、163は13～14世紀と思われる。

須恵器は器台・杯身の器種がある。164は器台である。脚部はハの字形に伸びる。内外面は回転ナデ調整する。165は杯身である。立ち上がり部は内傾して伸び、口縁端部は丸く終わる。受部は水平に短く伸びる。体部外面は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。164・165は古墳時代。

166は備前焼の甕の底部である。体部は外上方に直線的に伸びる。内外面は回転ナデ調整、底部はケズリ調整する。内面に酸化鉄が付着する。

第３層（第24図167～181）

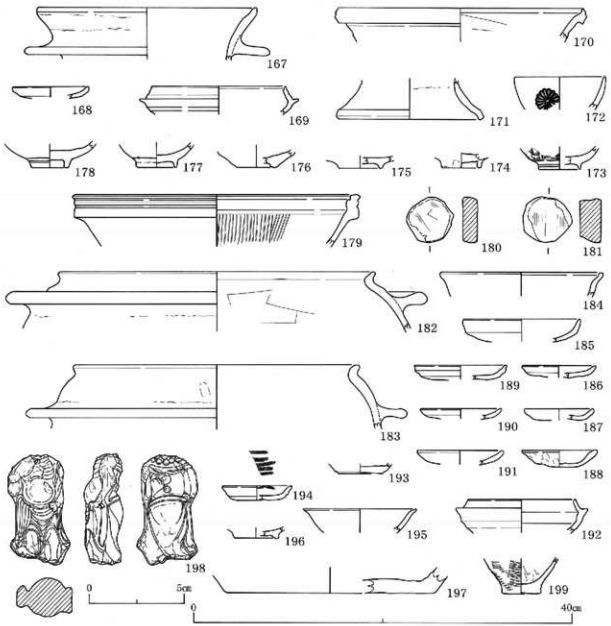
土師器には羽釜・皿の器種がある。167は羽釜である。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。鍔は水平に伸び、端部が丸く終わる。内外面はナデ調整する。168は小皿である。体部から口縁部にかけて浅く内弯気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。167は古墳時代かと思われる。168は13世紀代。須恵器には杯身・甕・高杯の器種がある。169は杯身である。立ち上がり部は内傾して伸びる。口縁端部は内傾して面をもち、１条の沈線を廻らす。受部は水平に伸びる。体部外面は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。170は甕である。口縁部は外反し、口縁端部は上下に短く拡張する。内外面は回転ナデ調整する。171は高杯である。脚部はハの字形に伸び、端部は内側に肥厚する。内外面は回転ナデ調整する。169～171は古墳時代。

陶磁器には鉢・擂鉢の器種がある。172～178は染付の碗である。172～174・177は透明釉を施している。172は体部が内弯し、口縁端部は丸く終わる。外面に菊花文を施す。173は高台が低く台形を呈する。外面に絵柄を施す。174は高台が高く台形を呈する。内外面に施釉する。175は高台が低い台形を呈する。内外面に施釉する。176は高台が低い台形を呈する。177は高台が丸みを帯び、台形を呈する。178は高台が高く台形を呈する。内外面に施釉する。内面に重ね焼きの痕跡が残る。179は備前焼擂鉢である。体部は外上方へ直線的に立ち上がる。口縁部は上方に拡張し、口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整、内面に原体数が５本の摺り目を施す。172～179は近世と思われる。

180・181は瓦製円盤である。瓦を円形に打ち欠き、円周部を研磨する。

第４層（第24図182～198）

土師器には皿・羽釜の器種がある。182・183は羽釜である。体部は内弯する。182は口縁部が短く外反し、口縁端部は丸く終わる。鍔はやや外上方に伸び、端部は丸く終わる。内面は工具によるナデ調整する。183は口縁部が短く外反し、口縁端部は丸く終わる。外面は煤が付着する。184は皿である。口縁端部は外反し、内へ肥厚する。口縁端部は丸く終わる。185は大皿である。186～191は小皿である。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。191は底部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。外面に指頭圧痕が残る。182・183は13世紀、184は奈良～平安時代、185～190は13～14世紀、191は16世紀と思われる。192・193は須恵器である。192は杯身である。立ち上がり部は内傾して伸び、口縁端部は丸く終わる。受部は水平に伸びる。体部外面は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。193は椀の底部である。底部はほぼ平底で、体部は外上方へ直線的に立ち上がる。内外面は



第24図　第80次調査第３・４・６層出土土器実測図

回転ナデ調整する。底部に糸切り痕が残る。192は古墳時代。

194は瓦器の皿である。底部から口縁部までなだらかに内弯しながら立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。内面は見込み部に平行線状の暗文を施す。13世紀前葉～後葉と思われる。

陶磁器には白磁碗・甕の器種がある。195・196は白磁の碗である。195は体部が内弯し、口縁部がやや外反する。口縁端部は丸く終わる。内外面に施釉する。196は高台が低い台形を呈する。内外面に施釉する。197は陶器の甕底部である。体部は外上方へ直線的に立ちあがる。外面はナデ調整、内面は回転ナデ調整する。常滑焼系と思われる。195・196は12～13世紀と思われる。

198は土製人形である。首、右手、足首は欠損している。正面の上半身は裸であり腹がでている。下半身は服を着ている。裏面は数珠と思われる飾りが肩の周りにある。

第６層（第24図199）

199は弥生土器の甕。底部はほぼ平底。内面は工具によるナデ、外面はタタキ調整する。後期。

5）まとめ

平成14年度から15年度にかけて、国庫補助事業で若江遺跡の発掘調査を3箇所実施した。それぞれは小規模な調査であるが、新たな知見を齎したことも多い。ここでは第80次調査の成果、とくに濠SD1・SD2についてまとめておきたい。

まず、出土遺物の年代観から濠の所属時期について考えてみたい。2つの濠では出土した瓦器椀・土師器皿とも13世紀後半を中心とした年代観を持ち、かつ古墳～奈良時代遺物が混在する。これらを除外すると、青磁碗(79)・備前焼甕(166)は15世紀代、瓦質上器甕(120)は15世紀前半にそれぞれ属し、少なくとも濠の埋没は15世紀前半を溯らないことがわかる。いっぽう、信楽焼壺(81)は16世紀後半とみられ、極めて稀薄ながら、これらの濠は16世紀後半、すなわち第2次若江城期(義継期ないし信長期)に埋没したものと推定できよう。

第80次調査地は、小字「東口」のすぐ東手にあたる。北面する市道若江55号線は調査地で鉤の手に屈曲し河内街道に至る。濠SD1・SD2は市道の屈曲に沿って逆L字形に配置されている。嘗て吉村(若松)博恵氏は飯田博一氏所蔵若江村絵図をもとに若江城の城域を復元された(吉村1987)。その復元案によると、第80次調査地はIV郭にあたり、「返見郭」と仮称された。また南接する長寿寺を含む若江地区では「かなりの寺が15・16世紀に存在したと考えられる。」とされている。長寿寺では東大阪市指定文化財の『紙本版画融通念仏縁起絵巻』3巻を所蔵されている(東大阪市教育委員会1991)。そのうちの応永版本は1394年に刊行されたものであり、資料伝来の可能性があるが、ほぼ室町時代を通じて寺院が存在したことが考えられる。差し当たり、城下の入口として寺院を背後に濠が設けられたことが推定される。

次に、濠の延長を考えてみたい。2案ある。先の城域復元案では長寿寺の北に、口字状に廻る道路が図示されている。まずこの道路内部に濠が廻る考え方である。いまひとつは、若江本町4丁目974番地付近で検出された濠との関連である。下水道築造に伴う第39次調査第1・2トレンチで少なくとも2条の東西濠が発見されている(財団法人東大阪市文化財協会2002)。第80次調査地とは西に約180m隔たるが、市道がほぼ直線状をなしていることから、この蓋然性も捨てきれない。この問題は第39次調査地と第80次調査地の中間地で、口字状道路を外れた西方で発掘調査に恵まれれば、判明すると思われる。

最後に濠の性格の問題がある。遺構の項でも記したように、濠としては規模が小さく、断面形も緩やかな逆台形を呈するところから見て、直接城館域郭に伴う施設といったイメージには結びつかない。むしろ城下の入口として、城下外と内部とを区画する濠としての性格が考えられる。

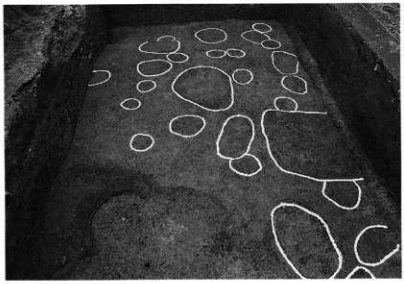
いずれにせよ、今回の調査によって村絵図及び城域復元案の信憑性が裏付けられたと考えられる。次には前川要氏が提唱した惣構え(前川1999)との関連が課題となろう。この点についてはさらに調査地周辺、とくに北方での濠の検出を通じて、その時期、方向など多角的な検討が必要である。

【参考文献】

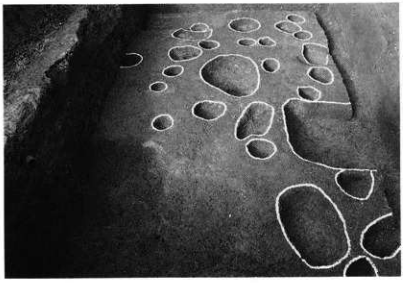
吉村博恵1987「絵図より見たる若江城」(『若江遺跡第25次発掘調査報告』、財団法人東大阪市文化財協会)
福永信雄1993「考察」(『若江遺跡第38次発掘調査報告』、財団法人東大阪市文化財協会)
前川　要1999「河内における中世若江城惣構えの復元的研究」(『光陰如矢』、「光陰如矢」刊行会)
東大阪市教育委員会1991『東大阪市の指定文化財』
東大阪市教育委員会2003『東大阪市の歴史と文化財〔改訂版〕』
財団法人東大阪市文化財協会2002『若江遺跡発掘調査報告集-第39,41,43次調査』

図版1　若江遺跡第78次調査　遺構

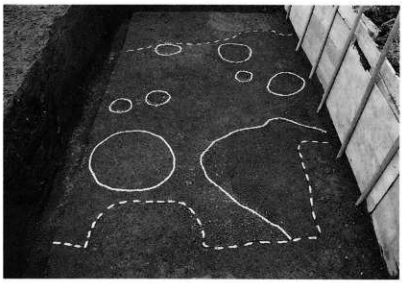
第78次調査地
調査前の状況（西より）



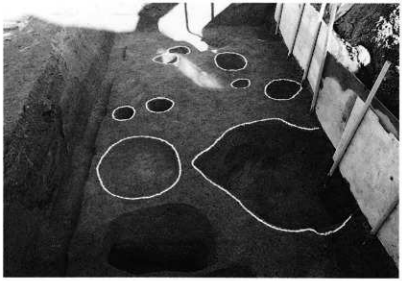
第78次東区
遺構検出状況
（南より）



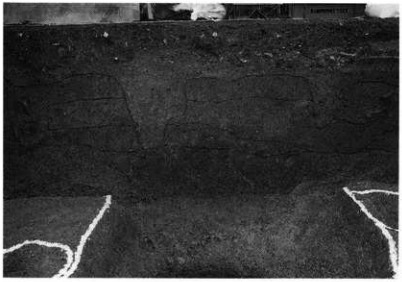
第78次東区
遺構掘削後状況
（南より）



第78次西区
遺構検出状況
（南より）



第78次西区
遺構掘削後状況
（南より）

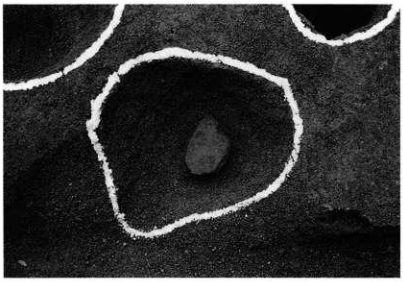


第78次東区
東壁断面

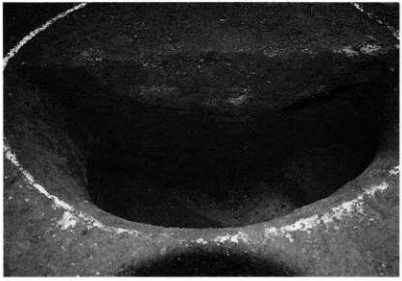
第79次調査地
調査前の状況（北より）

第79次遺構検出状況
（北西より）

第79次遺構掘削後状況
（北西より）



第79次SP52内根石検出状況

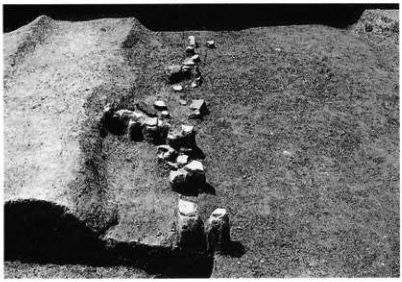


第79次SK2断面

第79次西壁断面

第80次調査地
調査前の状況（南東より）

第80次SD1検出状況
（東より）

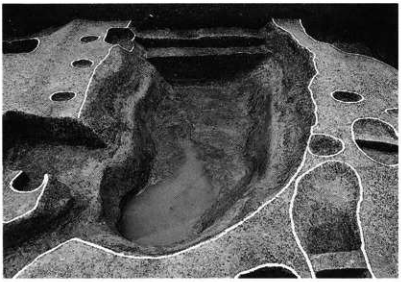


第80次SD1内遺物出土状況
（東より）

図版6　若江遺跡第80次調査　遺構

第80次遺構掘削後状況全景
（南より）

第80次遺構掘削後状況全景
（北より）

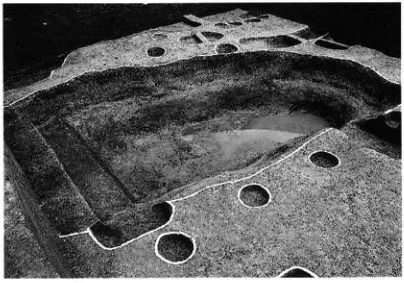


第80次SD1掘削後状況
（東より）

図版7　若江遺跡第80次調査　遺構

第80次SD2掘削後状況
（北より）

第80次SD1とSD2の接続部近景
（東より）



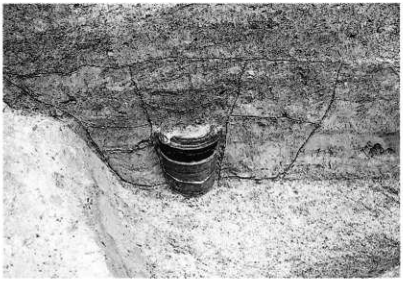
第80次SD1と柵列
（南西より）

第80次SE2断面

第80次SE2底面遺物出土状況

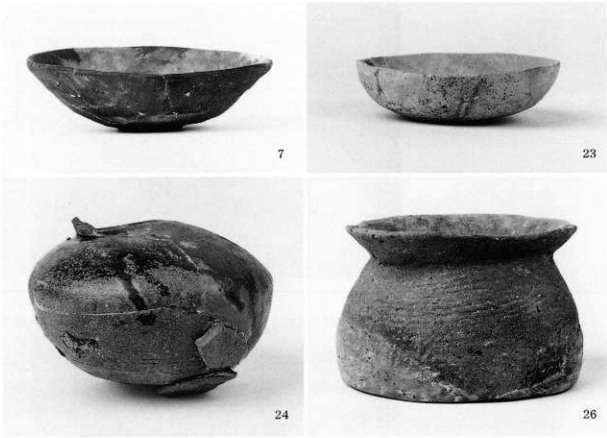
第80次SK4断面

第80次西壁〔SD1〕断面

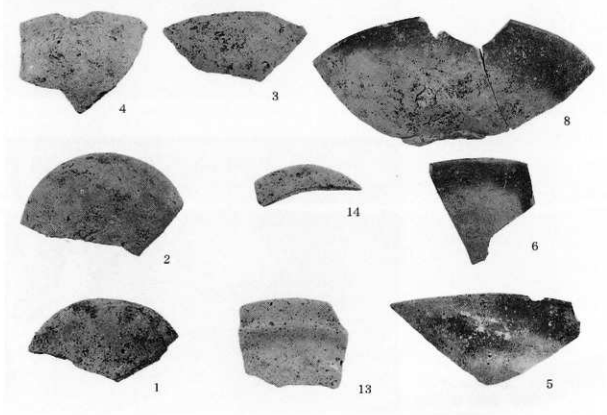


第80次東壁・SE5検出状況

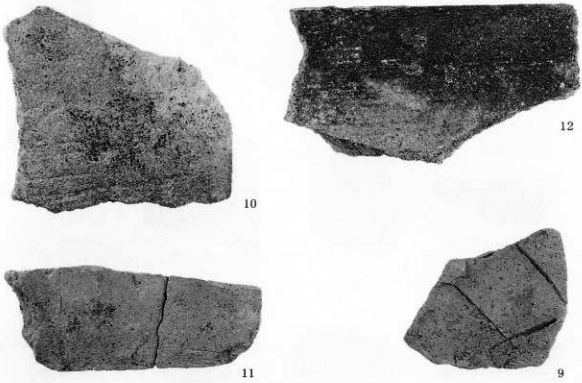
第80次SE5井戸枠
〔羽釜・曲物〕検出状況



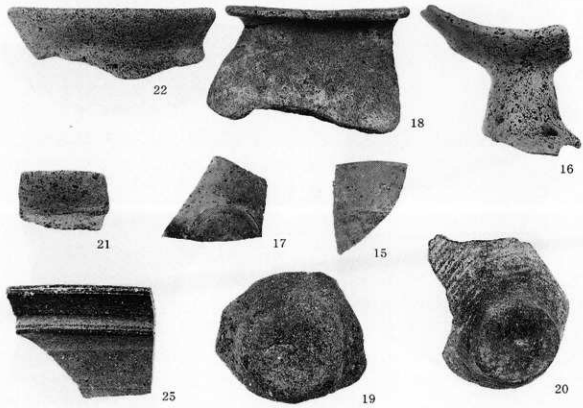
SK 1 出土瓦器椀　第4層出土須恵器杯身・平瓶　攪乱内出土弥生土器甕



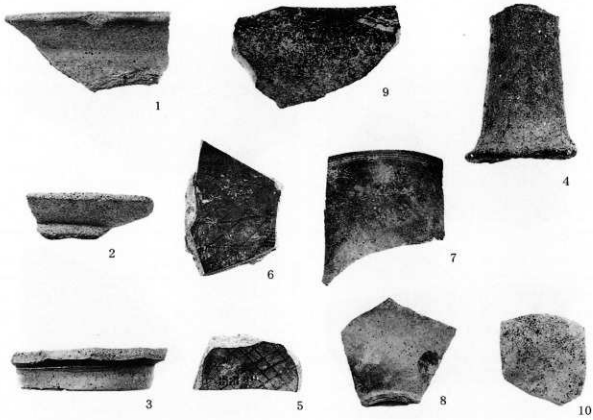
SK 1 出土土師器大皿・小皿、瓦器椀　SK 5 出土土師器鉢・小皿



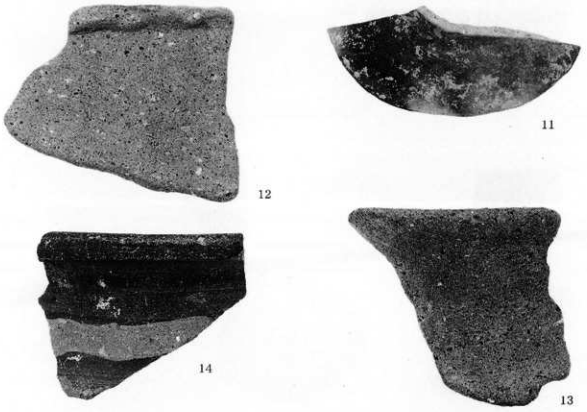
SK 1 出土軒平瓦・平瓦　SK 5 出土平瓦



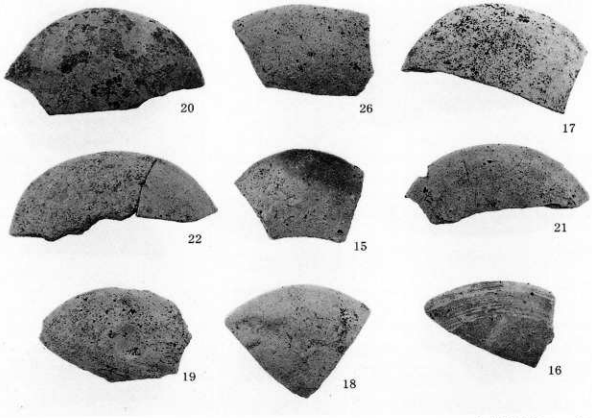
第3層出土瓦器椀、土師器高杯　第4層出土弥生土器甕・底部、庄内～布留式土器甕、須恵器甕



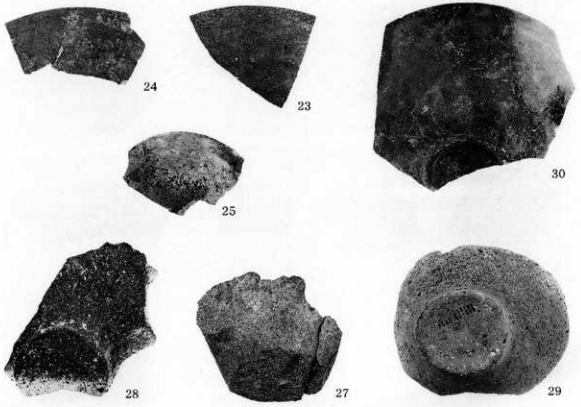
SK２出土須恵器甕　SK３出土土師器甕、灰釉陶器山茶碗　SP33土師器高杯・小皿、瓦器椀・火舎



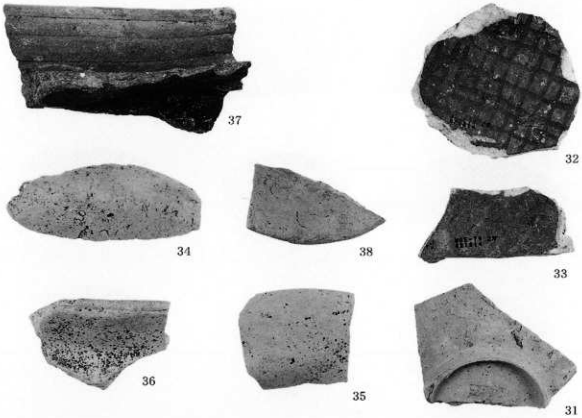
SP36出土土師器高坏　SP37出土縄文土器深鉢、SP38出土弥生土器壺、須恵器壺



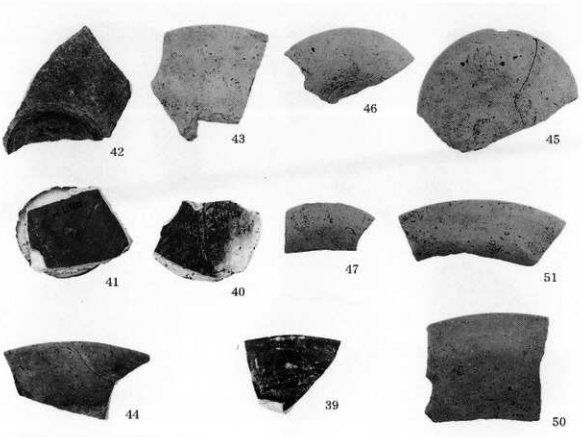
SP48出土土師器小皿・大皿



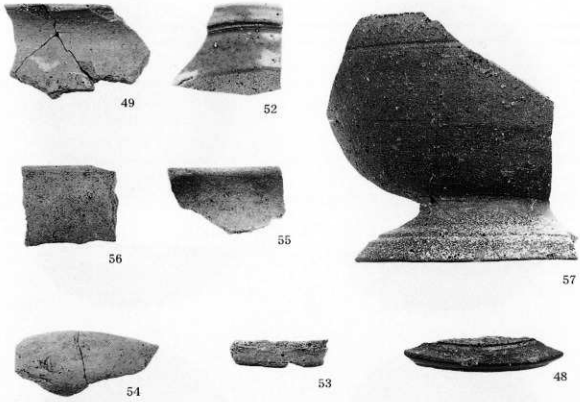
SP48出土瓦器椀・皿　SP49出土弥生土器底部　SP54出土弥生土器底部、瓦器椀



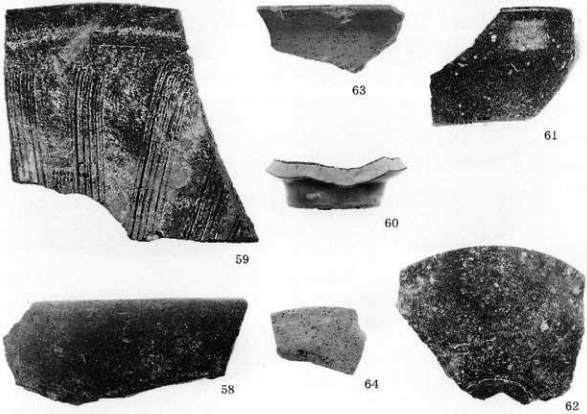
第2層出土瓦器椀、土師器中皿・大皿・竈・羽釜・高坏



第3層出土瓦器椀、土師器小皿・大皿



第3層出土須恵器脚台、土師器甕、白磁椀　第4層土師器杯ないし椀底部・大皿・甕・鉢、須恵器台付壺



東側溝出土瓦器火舎、丹波焼陶器擂鉢、青磁底部、瀬戸美濃焼天目茶碗　試掘坑出土瓦器椀、土師器甕・大皿

139′

140′

139

140

139″

140″

37

147

191

153

155

156

SD１出土土師器小皿　SE２出土瓦器皿、土師器小皿　SE５出土土師器小皿・羽釜　第４層出土土師器小皿

141′

143′

141

143

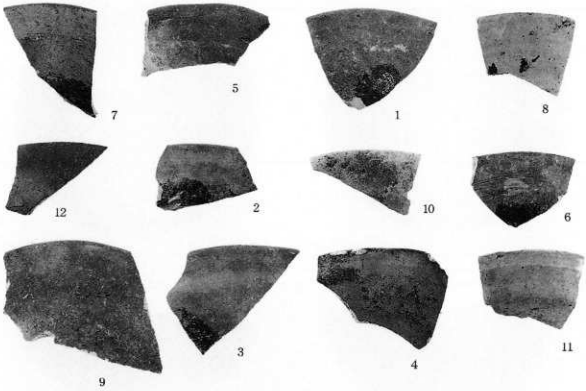
141″

143″

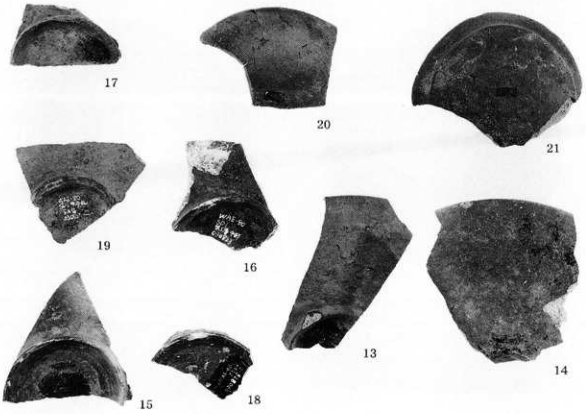
145

146

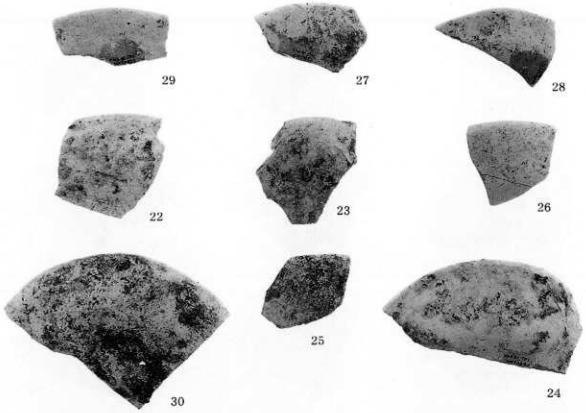
SE 2 出土瓦器椀、土師器大皿



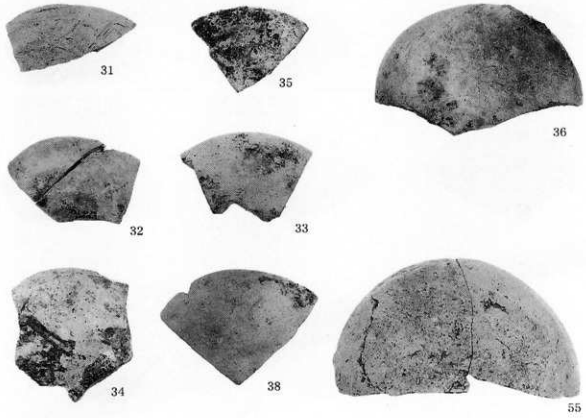
SD 1 出土瓦器椀



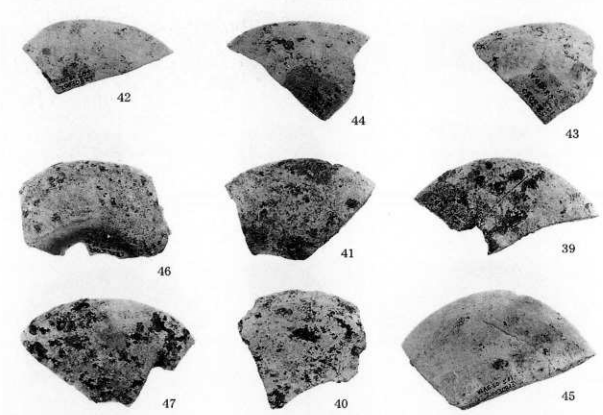
SD 1 出土瓦器椀・皿



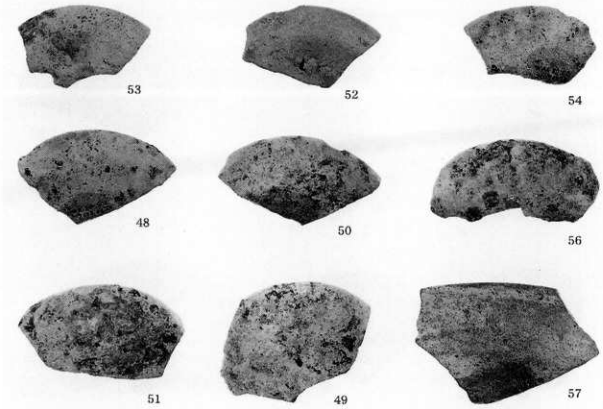
SD 1 出土土師器大皿



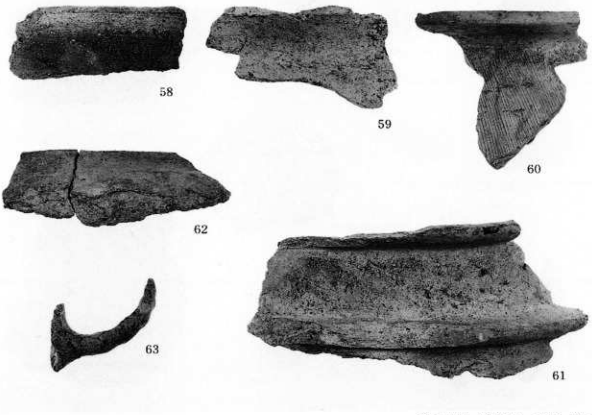
SD 1 出土土師器小皿



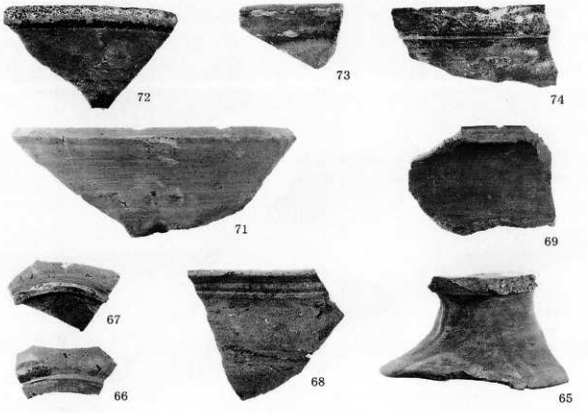
SD１出土土師器小皿



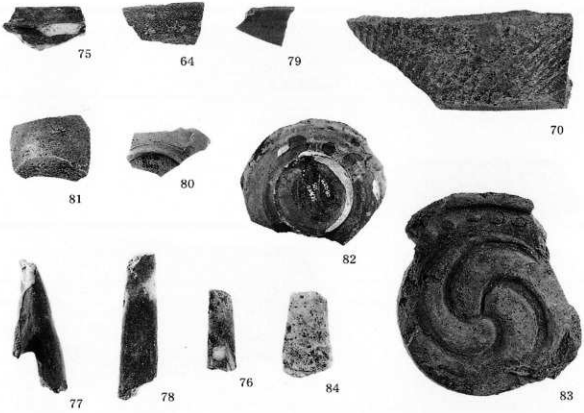
SD１出土土師器小皿・大皿



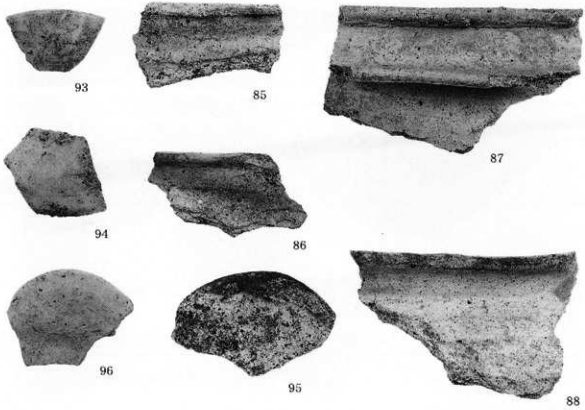
SD 1 出土土師器甕・羽釜・把手



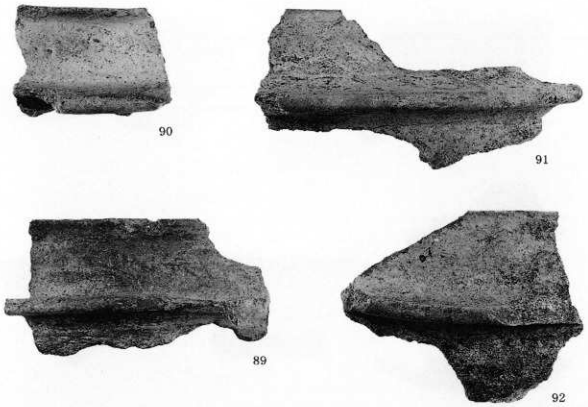
SD 1 出土須恵器高杯・杯・器台・甕・捏鉢



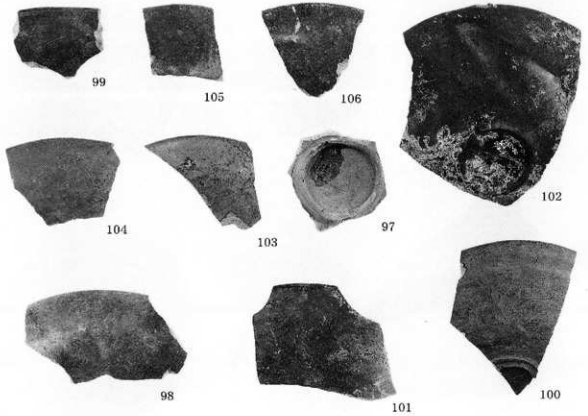
SD1出土須恵器杯、瓦器羽釜、青磁碗、白磁碗、常滑・渥美焼系甕、信楽焼系壺、瀬戸美濃焼天目茶碗、軒丸瓦、砥石



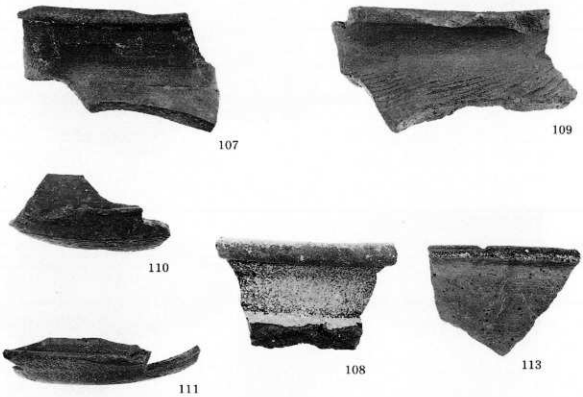
SD2出土土師器甕・羽釜・大皿・中皿・小皿



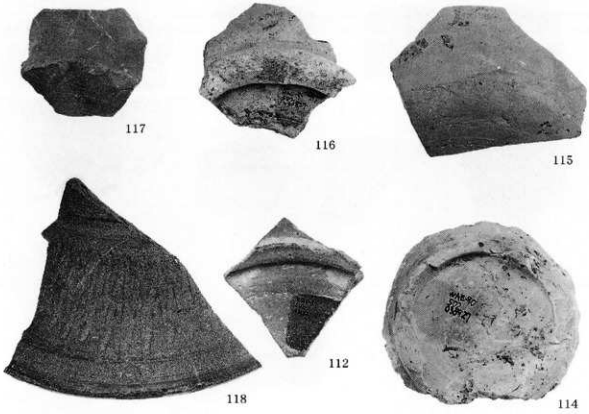
SD２出土土師器羽釜



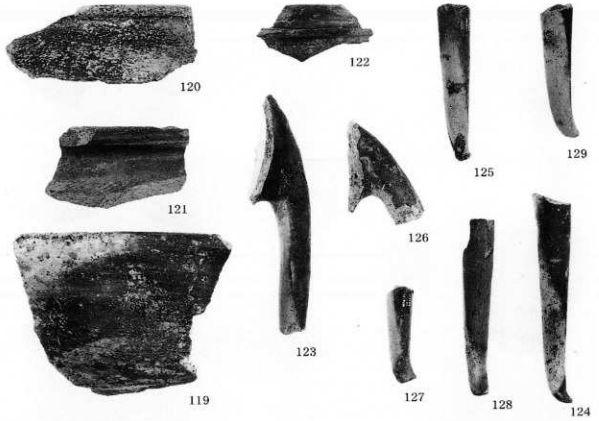
SD２出土瓦器椀



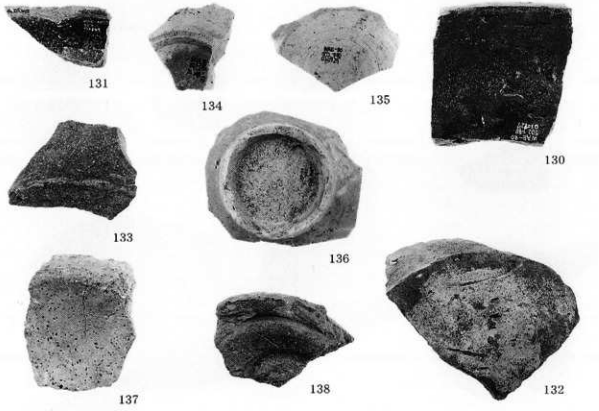
SD２出土須恵器甕・杯身・鉢



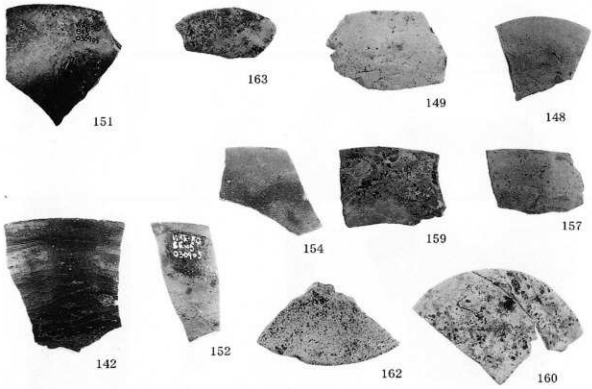
SD２出土須恵器杯身・皿・鉢・壺・器台



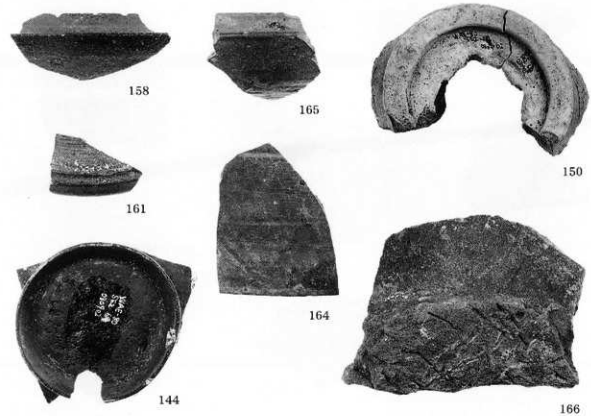
SD２出土瓦器火舎・甕・羽釜



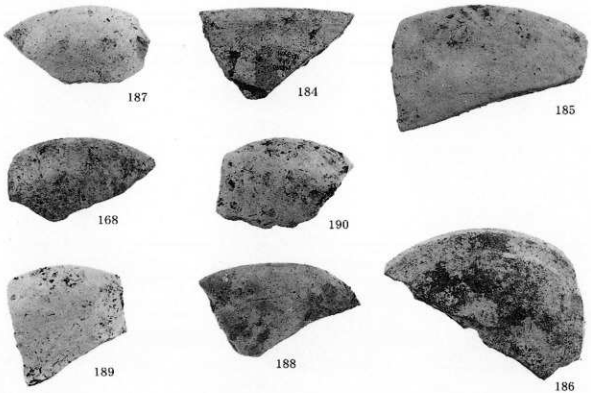
SD２出土備前焼摺鉢・常滑焼甕・瓶子、白磁碗、青磁皿、砥石、軒丸瓦



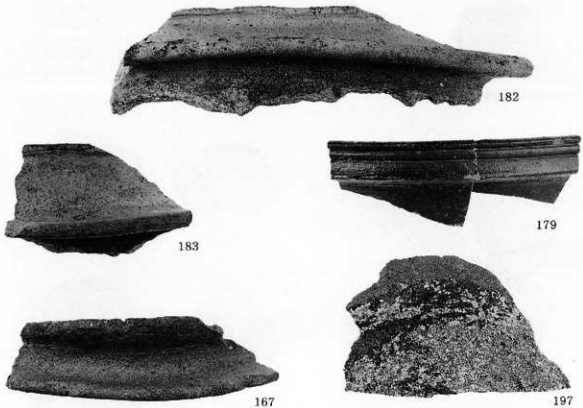
SD２出土瓦器椀、土師器小皿　SE５出土瓦器椀、土師器小皿　SK１出土土師器中皿
SK４出土土師器椀・小皿　SX１出土土師器高杯・小皿



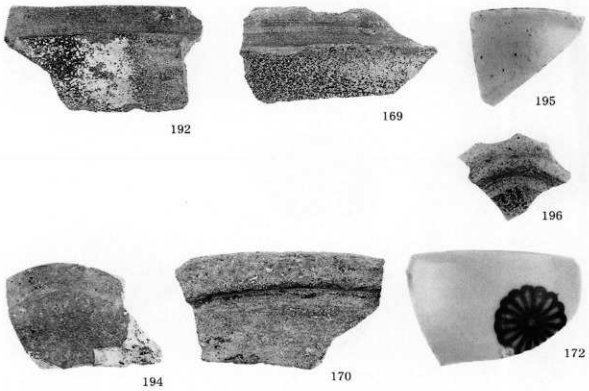
SE２出土瓦器椀、須恵器椀　SK１出土須恵器杯身　SK４出土須恵器高杯　SX１須恵器杯身・器台、備前焼甕



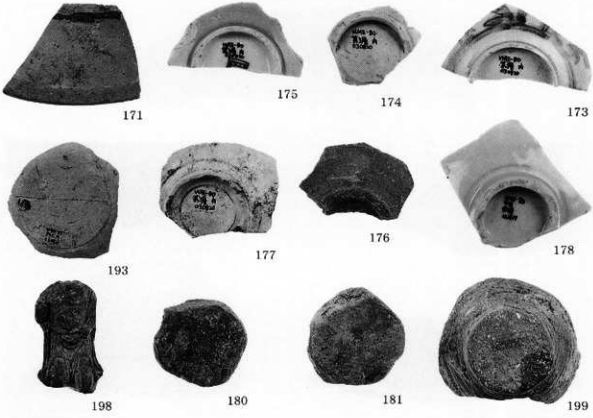
第3層出土土師器小皿　第4層出土土師器皿・小皿・大皿



第3層出土土師器羽釜、備前焼擂鉢　第4層土師器羽釜、陶器甕



第3層出土須恵器杯身・甕、染付碗　第4層出土須恵器杯身、瓦器皿、白磁碗



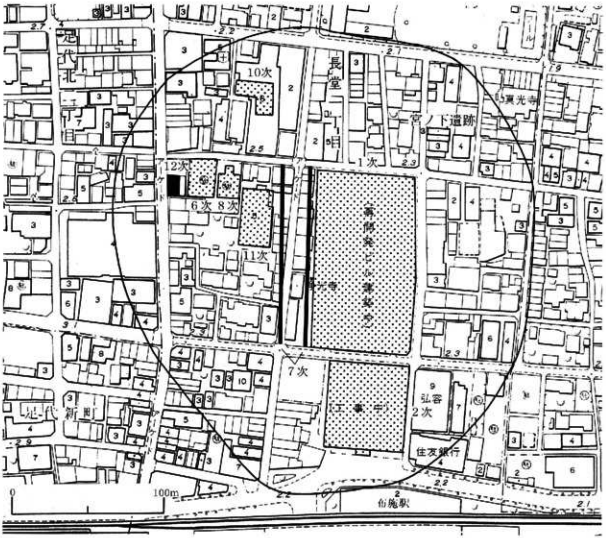
第3層出土須恵器高杯、染付碗、瓦製円盤　第4層出土須恵器椀、土製人形　第6層出土弥生土器甕

第５章　宮ノ下遺跡第12次発掘調査

１）はじめに

宮ノ下遺跡は、東大阪市長堂１丁目の南部から足代北２丁目の一部にかけて所在する、縄文時代晩期から室町時代にいたる集落跡・耕作地である。本遺跡は、旧大和川の分流が形成する自然堤防上、現在の地表面で標高２m前後に立地している。遺跡は南北約300m、東西約250mの範囲に及ぶと推定されている。また、遺跡周辺は東大阪市最大の繁華街である近鉄布施駅北口に位置している。

平成14年12月、長堂１丁目70-6・70-11番地において、店舗付共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が個人より提出された。申請地は後述する第６次調査地のすぐ西隣にあたり、建物は杭打ち工事を予定されていたため、工事実施により埋蔵文化財の破壊が懸念された。そこで確認調査が必要な旨、東大阪市教育委員会は届出者に通知した。確認調査を平成15年１月に実施したところ、現地表下0.7mで13世紀代の瓦器椀・土師器皿を多量に含む遺物包含層を検出した。またその層準以上においても、瓦器椀・土師器皿を一定含む地層が認められた。このため届出者と東大阪市教育委員会は協議を重ね、事前の発掘調査を実施することで双方合意した。調査は平成15年２月６日から２月22日まで行なった。



第１図　宮ノ下遺跡の調査箇所位置図

2）宮ノ下遺跡の調査

宮ノ下遺跡の発見は、平成４年(1992)である。東大阪市の都市整備事業の一環として、近鉄布施駅北口の再開発事業が計画された。同年になり、本格的な工事計画が発表され、着工が決定された。東大阪市教育委員会では、事業者からの調査依頼に基づき、同年２月５日に試掘調査を実施した。その結果、設定した９箇所のトレンチのうち、２箇所から縄文～弥生時代の貝塚が検出され、他のトレンチからも弥生時代遺物の出土をみた。このことから工事予定地全体に遺跡が広がっていることが判明した。上地の字名から「宮ノ下遺跡」と命名された。この段階で事業者と協議を経た後実施したのが第１次調査である。第１次調査の成果から、本遺跡が河内湖南岸の湿地帯に形成された貝塚であるとともに、その上部には弥生時代中期中頃～後半に属する土坑やピットが微高地上に形成され、該期の集落が営まれたことも確認された。さらに古環境復元に迫る各種のデータを得ることができた。

第１次調査の西80mの地点で実施された第６次調査では、弥生時代遺構面から遥かに高位の層準で13世紀前半・14世紀後半の２時期にわたる中世期の遺構面が検出され、多数の溝・ピットなどの集落遺構とともに夥しい該期の遺物が出土した。従前から本遺跡の中世期遺構面の存在については注意が払われていたが、第６次調査の成果はそれを明確に追認したものであった。また集落跡だけではなく、古代～中世期の耕作地も確認された。これらのことから宮ノ下遺跡は史書に散見される「足代庄」との関連が注目されることとなった。この点については後述したい。

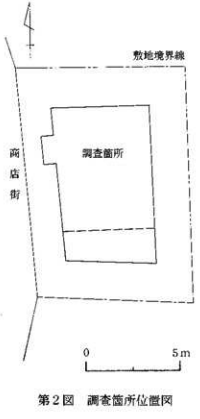
第１表　宮ノ下遺跡の調査一覧表

次数	調査原因	実施期間	調査面積(㎡)	調査地	調査主体	調査成果(遺構を中心とする)
1次	布施駅北口第一地区再開発事業	1992.7.6～1993.6.4	7000	長堂1丁目8	財団法人東大阪市文化財協会	・環濠帯に形成された縄文時代晩期末～弥生時代中期初頭の貝塚 ・中世～近世期の溝、井戸、湿地
2次	布施駅北口駐車場・放城調整池建設	1993.7.23～1994.1.21	3300	長堂1丁目	財団法人東大阪市文化財協会	・第1次調査検出の環濠谷の延長、環濠谷に接続する溝
3次	ビル建設	1993.7.1～1993.7.26	51	長堂1丁目74-3	財団法人東大阪市文化財協会	・弥生時代中期初頭の溝、ピット ・弥生時代中期中葉の土坑
4次	布施駅北口駐車場整備事業	1994.8.12～9.13	250	長堂1丁目	財団法人東大阪市文化財協会	
5次	布施駅北口再開発ビルの地下連絡通路建設	1995.1.9～2.1	125	長堂1丁目	財団法人東大阪市文化財協会	
6次	共同住宅建設	1995.4.12～6.29	298	長堂1丁目70-1,70-9	財団法人東大阪市文化財協会	・13世紀前半の台状遺構、溝、ピット ・14世紀後半の土壇墓り
7次	地下埋設管工事	1995.7～8	120	長堂1丁目	財団法人東大阪市文化財協会	
8次	共同住宅建設	1996.1.22～3.29	345	長堂1丁目70-2	財団法人東大阪市文化財協会	・①13世紀前半、②13世紀中頃、③13世紀後半、④14世紀前半、⑤14世紀後半以降、と5時期にわたる上坑、溝、井戸
9次	布施駅北口第二地区整備事業	1997.6	150	長堂1丁目63	東大阪市教育委員会	
10次	ビル建設	1998.4.28～5.29	100	長堂1丁目64-6	財団法人東大阪市文化財協会	・15世紀後半ごろの溝
11次	共同住宅建設	1999.11.1～2000.1.17	600	長堂1丁目74-1外11筆	財団法人東大阪市文化財協会	・弥生時代中期初頭の溝、土坑、柱穴群、杭列 ・弥生時代中期中葉の土坑 ・13世紀後半～14世紀前半の土壇り穴
12次	店舗付共同住宅建設(平成14年度国庫補助事業)	2003.2.6～2.22	41	長堂1丁目70-6,70-11	東大阪市教育委員会	本書

3）第12次調査の概要

調査地は旧建物の解体工事まで鮮魚店が営まれた箇所にあたり、北面・東面・南面にはマンションや商業ビルなどの建物が林立し、西面は東人阪市随 -の商店街であることから、安全の確保が第一に図られねばならなかった。そこで、大阪府教育委員会の指導を仰ぎ、東西南北の敷地境界線から1.5m離した区画を調査対象とすることになった。調査面積は41㎡ となった。さらに調査地の周辺環境から排土を場外に搬出することが不可能であるため、検出した遺構面のうち、遺構面Ⅲについては南端部を調査の対象外とし、断面調査など必要な措置を行なったのち、排土の仮置場とした。

また、調査進行の安全面を図る上から、確認調査の成果に鑑み、今回の調査目的を中世期の遺構面把握に置き、遺構面のベース層となる灰色粘土層までの掘り下げにとどめた。ただし、その範囲内でも深掘りの最終トレンチを設けるなどして、遺物の採集等に努めた。現地調査の最終段階で、後述の土器溜りSX1の西への広がりを確認するため、調査依頼者の諒解を求めた上で張り出し部を設けた。



第２図　調査箇所位置図

まず、発掘調査で得られた層位について説明をしていく。

第１層　盛土層ないし旧耕土層である。調査着手直前まであった旧建物は店舗であるが、おそらく戦後まもなくの商店街開業時のものと思われ、旧建物建築に伴う基礎工事の痕跡はほとんど認められなかった。第1層が5cm程度しかなく、すぐ中世期の遺物包含層に続く箇所が見られたほどであった。また調査地は微高地にあたり、長期間による土砂の堆積よりも、むしろ後世の削平を受けているも指摘できる。

第２層　床土層ないし黄褐色系シルト質土。中世期の遺物を含む。上質・色相により４層に区分さきた。試掘(確認)調査の結果に従い、第１～２層は機械で除去した。

第2A層　床土層。 第2B層　2.5Y4/3オリーブ褐色粘土混じりシルト質細粒砂。

第2C層　10YR5/6黄褐色粘土ブロック混じり粗粒砂。客土と考えられる。

第３層　N5/灰色粗粒砂混じりシルト。炭化物層のラミナが部分的に介在する。ほぼ調査地全体を覆う中世期の遺物包含層。層内から瓦器・土師器・陶磁器(第※図)が出土した。第３層上面で土器溜りSX1を検出した(遺構面１)。調査地の南側では第３層に切れ込む形で第3A層が堆積していた。

第3A層　10YR6/1褐灰色粗粒砂に第３層がブロック状に混入する層。

第４層　灰色ないし褐色系粘質土～砂質土。上面は遺構面Ⅱを形成する。中世期の遺物を少量含む。第３層の下面から第５層の上面にいたる各層を一括して第４層とした。12層に区分される。大きく第4A層～第4D層(甲層)と第4E層～第4M層(乙層)とに分類できる。甲層が堆積したのちそこを切り込んで乙層が堆積する。乙層は基本的には砂層であり、自然河川の堆積層と考えられる。乙層の上部にブロック土が見られるのは、自然河川の埋積後凹地状を呈した面に地上げを施したためで、整地土と考えられる。

第4A層　10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルト。

第4B層　N3/暗灰色細粒砂混じり粘土。

第4C層　10Y5/1灰色粘土混じり細粒砂。第4C層の下部に砂層(10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂～中粒砂)が部分的にみられる箇所がある。これを第4C下層とした。

第4D層　7.5YR4/3褐色粘土質中粒砂。

第4E層　5Y4/1灰色粘土質シルトに10YR6/6明黄褐色細粒砂混じりシルトがブロック状に混入。

第4F層　N2/黒色シルト質粘土。

第4G層　7.5YR5/3にぶい褐色粗粒砂。

第4H層　10YR6/6明黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR6/2灰黄褐色粘土がブロック状に混入。

第4I層　10YR6/6明黄褐色細粒砂混じりシルト・10YR6/2灰黄褐色粘土・N2/黒色粘土の混合土。

第4J層　10YR6/2灰黄褐色粗粒砂～中粒砂。

第4K層　10YR6/6明黄褐色細粒砂混じりシルト・10YR6/2灰黄褐色粘土・10YR4/4褐色粘土の混合土。

第4L層　10YR4/2灰黄褐色粘土に同色粗粒砂がブロック状に混入。

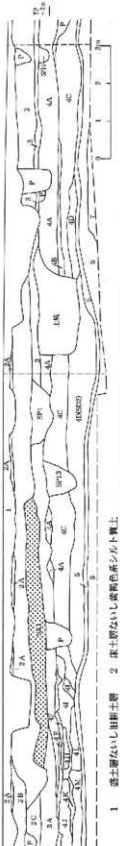
第4M層　10YR4/2灰黄褐色粗粒砂。

第５層　10YR4/4褐色粘土。層厚５cm程度の帯状をなし、トレンチ全体に分布する。上面は遺構面Ⅲを形成する。12世紀代の瓦器椀が出土した(第14図)。

第６層　5GY6/1オリーブ灰色粘質中粒砂。

第７層　10Y5/1灰色粘土。中世期遺構面のベース土である。第６層から第７層にかけて土師器皿が出土した(第14図)。

今回の調査で確認した層位では、第３層から第７層まで断絶することなく中世期の遺物を含んでいた。遺構面も３面検出している。遺物の所属時期については節を改めて検討するが、少なくとも今回の調査地の周辺では継続して中世期の集落が営造されたことがわかる。すなわち中世集落の中心地であったことが窺われる。



1　盛土層ないし旧耕土層　2　床土層ないし黄褐色系シルト質土
2A　床土層　2B　2.5Y4/3オリーブ褐色粘土混じりシルト質細粒砂　2C　10YR5/6黄褐色粘土ブロック混じり粗粒砂
3　N5/灰色粗粒砂混じりシルト　3A　10YR6/1褐灰色粗粒砂に第3層がブロック状に混入
4　灰色ないし褐色系粘質土～砂質土　4A　10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルト　4B　N3/暗灰色細粒砂混じり粘土
4C　10Y5/1灰色粘土混じり細粒砂　4D　7.5YR4/3褐色粘土質中粒砂
4E　5Y4/1灰色粘土質シルトに10YR6/6明黄褐色細粒砂混じりシルトがブロック状に混入　4F　N2/黒色シルト質粘土
4G　7.5YR5/3にぶい褐色粗粒砂　4H　10YR6/6明黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR6/2灰黄褐色粘土がブロック状に混入
4I　10YR6/6明黄褐色細粒砂混じりシルト・10YR6/2灰黄褐色粘土・N2/黒色粘土の混合土
4J　10YR6/2灰黄褐色粗粒砂～中粒砂　4K　10YR6/6明黄褐色細粒砂混じりシルト・10YR6/2灰黄褐色粘土・10YR4/4褐色粘土の混合土
4L　10YR4/2灰黄褐色粘土に同色粗粒砂がブロック状に混入　4M　10YR4/2灰黄褐色粗粒砂
5　10YR4/4褐色粘土　6　5GY6/1オリーブ灰色粘質中粒砂　7　10Y5/1灰色粘土

第３図　調査断面図

4） 検出した遺構

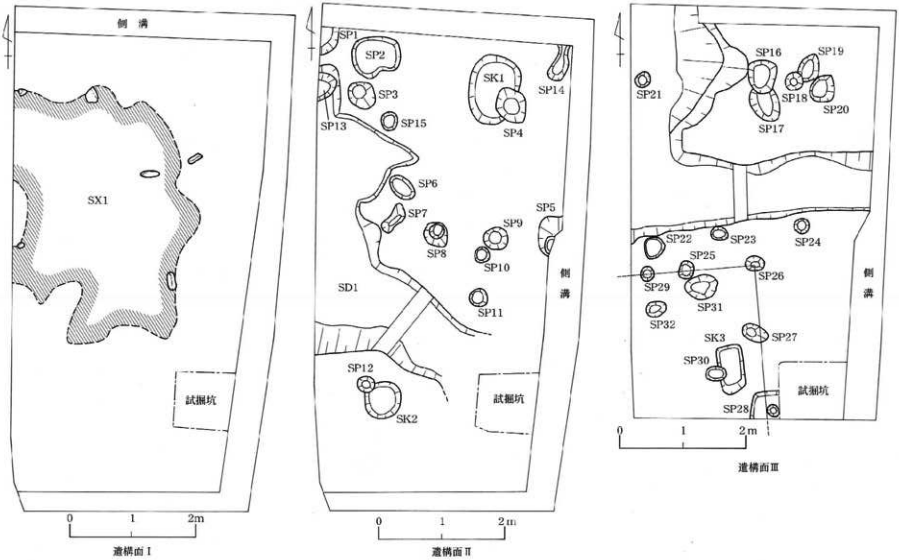
前記したように、今回の調査では中世期の遺構面を３面確認した。以下遺構面ごとに主な遺構について説明を加えていくが、まずピット全体について見ておく。規模、形状や出土遺物は別表に掲られたい。遺構面Ⅱ、Ⅲを通じて、平面形態は円形をとるものが多い。長軸の規模は最小22cmから最大76cmまで幅があるが、30cm前後のものが中心である。調査面積が狭小であるため、掘立柱建物の復元は保留としたいが、遺構面Ⅲにおいて、SP25-SP26の東西軸とSP26-SP27-SP28の南北軸はともに1.2mピッチで直交し、建物の存在が予想される。推定であるが2×2間、または2×3間程度かと思われる。埋土は７つのパターンに分類できた。

種別	遺構面	埋　　土
A	Ⅱ	10Y5/1灰色シルト(炭化物含有)に10YR5/2灰黄褐色シルトが混じる
B	Ⅱ	10YR5/2灰黄褐色シルトを主体に10Y5/1灰色シルトが散量に混じる
C	Ⅱ	10YR5/2灰黄褐色シルトに2.5Y4/1黄灰色粘土質シルトがブロック状に混じる
D	Ⅱ	炭化物層と10Y5/1灰色シルトの混合土に2.5Y6/3にぶい黄色粘土がブロック状に混じる
E	Ⅲ	10YR3/3暗褐色シルト混じり細粒砂(炭化物含有)
F	Ⅲ	7.5YR3/2黒褐色細粒砂混じり粘土(炭化物含有)
G	Ⅲ	10YR6/6明黄褐色細粒砂混じりシルト質地山に7.5YR4/1褐色粘土がブロック状に混じる(炭化物含有)

遺構面Ⅰ(第４図)　第３層上面で検出した土器溜りSX1がある。機械掘削終了後、直ちに検出した。東西2.7m、南北4.1mの範囲に土師器皿・瓦器皿・瓦器椀ほかがコンテナ20箱以上出土した。特に完形品が充填される。上記３種以外の遺物はごく微量である。出土遺物の年代観から13世紀初頭の所産と考えられる。遺物は砥石を含む角礫が配された区画に充填される。しかし角礫が結界の役割を果たしたかどうかは不明である。SX1の西側を中心に、白色ないし黒色の玉石が散布していた。１点のみであるが東側には緑色を呈する板石も遺存する。玉石・板石は不時混入したものではないが、配置ないし埋納されたとも考えがたい。この点については後述する。

遺構面Ⅱ(第４図)　ピット15個・土坑２基・溝１条を検出した。ピット・土坑の規模は右表に掲られたい。ピット内から出土した瓦器椀から、これらの遺構は出土遺物の年代観から概して12世紀末葉の所産と考える。SK1は楕円形の土坑で、長径1.08m短径0.78m深さ6cmを測る。埋土は10Y5/1灰色シルト(炭化物含有)に10YR5/2灰黄褐色シルトが混じる層である。土師器、陶磁器が出土した(第12図)。SK2は整円形の土坑で、径0.56m深さ21cmを測る。埋土は炭化物層を主体に第4A層が少量含む層である。瓦器、土師器が出土した(第12図)。SD1は、南東から北西へ流下する溝である。南東側で幅1.2m深さ29cmを測る。瓦器、陶磁器が出土した(第13図)。

遺構面Ⅲ(第４図)　ピット17個・土坑１基・溝１条を検出した。ピット内から出土した瓦器塊から、これらの遺構は出土遺物の年代観から概して12世紀後半～末葉の所産と考える。SK3は南辺が丸みを帯びる方形を呈する。長軸0.75m短軸0.38m深さ18cmを測る。埋土は7.5YR5/1褐灰色シルト質細粒砂で炭化物を含む。土師器、瓦器が出土した(第12図)。SD2はL字状をなし、東から西へ、屈曲して南から北へ流下する。東西方向では幅0.95m深さ18cmであった。埋土は第4D層である。陶磁器・瓦器が出土した(第13図)。主なものには他に断面で検出した炭ピット(炭化物のみ充填)がある。



第4図　遺構平面図Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

第２表　宮ノ下遺跡第12次調査ピット一覧表

遺構名	遺構面	平面形態	長軸	短軸	深さ	埋土	出土遺物
SP 1	Ⅱ	楕円形カ	44＋	26＋	8	A	土師器、瓦器
SP 2	Ⅱ	楕円形	76	66	5	B	土師器、瓦器
SP 3	Ⅱ	円形	50	40	15	B	土師器、瓦器、須恵器、白磁
SP 4	Ⅱ	楕円形	60	48	37	C	土師器、瓦器
SP 5	Ⅱ	円形カ	66	36＋	30	D	土師器、瓦器、須恵器
SP 6	Ⅱ	楕円形	44	27	12	A	土師器、瓦器
SP 7	Ⅱ	不定形	49	25	3	C	土師器、瓦器
SP 8	Ⅱ	円形	38	37	21	A	土師器、瓦器
SP 9	Ⅱ	円形	38	34	26	A	土師器、瓦器、白磁
SP 10	Ⅱ	円形	23	23	7	A	土師器、瓦器
SP 11	Ⅱ	円形	28	28	13	A	土師器、瓦器
SP 12	Ⅱ	円形	28	26	6	A	土師器、瓦器
SP 13	Ⅱ	円形カ	40	27＋	15	C	土師器、瓦器
SP 14	Ⅱ	不定形	56＋	26	4	A	土師器、瓦器
SP 15	Ⅱ	円形	27	27	4	A	土師器、瓦器
SP 16	Ⅲ	楕円形	52	44	6	E	土師器、瓦器
SP 17	Ⅲ	楕円形	60	43	9	F	土師器、瓦器
SP 18	Ⅲ	円形	28	28	7	E	土師器、瓦器
SP 19	Ⅲ	楕円形	41	34	7	F	土師器、瓦器
SP 20	Ⅲ	円形	45	40	10	E	
SP 21	Ⅲ	円形	22	22	10	E	土師器
SP 22	Ⅲ	円形	37	29	7	G	土師器
SP 23	Ⅲ	楕円形	27	20	3	G	
SP 24	Ⅲ	円形	22	22	8	G	瓦器
SP 25	Ⅲ	円形	28	25	6	G	
SP 26	Ⅲ	楕円形	30	24	4	G	
SP 27	Ⅲ	楕円形	41	24	15	G	土師器
SP 28	Ⅲ	方形	44＋	44＋	17	G	土師器、瓦器
SP 29	Ⅲ	円形	21	21	6	G	
SP 30	Ⅲ	楕円形	32	23	6	G	土師器、瓦器
SP 31	Ⅲ	楕円形	52	39	11	G	瓦器
SP 32	Ⅲ	円形	33	26	14	G	

〔凡例〕　〔規模〕欄で＋はその数値以上を示す。
〔埋土〕欄：A～Gの詳細は本文参照のこと。

5）出土遺物

出土遺物は土器、石器、金属製品、玉類、玉砂利などがある。以下、各項目ごとに説明を記す。

1. 土器

中世期の土器がある。主に瓦器や土師器、陶磁器、須恵器などが出土した。13世紀代のものが多い。この時期以外の遺物のみ文章中に時代を記す。以下、遺構及び遺物包含層などに分けて記す。

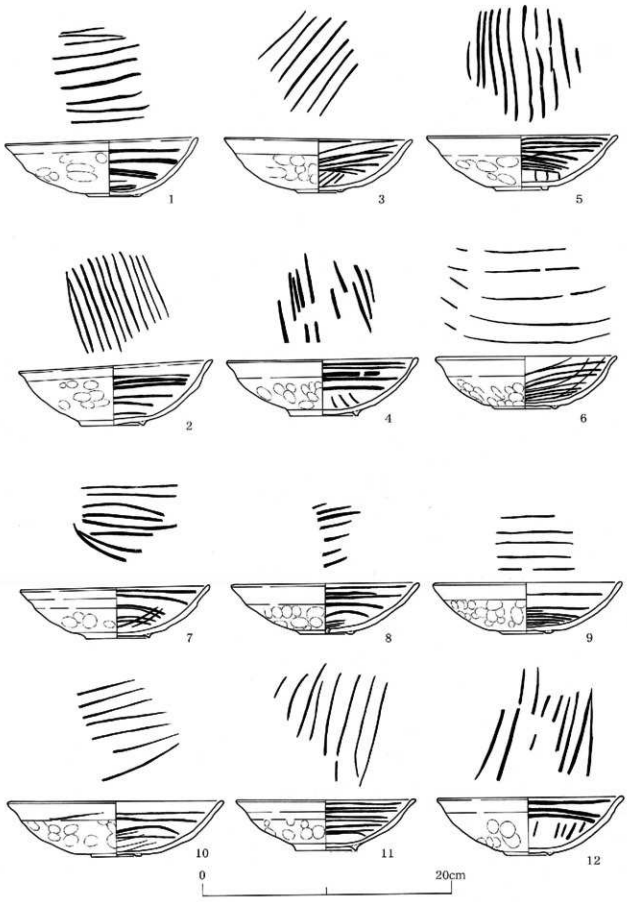
① 遺構出土土器

ＳＸ１【遺構面Ⅰ】（第５～11図１～179、図版６～14）

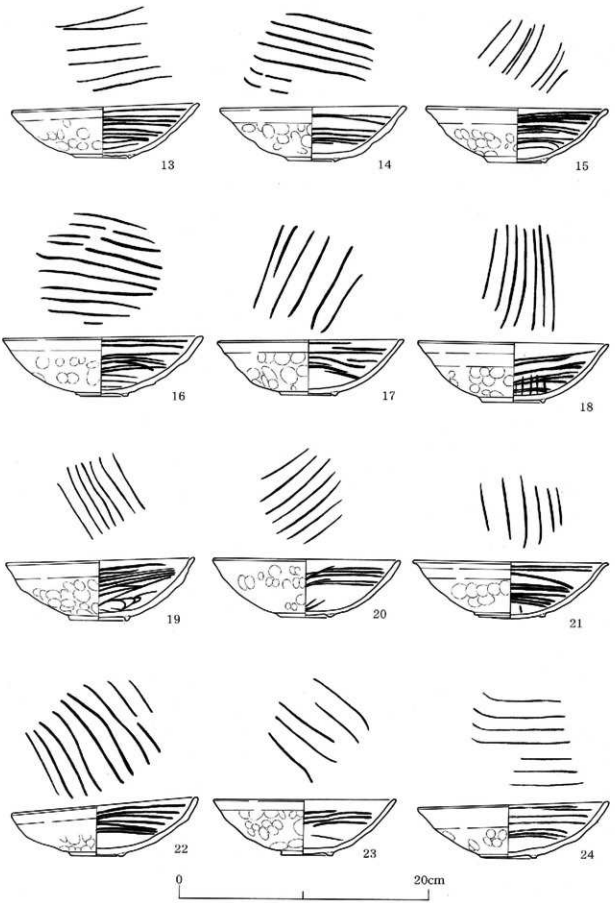
瓦器には椀・皿・羽釜がある。１～36は瓦器の椀である。器高はやや低い。体部は内弯し、口縁部はやや外反するもの（２～８・10～12・13～22・24～26・28～34・36）と体部から口縁部にかけて内弯しながら立ち上がるもの（１・９・13・23・27・35）がある。口縁端部は丸く終わる。いわゆる和泉型である（以下省略）。底部は断面が台形の高台を貼り付けるもの（１・５・９・10・16・19・21・23～26・28・30・31・33～35）、断面が三角形の高台を貼り付けるもの（２・４・７・11～15・18・27・29・36）、断面が半円形の高台を貼り付けるもの（３・６・８・17・20・22・32）がある。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部外面はヨコナデ調整、内面は粗いヘラミガキ調整する。15は内面に７条/cmのハケメ調整する。その後ヘラミガキ調整する。１～34は見込み部に半行線状の暗文を施す。35は半行線状の暗文を施した後、円状の暗文を施す。円状の暗文はヘラミガキの一部の可能性もある。36は渦巻き状の暗文を施す。大和型。いぶしが悪いものが多い。17は内面に煤が付着する。37～54は皿である。体部から内弯し、口縁部は外反するもの（37～42）と体部から口縁部にかけて外へ開き気味に立ち上がり、口縁部は外反するもの（43～54）がある。口縁端部は丸く終わる。37～45は体部外面に指頭圧痕が残り、46はユビナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整する。内面はナデ調整するもの（37～39・44・45）とナデの後数条のヘラミガキ調整するもの（40～43・46～54）がある。46は見込み部に平行線状の暗文を施し、47はジグザグ状の暗文を施す。いぶしが悪いものが多い。174は羽釜である。底部を欠損する。体部から口縁部にかけて内弯し、口縁端部は面を持つ。鍔部は短く、下向き気味に付く。体部外面は６条/cmのハケメ調整、鍔部から口縁部にかけてヨコナデ調整、内面は板状工具によるナデ調整する。体部に煤が付着する。

陶磁器には青磁の碗、青白磁の皿、白磁の壺・碗がある。輸入陶磁器である。55～59は同安窯系青磁の碗である。56～59は底部を欠損する。体部は内弯し、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く終わる。外面は櫛描きによる線条文、内面はヘラ描きによる劃花文の中に櫛描きによる地文を施す。その後底部以外を施釉する。色調はにぶい黄色またはオリーブ黄色を呈する。60は青白磁の皿である。底部を欠損する。体部はやや内弯し、口縁部は外へ大きく外反する。口縁端部は水平方向に面をもつ。内外面を施釉する。色調は外面が明緑灰色、内面が灰白色を呈する。61は白磁壺の口縁部である。口縁部が外へ丸く肥厚する。口縁部内外面を施釉する。色調は灰白色を呈する。62～67は白磁の碗である。62～66は底部と体部を欠損する。62は体部が外へ開き気味に伸び、口縁部は大きく肥厚する。いわゆる玉縁状の口縁である。体部外面の上半と内面を施釉する。63～66は体部が内弯しながら外上方へ伸び、口縁部は短く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面を施釉する。67は底部である。高台はやや高い。高台以外を施釉する。色調は灰白色を呈する。

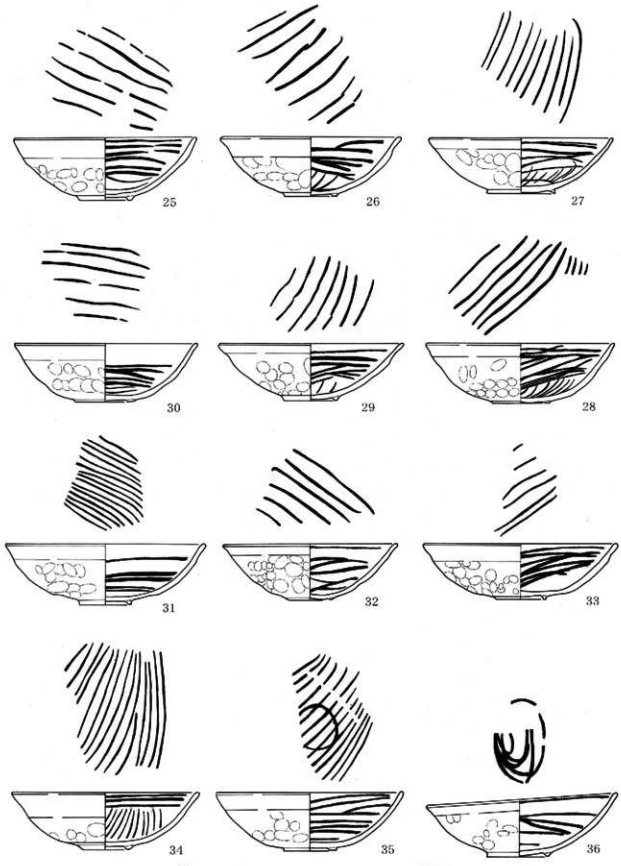
土師器には皿・台付皿・羽釜がある。皿には小皿・大皿がある。（以下、口径10cm未満を小皿、10cm以上12cm未満を中皿、12cm以上を大皿とする。）68～155は小皿である。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がるもの（68～78・86・87・89～98・111～115・126～133・135）、外上方へ立ち上がるもの（85・88・99～107・116～118・134・140・141）、外へ開き気味に立ち上がるもの（79～84・108



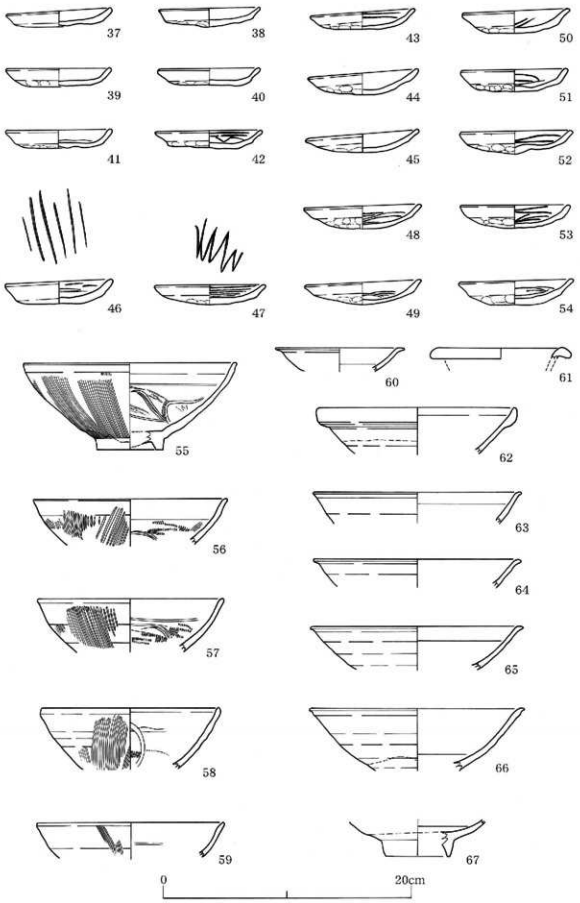
第5図　SX1出土土器実測図(1)



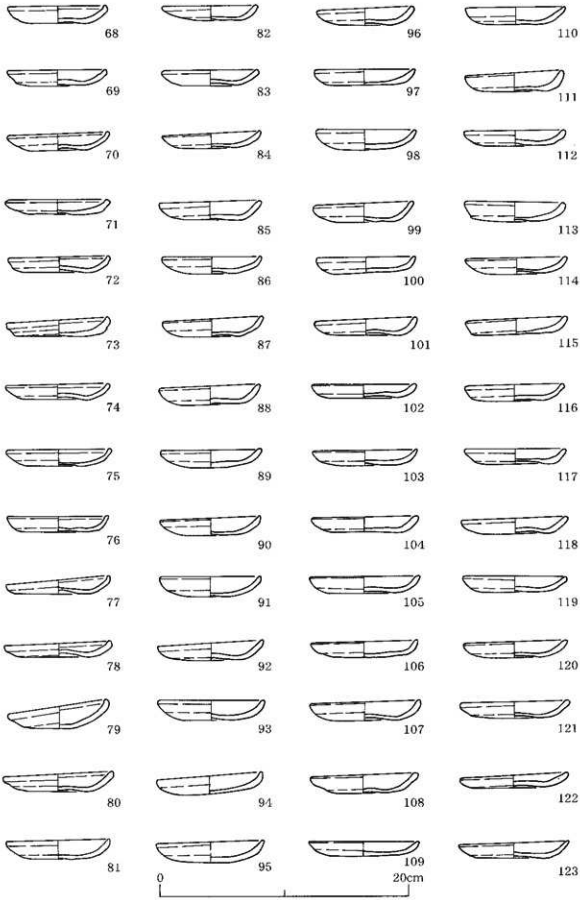
第6図　SX1出土土器実測図(2)



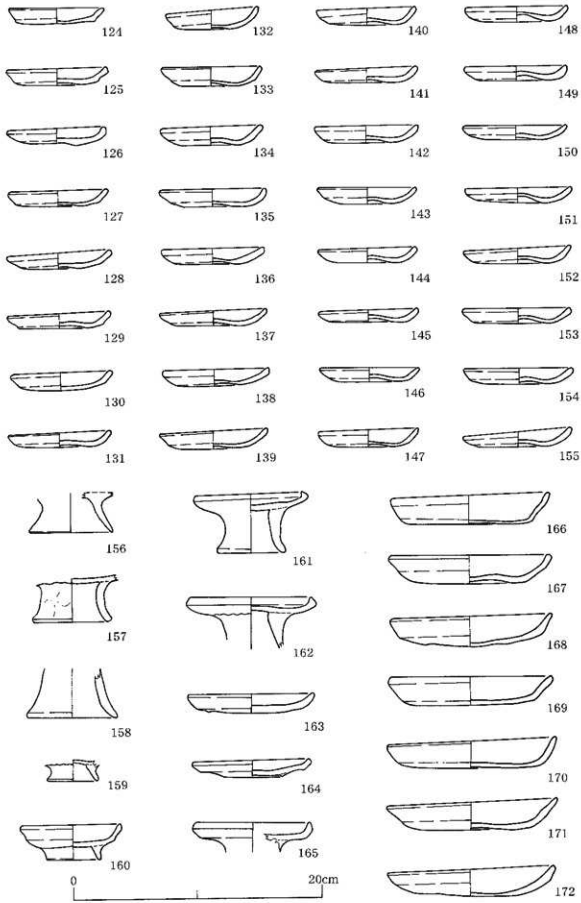
第7図　SX1出土土器実測図(3)



第8図　SX1出土土器実測図(4)



第9図　SX1出土土器実測図(5)



第10図　SX1出土土器実測図(6)

～110・119～125・136～139・142～155）がある。底部はやや上げ底のものが多い。特に132～155は上げ底が強めである。口縁端部は丸く終わる。68・83・90・118・144は内外面ともナデ調整する。それ以外は口縁部内外面、または口縁部外面をヨコナデ調整し、他をナデ調整する。一部に黒斑がみられるものもある。305は未実測だが皿が100点ある。156～165は台付皿である。156～159は皿部が、162～165は脚部が欠損している。脚部の器高が高いもの（156～158・161・162）と低いもの（159・160）がある。皿部は口縁部から口縁端部にかけて内傾するもの（161・162）、外上方へ立ち上がるもの（160・165）、外へ開き気味に立ち上がるもの（163・164）がある。口縁端部は面を持つ。163はやや丸く終わる。156・158・159・161・162・165はナデ調整する。157は脚部外面に指頭圧痕が残り、他はナデ調整する。160・163・164は口縁部をヨコナデ調整、他をナデ調整する。脚部と皿部の境に接合痕がみられる。162の口縁端部に煤が付着する。166～172は大皿である。体部から口縁部にかけて外上方へ立ち上がるもの（166・170）と外へ開き気味に立ち上がるもの（167～169・171・172）がある。口縁端部は丸く終わる。167はやや面を持つ。166・168～172は口縁部内外面をヨコナデ調整、他はナデ調整する。167は口縁部外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。173は羽釜の口縁部である。口縁端部は外へ肥厚する。外面はヨコナデ調整、内面は板状工具によるナデ調整する。鍔部下面に煤が付着する。175～179は須恵器である。東播系の捏鉢である。体部から口縁部にかけて外へ大きく伸びる。口縁端部は上方にやや拡張する。内面に使用による磨り減りがみられる。体部内外面は回転ナデ調整する。178はその後外面下方をユビナデ調整する。176は底部に糸切りの痕がある。

ＳＫ１【遺構面Ⅱ】（第12図180～182）

土師器には小皿・大皿がある。180は小皿である。口縁部が外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他をナデ調整する。口縁部内外面に黒斑がみられる。181は大皿である。底部は上げ底であり、体部から口縁部にかけて外へ大きく開きながら立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。内外面ともナデ調整する。182は龍泉窯系青磁の碗である。口縁部が短く外反し、口縁端部は丸く終わる。内外面に施釉する。色調は明緑灰色を呈する。

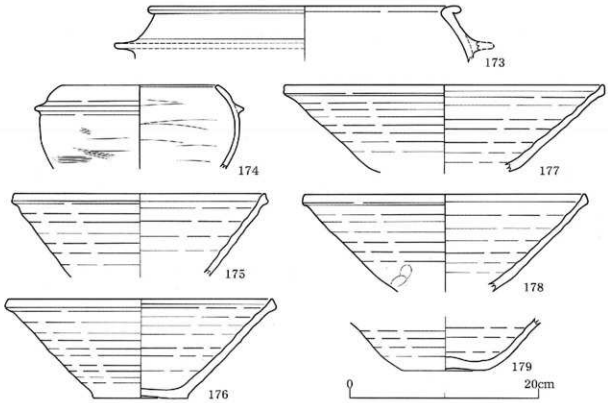
ＳＫ２【遺構面Ⅱ】（第12図183～194）

土師器には大皿・小皿がある。183・184は大皿である。183は体部から口縁部にかけて外へ開き気味に立ち上がり、184は内弯気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。183は口縁部外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。184は口縁部外面に二段のヨコナデ調整、他はナデ調整する。189～194は小皿である。底部は上げ底気味である。口縁部がやや外反するもの（189・190）、体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がるもの（191）、外へ開き気味に立ち上がるもの（192・193）、外上方へ長めに立ち上がるもの（194）がある。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面をヨコナデ調整、他はナデ調整する。194は内面の一ヶ所に焼け焦げた痕がみられることから燈明皿として使用したと考えられる。

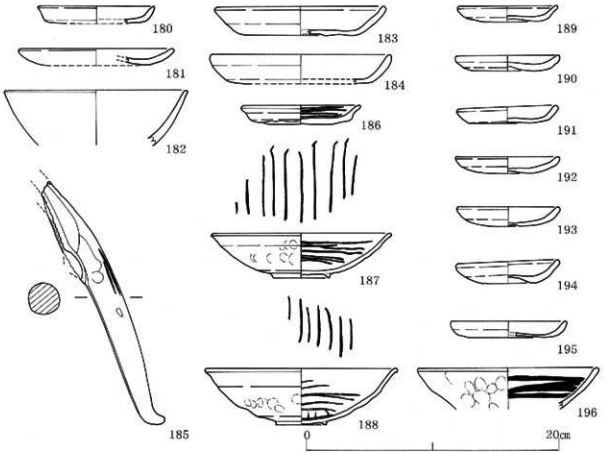
瓦器には羽釜・皿・椀の器種がある。185は羽釜の脚部である。脚部はやや内弯し、脚端部がＬ字型に折れ曲がる。断面は丸い。ナデ調整する。186は皿である。口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。口縁部外面は強いヨコナデ調整、内面は粗いヘラミガキ調整する。底部に接合痕が残る。187・188は椀である。器高はやや低い。底部に断面が台形の高台を貼り付ける。体部はわずかに内弯し、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部外面はヨコナデ調整、体部内面は粗いヘラミガキ調整する。見込み部に平行線状の暗文を施す。いぶしは悪い。

ＳＫ３【遺構面Ⅲ】（第12図195・196）

195は土師器の小皿である。底部はやや上げ底で、体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。196は瓦器の椀である。



第11図　SX 1 出土土器実測図(7)



第12図　SK 1・2・3出土土器実測図

底部が欠損する。体部から口縁部にかけてわずかに内弯し、口縁端部は丸く終わる。体部外面に指頭圧痕が残る。内面は粗いヘラミガキ調整を施す。ヘラミガキの幅は太い。

ＳＤ１【遺構面Ⅱ】（第13図197～202）

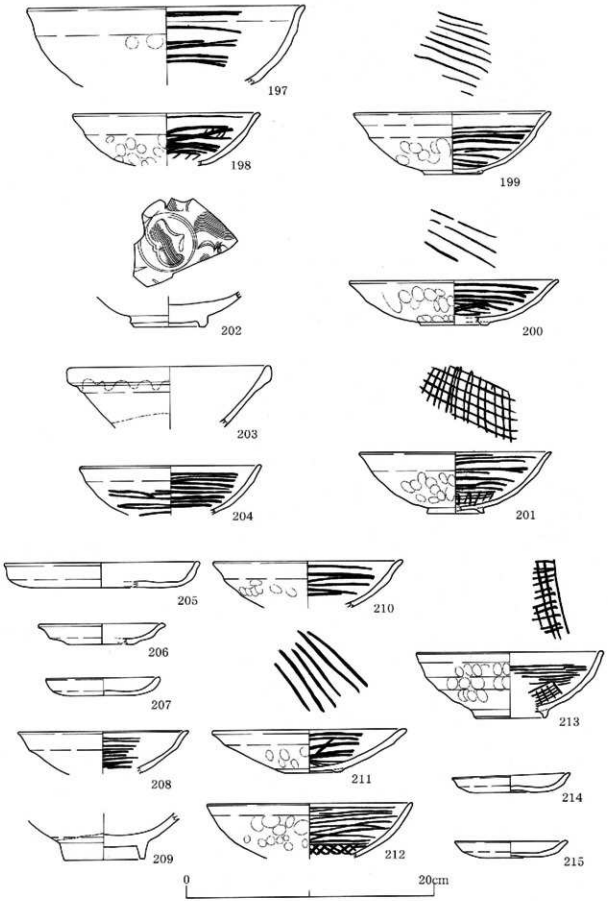
瓦器には椀がある。197は大型の椀である。体部が内弯し、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整、内面は粗いヘラミガキ調整する。いぶしは悪い。198～201は椀である。198は底部が欠損する。体部は内弯し、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く終わる。200は器高が低い。底部に断面が三角形の高台を貼り付けるもの（199）と台形の高台を貼り付けるもの（200・201）がある。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部外面はヨコナデ調整、内面は粗いヘラミガキ調整する。199は口縁部のヨコナデ調整が二段に亘る。198～200は見込み部に平行線状の暗文を施し、201は斜格子状の暗文を施す。いぶしが悪いものが多い。201は12世紀代。202は同安窯系青磁の碗である。底部である。高台はやや低い。内面に櫛描きを施す。底部内外面を施釉する。色調は灰オリーブ色を呈する。

ＳＤ２【遺構面Ⅲ】（第13図203・204）

203は白磁の碗である。底部を欠損する。体部が外へ開き気味に伸び、口縁部は大きく肥厚する。体部外面の上半と内面を施釉し、口縁部外面に釉が垂れる。色調は灰白色を呈する。204は瓦器の椀である。体部は内弯し、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面は粗いヘラミガキ調整、口縁部外面はヨコナデ調整、内面は密なヘラミガキ調整する。いぶしは悪い。12世紀代。

ピット内出土土器（第13図205）※遺構面は【Ⅲ】のように略記する。

205は土師器の大皿である。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。SP6【Ⅱ】出土。206は土師器の小皿である。口縁部はやや外反し、口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビナデ調整する。内面はナデ調整、口縁部内外面はヨコナデ調整する。SP8【Ⅱ】出土。207は土師器の小皿である。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他をナデ調整する。208は瓦器の椀である。口縁部はやや外反し、口縁端部に沈線をめぐらす。大和型である。体部外面はユビナデ調整、口縁部外面はヨコナデ調整する。内面は密なヘラミガキ調整する。いぶしはやや悪い。209は白磁の碗である。底部である。体部内外面を施釉する。色調は灰白色を呈する。207～209はSP9【Ⅱ】出土。210は瓦器の椀である。底部を欠損する。体部はわずかに内弯し、口縁部は外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部外面はヨコナデ調整、内面は粗いヘラミガキ調整する。いぶしは悪い。SP10【Ⅱ】出土。211は瓦器の椀である。器高は低い。底部は断面が台形の高台を貼り付ける。体部は外へ大きく開き、口縁部は外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部外面はヨコナデ調整、内面は粗いヘラミガキ調整する。見込み部には平行線状の暗文を施す。いぶしは悪い。SP13【Ⅱ】出土。212は瓦器の椀である。底部を欠損する。体部から口縁部にかけて内弯し、口縁端部は丸く終わる。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部外面は弱いヨコナデ調整、内面は粗いヘラミガキ調整する。見込み部には斜格子状の暗文を施す。いぶしは悪い。12世紀代。SP31【Ⅲ】出土。213は瓦器の椀である。器高は高い。体部はわずかに内弯し、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部外面はヨコナデ調整が二段に亘る。内面は粗いヘラミガキ調整する。見込み部には斜格子状の暗文を施す。いぶしは悪い。12世紀代。214・215は土師器の小皿である。底部はやや上げ底である。体部から口縁部にかけて外へ開き気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。213～215は炭ピット出土。



第13図　SD1・2・SP6・8・9・10・13・31・炭P出土土器実測図

② 遺物包含層出土土器

第2－C層（第14図216・217）

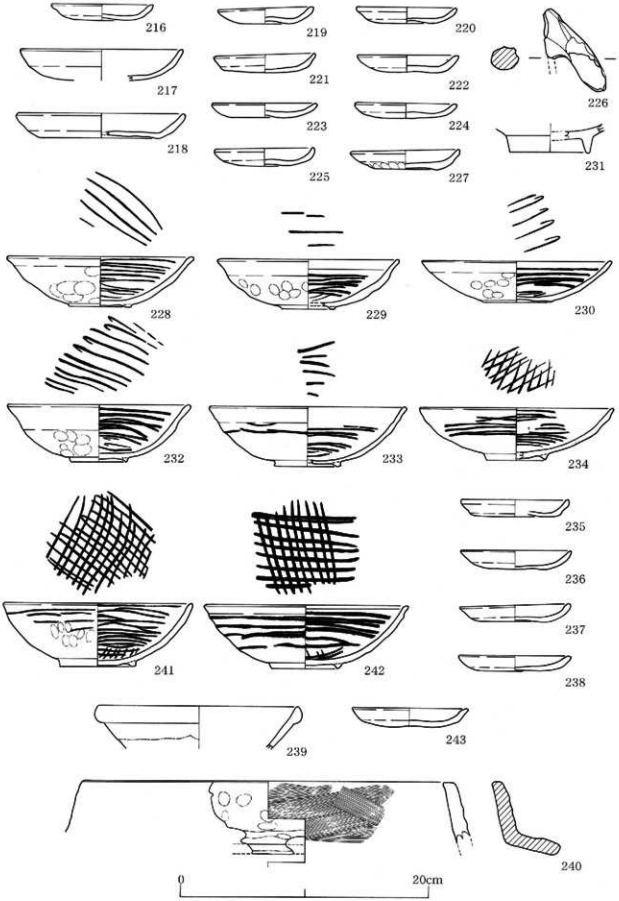
土師器の小皿・大皿がある。216は小皿である。底部は上げ底気味である。体部から口縁部にかけて外上方へ立ち上がる。口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。217は大皿である。体部は内弯し、口縁部が外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。

第2～3層（第14図218～231）

土師器には大皿・小皿がある。218は大皿である。底部はやや上げ底であり、体部から口縁部にかけて外へ開き気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。219～225は小皿である。体部から口縁部にかけて外上方へ立ち上がるもの（219～222）、外へ開き気味に立ち上がるもの（223・224）、内弯気味に立ち上がるもの（225）がある。底部はやや上げ底のものが多い。口縁端部はすべて丸く終わる。219・223は内外面ともナデ調整する。220・221・224は口縁部外面をヨコナデ調整、他はナデ調整する。222・225は口縁部内外面をヨコナデ調整、他はナデ調整する。瓦器には羽釜・皿・椀がある。226は羽釜の脚部である。脚部は短く、わずかに内弯する。脚端部は丸く終わる。断面は丸い。生焼けである。227は皿である。口縁部はやや外反し、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指頭圧痕が残る。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整する。228～230は椀である。器高は低い。底部に断面が台形の高台を貼り付け、体部がわずかに内弯し、口縁部がやや外反するもの（228・229）と底部に断面が半円形の低い高台を貼り付け、体部から口縁部にかけてわずかに内弯するもの（230）がある。口縁端部は丸く終わる。228・229は見込み部に平行線状の暗文を施す。230はジグザグ状の暗文を施す。体部外面に指頭圧痕が残る。228は口縁部外面にヨコナデ調整、内面は幅の太い粗いヘラミガキ調整する。229・230は口縁部内外面にヨコナデ調整、内面は粗いヘラミガキ調整する。いぶしは悪い。231は白磁の碗である。底部である。高台はやや高い。内面を施釉する。色調は灰白色を呈する。

第3層（第15図244～272）

瓦器には椀・皿がある。244～253は椀である。器高はやや低い。体部は内弯し、口縁部はやや外反するもの（244・246～250・252・253）、体部から口縁部にかけて内弯しながら立ち上がるもの（245・251）がある。口縁端部は丸く終わる。底部は断面が台形の高台を貼り付けるもの（244～246・250～252）と断面が三角形の高台を貼り付けるもの（247～249・251）がある。体部外面に指頭圧痕がのこる。口縁部外面はヨコナデ調整、内面は粗いヘラミガキ調整する。244～252は見込み部に平行線状の暗文を施し、253は斜格子状の暗文を施す。253は12世紀代。267は皿である。体部から口縁部にかけて外上方へ長めに伸びる。口縁部は丸く終わる。口縁部外面はヨコナデ調整、内面は粗いヘラミガキ調整、他はナデ調整する。いぶしは悪い。土師器には小皿・大皿がある。254～266は小皿である。口縁部がやや外反するもの（254・255・264）、体部から口縁部にかけて外へ開き気味に立ち上がるもの（256・257・259～263・266）、外上方に長めに伸びるもの（258・265）がある。254～256・261～266は底部がやや上げ底である。口縁端部は丸く終わる。254・256・260・264・266は口縁部外面をヨコナデ調整、他はナデ調整する。255・257・259・261～263は口縁部内外面をヨコナデ調整、他はナデ調整する。258・265は内外面をナデ調整する。272は大皿である。体部から口縁部にかけてやや外反しながら外へ開き気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。陶磁器には青白磁の合子、青磁の碗、白磁の碗がある。268は合子の蓋である。外面に刻み目を施し、縦方向に溝を施す。外面の体部から天井部にかけて施釉する。色調は明緑灰色である。



第14図　第2－C・2～3・4・4－A・4－C・4－I・5・6～7層出土土器実測図

269は同安窯系青磁の碗である。体部から口縁部にかけてやや外反する。口縁端部は丸く終わる。外面は櫛描きによる線条文、内面はヘラ描きによる劃花文の中に櫛描きによる地文を施す。底部外面以外を施釉する。色調はオリーブ黄色を呈する。270・271は白磁の碗である。底部である。高台はやや高い。底部外面以外を施釉する。色調は灰白色を呈する。

第4層（第14図232～238）

232～234は瓦器の椀である。器高はやや低い。体部は内弯し、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く終わる。底部に断面が三角形の高台を貼り付けるもの（232・234）と断面が台形の高台を貼り付けるもの（233）がある。232は体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部外面はヨコナデ調整、内面は粗いヘラミガキ調整する。233・234には体部外面にユビナデ調整した後、上面に数条のヘラミガキ調整する。232・233の見込み部には平行線状の暗文を施し、234には斜格子状の暗文を施す。いぶしは悪い。234は12世紀代。235～238は土師器の小皿である。235は底部がやや上げ底で、口縁部は外反する。口縁端部は尖り気味に終わる。口縁部内外面に強いヨコナデ調整、他はナデ調整する。236～238は体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がる。238は外へ開き気味である。口縁端部は丸く終わる。口縁部外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。

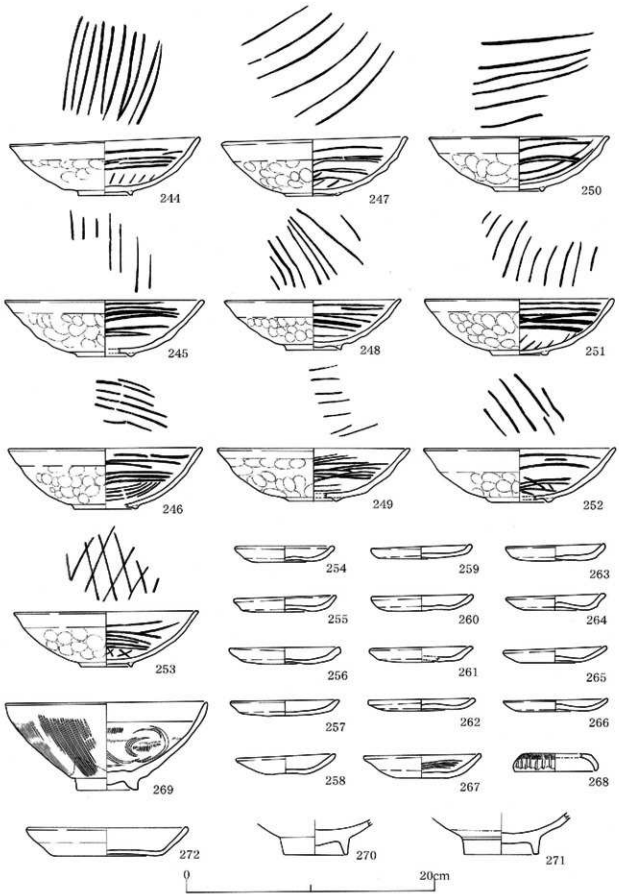
第4層各層・第5層・第6～7層(第14図239～243)

239は陶磁器である。白磁の碗である。底部を欠損する。体部が外へ開き気味に伸び、口縁部は大きく肥厚する。体部外面の上半と内面を施釉する。色調は灰白色を呈する。第4-A層。 240は土師器の竈である。底部である。外面は指頭圧痕が残る。内面は10条／cmのハケメ調整する。第4-C層。241は瓦器の椀である。底部に断面が台形の高台を貼り付ける。体部から口縁部にかけて内弯し、口縁端部は丸く終わる。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部外面に数条のヘラミガキ調整、内面には粗いヘラミガキ調整する。見込み部には斜格子状の暗文を施す。いぶしは悪い。12世紀代。第4-I層。242は瓦器の椀である。器高はやや低い。底部に断面が台形の高台を貼り付ける。体部は内弯し、口縁部は外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビナデ調整後、上半を数条の粗いヘラミガキ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面は粗いヘラミガキ調整する。見込み部に斜格子状の暗文を施す。いぶしは悪い。12世紀代。第5層。243は土師器の小皿である。底部は上げ底気味で、体部と口縁部はやや外反しながら立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味に終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。内面中央に焼け焦げた痕がみられることから燈明皿として使用したと考えられる。第6～7層。

2. 石器（第16図273～279）

砥石が7点ある。ＳＸ1から5点、第3層から2点出土した。

273は上部と下部を欠損する。形状は長方形を呈する。全面に使用痕がある。274は3面を欠損しており、剥離が激しいが、形状は長方形を呈すると考えられる。275は上部を欠損する。形状は長方形を呈する。全面に使用痕がある。276・277は上部と下部を欠損する。表裏に使用痕がある。276の形状は長方形で、断面は板状の薄い長方形を呈する。277の形状は長方形を呈する。273～277の石材は凝灰岩と考えられる。278は左右の側面を欠損するが、形状は長方形を呈する。断面は板状の薄い長方形を呈する。表裏に使用痕がある。石材は砂岩と考えられる。279は裏面が剥離する。形状は楕円形を呈し、表面に使用痕がある。石材は緑泥片岩と考えられる。277・278は第3層から他はＳＸ1から出土した。



第15図　第３層出土土器実測図

3. 金属製品（第17図280～297）

銅鈴、火打鎌、小刀、刀子、鉄釘、環状鉄製品などがある。すべてＳＸ１から出土した。

280・281は銅鈴である。緑錆が付着し鈑地に銅張りが施される。体部は円形で、頭部に紐を通す円孔を穿つ。中央に型のはみ出しと思われる帯状の凹みがみられる。下部に溝を開ける。280は長さ4.0cm、幅3.6cmである。溝部は長さ2.4cm、幅0.4cmである。281は頭部を欠損する。長さ3.3cm、幅3.6cmである。溝部は長さ3.0cm、幅0.5cmである。282は用途不明品である。左部は肥厚気味で、中央部は平坦になり、先端部が折れ曲がる。長さ9.8cm、幅2.5cm、厚み2.6cmである。283は火打鎌である。中央部が山形に盛り上がり、左右端部は上方向に弯曲する。長さ8.0cm、幅2.8cm、厚み6.5cmである。284は小刀である。柄部、刃部先端部を欠損する。長さ9.1cm、幅2.1cm、厚み0.3cmである。285は刀子である。柄部、刃部先端部が欠損する。柄部から先端部にかけて細くなる。長さ5.7cm、幅1.1cm、厚み0.3cmである。286・287は環状を呈する鉄製品である。286はリング状に曲がり、断面は丸い。長さ2.0cm、幅1.7cm、厚み0.25cmである。287は頭部がリング状に曲がり、断面は丸い。長さ2.0cm、幅1.7cm、厚み0.25cmである。287は頭部がリング状に曲がり、先端部はＬ字形に折れ曲がる。長さ6.0cm、幅2.0cm、厚み0.6cmである。288～297は鉄釘である。先端部は欠損する。頭部がＬ字形に折れ曲がるもの（288～296）とＴ字形のもの(297)がある。288は長さ4.4cm、幅1.3cm、厚み0.3cmである。289は長さ5.8cm、幅1.4cm、厚み0.7cmである。290は長さ3.6cm、幅0.8cm、厚み0.6cmである。291は中央部から先端部にかけて折れ曲がる。長さ4.2cm、幅0.6cm、厚み0.3cmである。292は長さ2.9cm、幅1.2cm、厚み0.5cmである。293は長さ2.8cm、幅0.9cm、厚み0.4cmである。294は長さ3.5cm、幅0.9cm、厚み0.4cmである。295は頭部に溝がある。長さ2.9cm、幅0.7cm、厚み0.5cmである。296は長さ1.7cm、幅1.1cm、厚み0.7cmである。297は長さ1.5cm、幅1.0cm、厚み0.5cmである。断面は長方形のもの（288・293・297）と正方形のもの（289～292・294～296）がある。

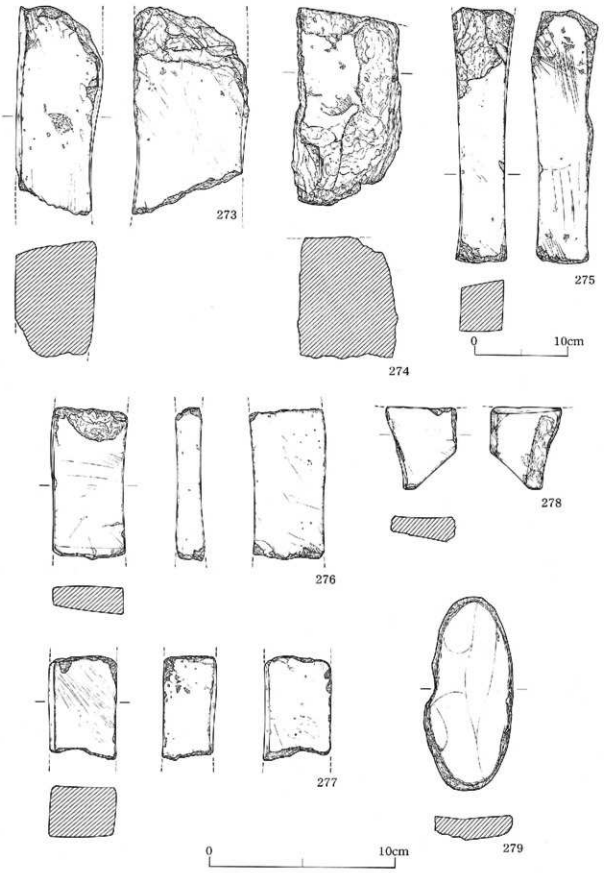
4. 玉類（第18図298～304）

円盤状の瓦製品・ガラス製の玉・石製の玉がある。ＳＸ１、第３層、第４層から出土した。

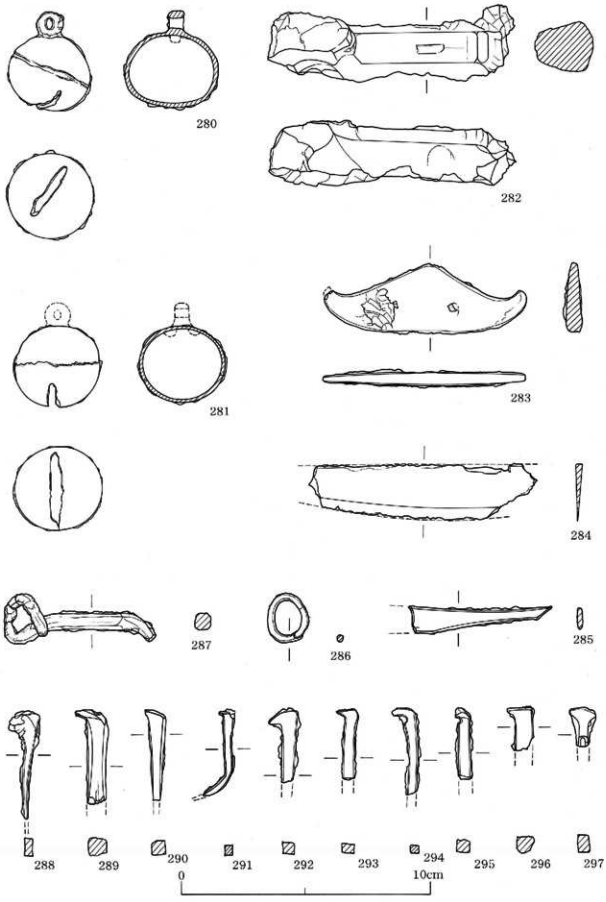
298～302は円盤状の瓦製品である。円周部を打ち欠いた後に研磨し、平坦にしたもの（298～300）と全体を研磨し、球形にしたもの（301・302）がある。298は長さ2.5cm、幅2.8cm、厚み1.7cm、重さ12.69gである。299は長さ2.7cm、幅2.5cm、厚み1.5cm、重さ10.55gである。300は長さ2.4cm、幅2.7cm、厚み1.8cm、重さ11.60gである。301は長さ2.3cm、幅2.4cm、厚み2.1cm、重さ10.49gである。302は長さ1.8cm、幅2.1cm、厚み1.7cm、重さ6.18gである。色調は298・299が灰黄色、300が灰色、301・302が灰白色を呈する。303はガラス製の玉である。中央に孔を穿つ。断面は楕円形である。孔部が少し欠損する。直径1.4cm、厚み1.1cm、重さ2.58gである。色調は風化でガラス質がなくなり、淡黄色を呈する。304は石製の玉である。中央に孔を穿つ。断面は楕円形である。直径0.75cm、厚み0.4cm、重さ0.38gである。色調は灰白色を呈する。298・299は第３層、300は第４層、301～304はＳＸ１から出土した。

5. 玉石（図版26）

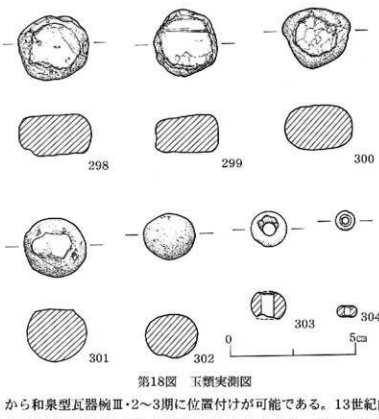
白色系と黒色系の玉砂利がある。川原石である。最大長が1.8cm～5.6cmまでの角がとれた丸みを帯びる楕円形や三角形のものである。大形の石を割った拳代程度の石も含まれる。ＳＸ１から出土した。



第16図　石器実測図



第17図　金属製品実測図



第18図　玉類実測図

6) まとめ

今回の調査では、約41㎡と遺跡に小さな鍬を入れたに過ぎないが、土器溜りが発見され大量の中世期遺物を得ることができた。ここでは調査成果から派生する二、三の問題点を列挙しまとめとしておきたい。

(1) 土器溜りSX1について

100点以上の完成品を含む、コンテナー約20箱分の遺物が出土した。出土瓦器椀の特徴は口縁部から体部外面までヘラミガキの痕跡は全例にわたり認められず、見込みの暗文は平行線状文を通有とする点である。平行線状文は疎密の2種がみられる。これらのことから和泉型瓦器椀Ⅲ・2～3期に位置付けが可能である。13世紀前半初頭～前葉の一括資料といえよう。この年代観は他の土器とも矛盾しないと思われる。瓦器椀の地域型は1例を除き全て和泉型である。この傾向は今回の調査での他の遺構(面)や遺物包含層を通じて窺われるところである。さて、土器溜りには黒色、白色の玉石が完成品の土師器皿、瓦器椀・皿の集積の間隙から多数出土した。玉石類は先行研究により中世の地鎮修法に伴うものと推定される*が、今石の出土状況は黒色石と白色石は混在しており、ある一定方向に収斂しない。このことは修法の終了後、玉石が移動したことを暗示する。すなわち地鎮とその祭祀後、神饌共食儀礼(直会)を行い、玉石とともに使用した食器(皿・椀)を廃棄・埋納、といった一連の儀式が推定できよう。

(2) 足代庄について

もう一つの課題は、中世期の荘園の動向である。妙心寺領足代庄**はもと南朝方の管理する荘園で、正平5年(1350)年7月、北畠親房が足代庄の地頭職の支配を負っている。その後足代庄は北朝に移り、康暦2年(1380)北朝から妙心寺玉鳳院に寄進された。既往の調査成果から足代庄が宮ノ下遺跡上層の中世集落に該当する蓋然性は高いと思われるが、史料に現出する時期は14世紀中葉であり、今回の瓦器椀の型式編年とは隔絶する。いっぽう、長保年中(999～1004)の立庄にかかる大地庄では延久4年(1072)の太政官牒(『石清水八幡宮文書』)に「七条足代里」がみえ、11世紀後半ごろには足代の地名が確認できる。足代里と足代庄の文献史料上での年代の前後関係や式内社都留彌神社と足代庄との関係など今後の課題となろう。

*木下密運「中世の地鎮・鎮壇」(『古代研究』28・29合併号、1984年、年興寺文化財研究所)に拠れば、ある阿闍梨が地鎮鎮壇法をまとめたとされ、その修法を復元されている。まず、特殊な壺に二十種の宝物を入れ、建物を築こうとする地面のほぼ中央に据える。次いでその地面の五方に五色の玉を埋める。『覚禅抄』によると、鎌倉時代頃では、東に青い玉(瑠璃)、南に赤い玉(琥珀)、西に白い玉(白石英)、北に黒い玉(赤石英)、中央に黄色の玉(黄石英)とされる。この五方五色は陰陽道の五色の次第に従うという。

**『布施市史』第1巻、1962年、p419～p424。に拠る。

調査前の状況（北より）

SX1内遺物検出作業風景
（北より）

遺構面ISX1検出状況全景
（北より）

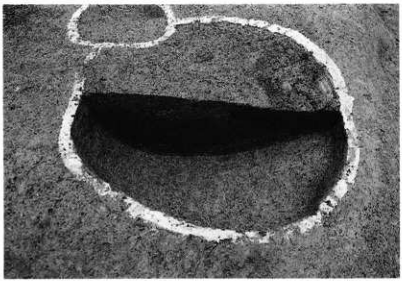
SX1検出状況〔北西部〕近景

SX1検出状況〔中央部〕近景

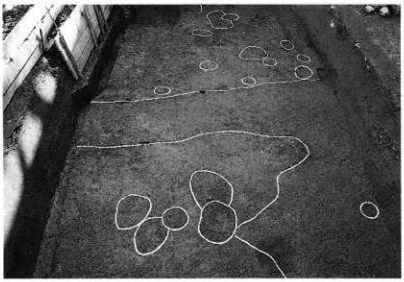
SX1検出状況〔北東部〕近景

SX1内輸入陶磁器〔青磁〕出土状況
（東より）

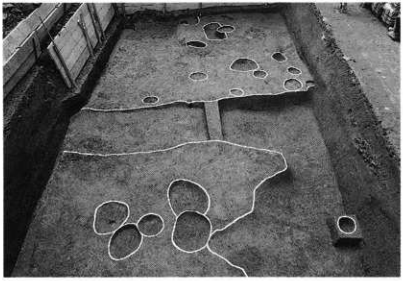
遺構面Ⅱ遺構掘削後状況
（北より）



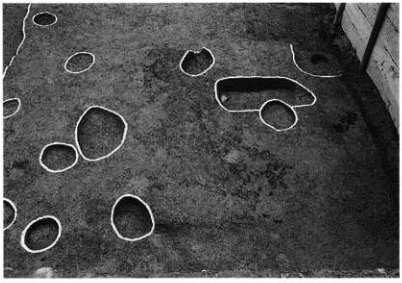
SK2の断面



遺構面Ⅱ遺構検出状況全景



遺構面Ⅲ遺構掘削後状況全景
（北より）



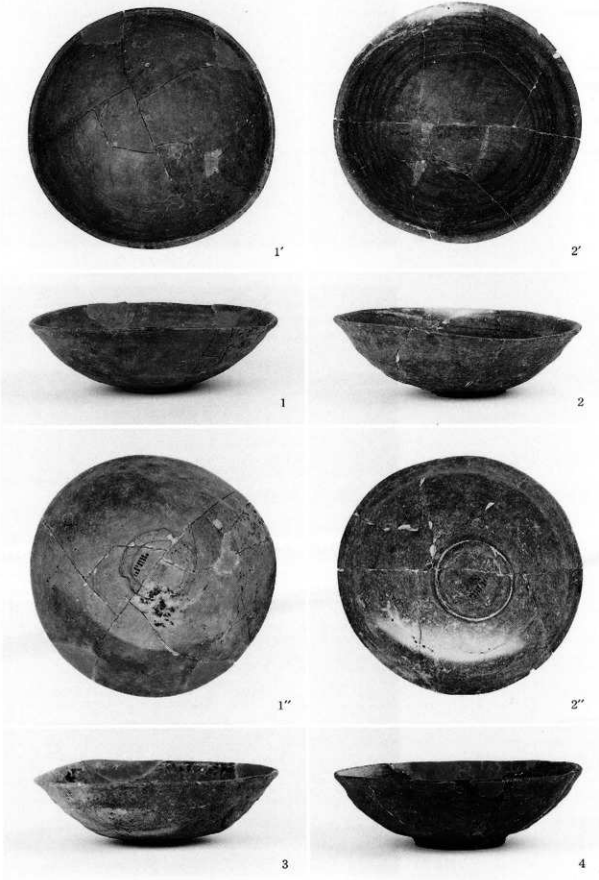
掘立柱建物跡検出状況
（西より）

図版5　宮ノ下遺跡第12次調査　遺構

西壁断面

東壁断面

トレンチ西拡張部SX1検出状況
（西より）



SX1出土瓦器椀

5′

7

8

5

9

5″

10

11

6

12

SX 1 出土瓦器椀

13′

14′

13

14

13″

14″

15

18

SX 1 出土瓦器椀

16′

17′

16

17

16″

17″

19

20

SX 1 出土瓦器椀

22′

23

24

22

25

22″

26

27

21

28

SX 1 出土瓦器椀

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

43

44

41

SX1出土瓦器椀・皿

39

45

40

47

42′

49′

42

49

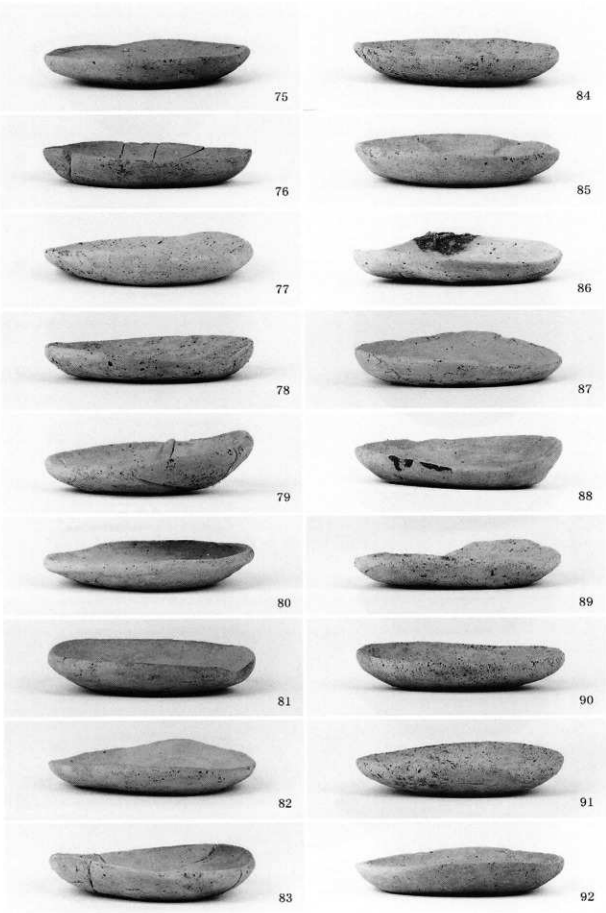
46′

51′

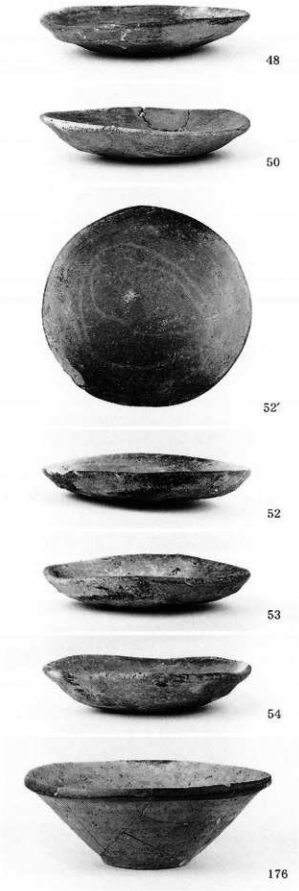
46

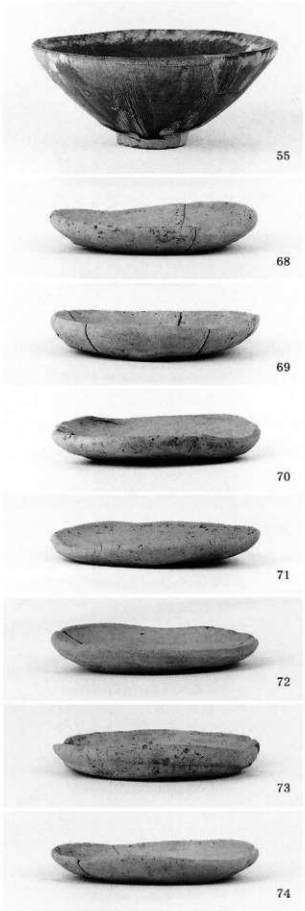
51

SX 1 出土瓦器皿

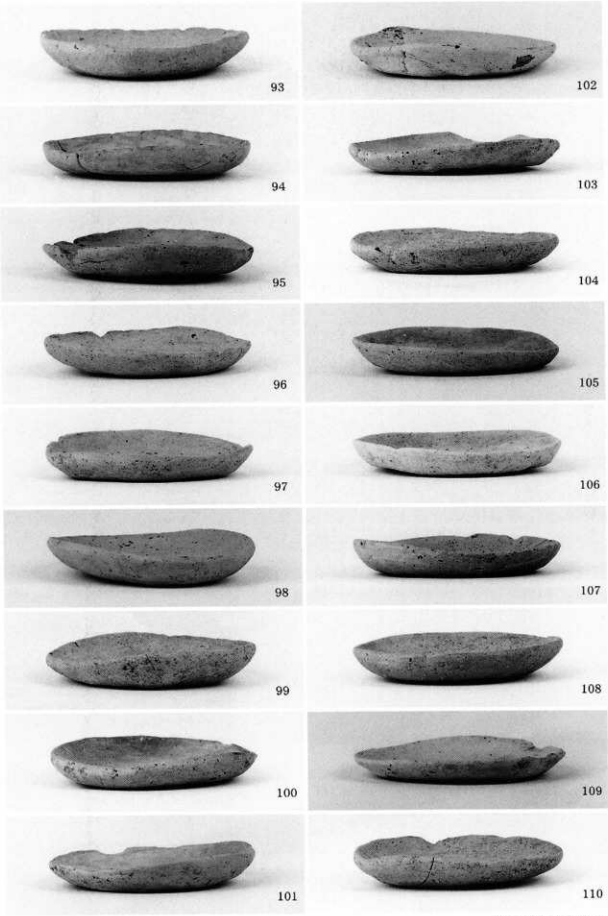


SX 1 出土土師器小皿

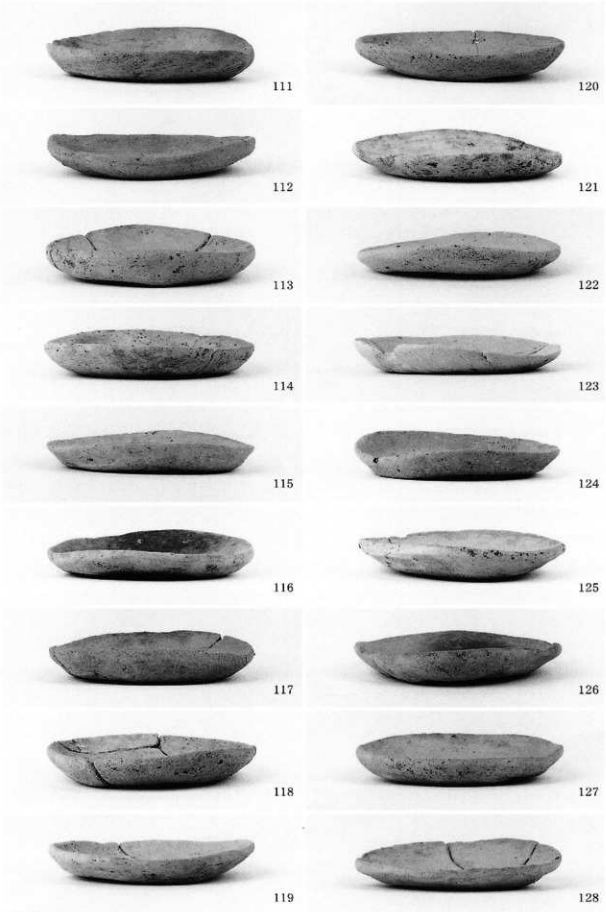




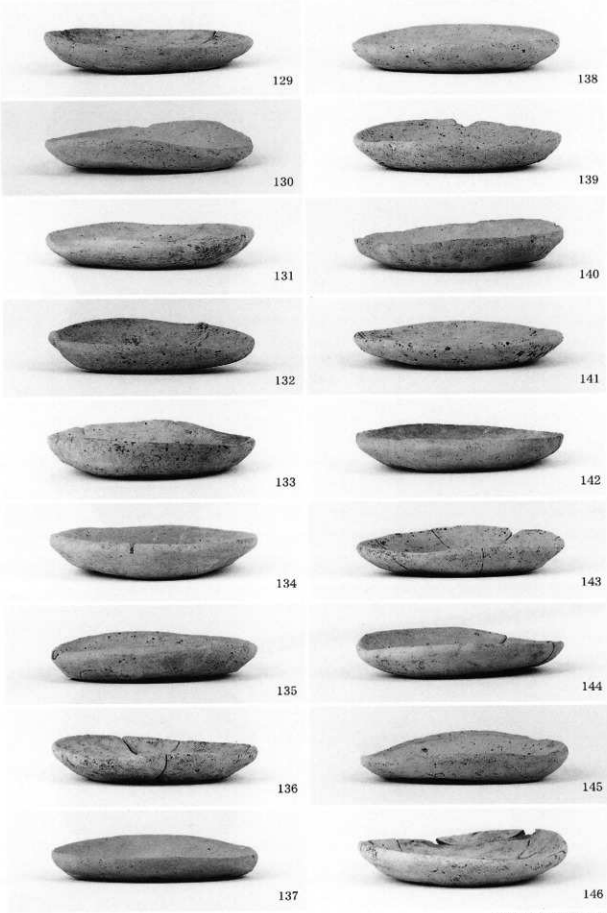
SX１出土瓦器皿、須恵器捏鉢、青磁椀、土師器小皿



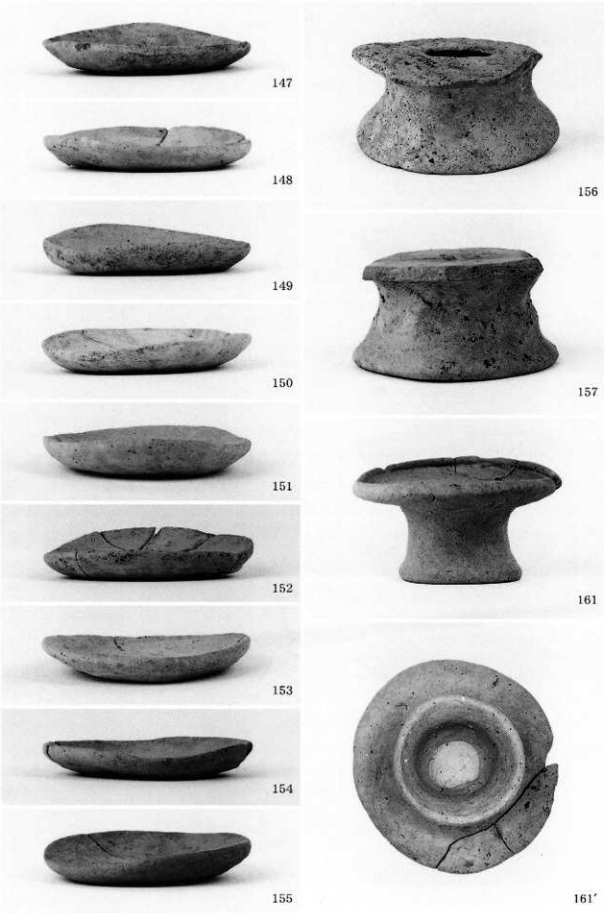
SX 1 出土土師器小皿


111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128

SX1出土土師器小皿


129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146

SX 1 出土土師器小皿



SX 1 出土土師器小皿・台付皿

160

160′

162

164

164′

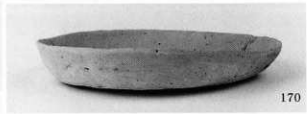
163

166

167

168

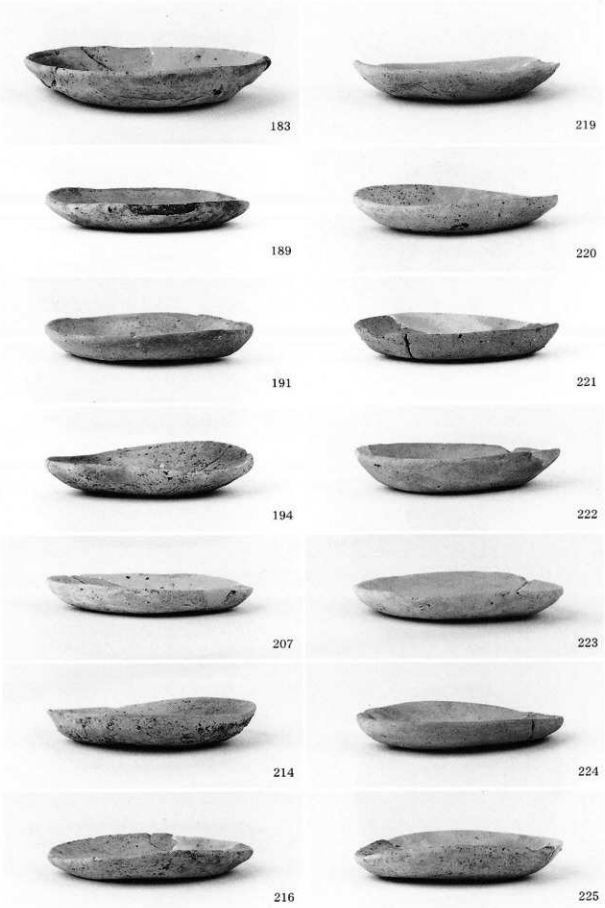
169


170

171

172

SX 1 出土土師器台付皿・大皿

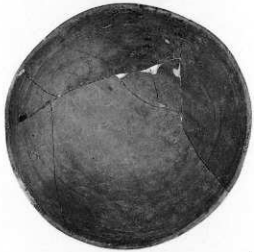


SK２出土土師器大皿・小皿　SP９出土土師器小皿　炭P出土土師器小皿　第２－C層出土土師器小皿
第２～３層出土土師器小皿

227

267

244′



247′

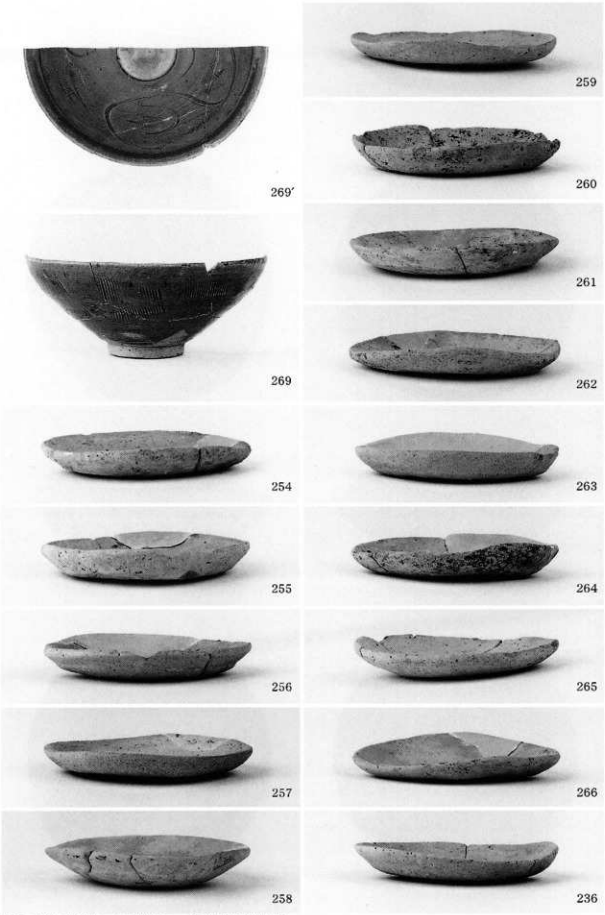
244

247

244″

247″

第2～3層出土瓦器皿　第3層出土瓦器椀・皿



第3層出土青磁椀、土師器小皿　第4層土師器小皿

237

243

242′

241′

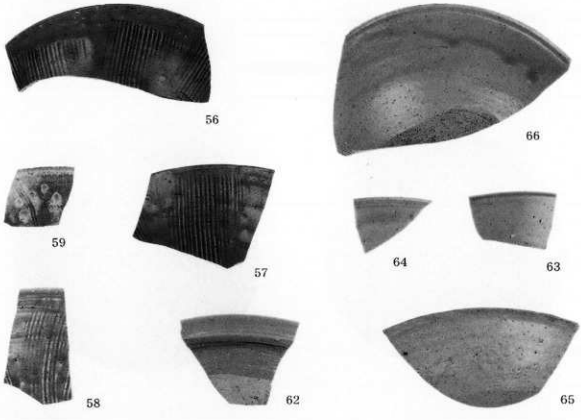
242

241

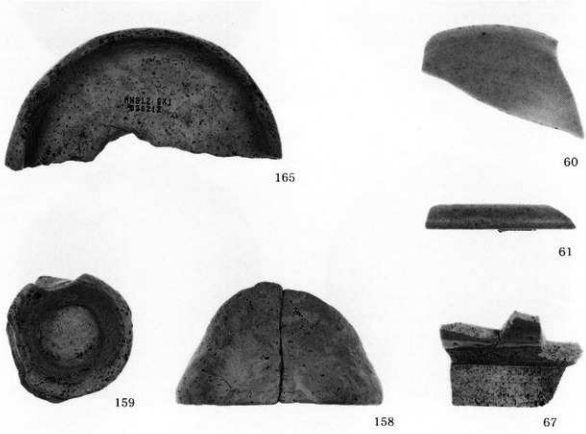
242″

242″

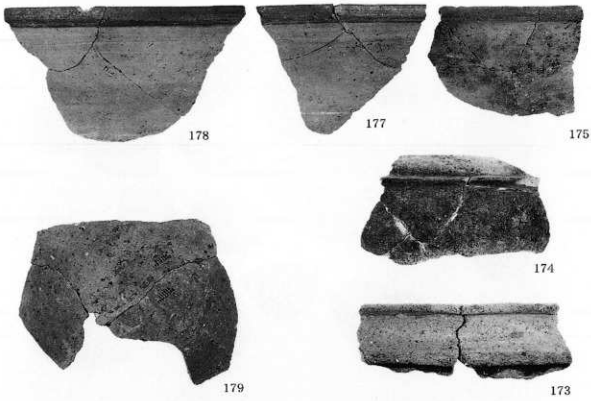
第4層出土土師器小皿　第4－Ⅰ層出土瓦器椀　第5層出土瓦器椀　第6～7層出土土師器小皿



SX１出土青磁碗、白磁碗

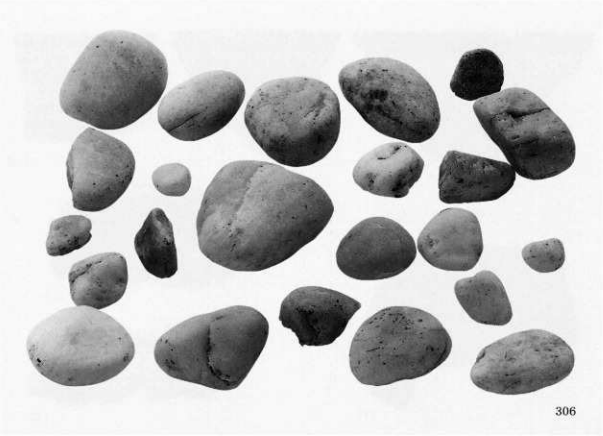


SX１出土青白磁皿、白磁壺・底部、土師器台付皿

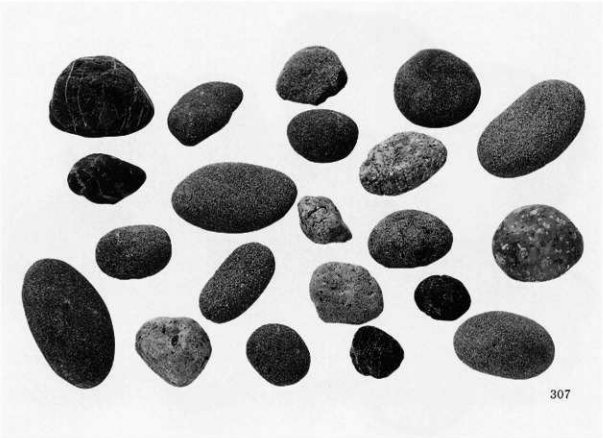


SX１出土瓦器羽釜、土師器羽釜、須恵器捏鉢

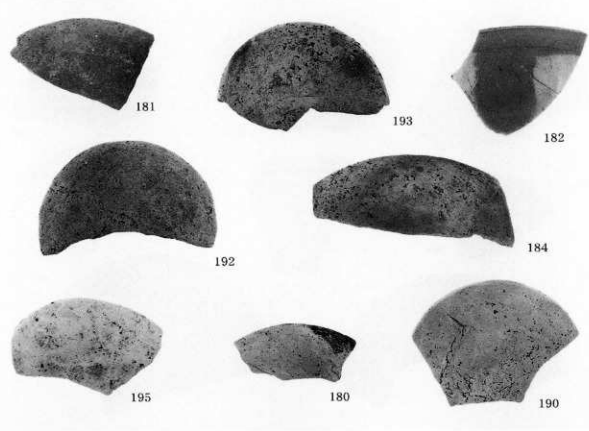
SX１出土土師器大皿・小皿



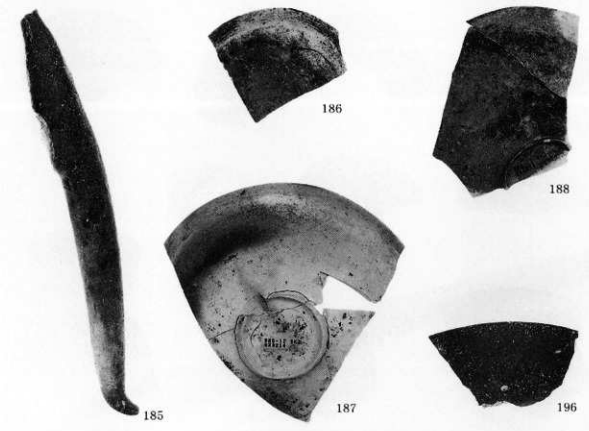
SX1出土玉石



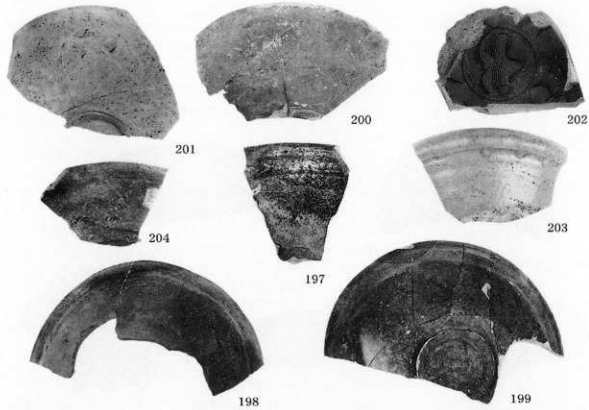
SX1出土玉石



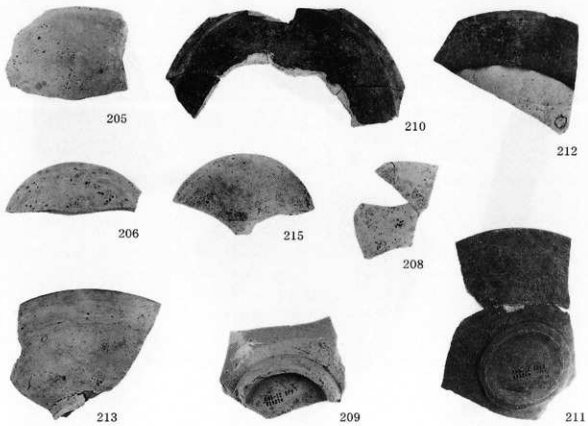
SK１出土土師器大皿・小皿、青磁碗　SK２出土土師器大皿・小皿　SK３出土土師器小皿



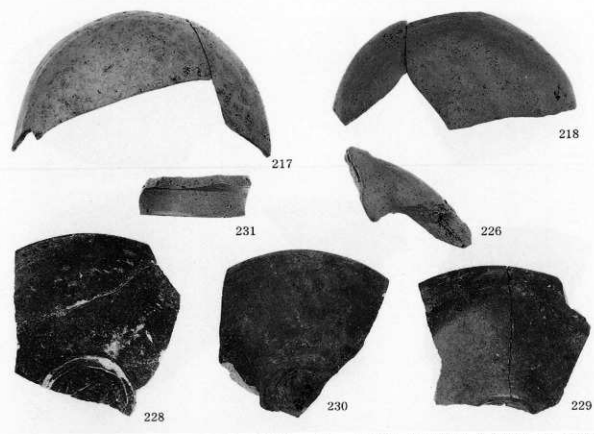
SK２出土瓦器羽釜・皿・椀　SK３出土瓦器椀



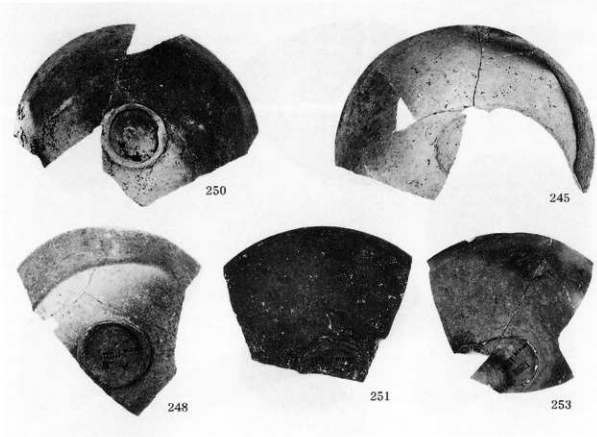
SD１出土瓦器椀、青磁碗　SD２出土白磁碗、瓦器椀



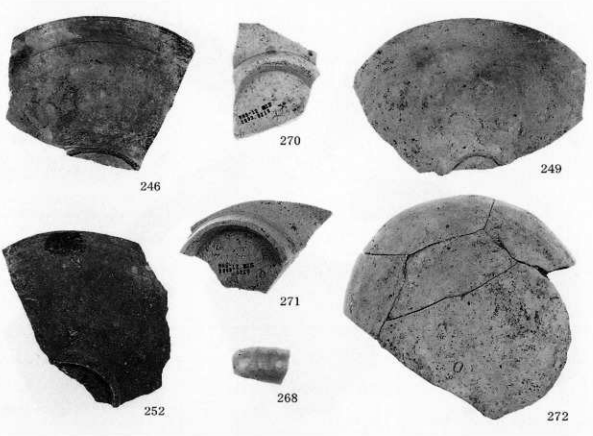
SP６出土土師器大皿　SP８出土土師器小皿　SP９出土瓦器椀、白磁碗　SP10出土瓦器椀　SP13出土瓦器椀
SP31出土瓦器椀



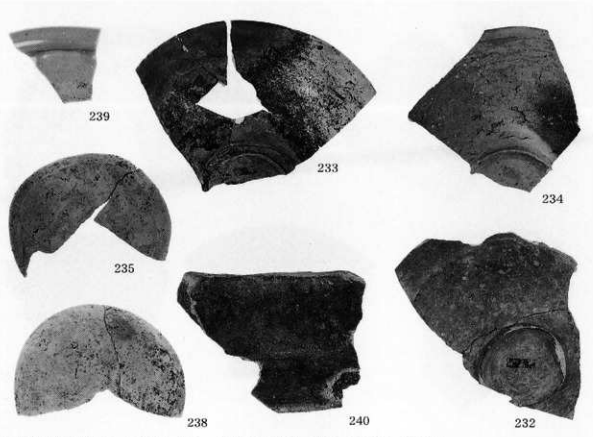
第2－C層出土土師器大皿　第2～3層出土土師器大皿、瓦器羽釜・椀、白磁碗



第3層出土瓦器椀



第3層出土瓦器椀、青白磁合子、白磁椀、土師器大皿



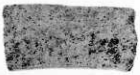
第4層出土土師器小皿、瓦器椀　第4－A層出土白磁椀　第4－C層出土土師器竈

275

274

273

277


276

278

279

SX1・第3層・第4層出土石器

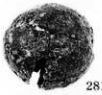
280

282

287

283

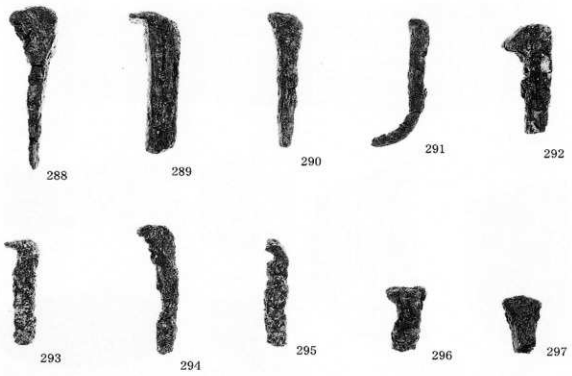
286


281

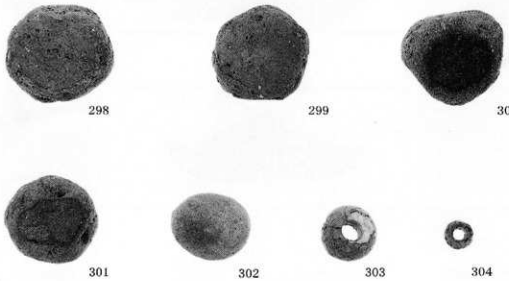
284

285

SX1出土金属製品



SX1出土金属製品



SX1・第3層・第4層出土玉

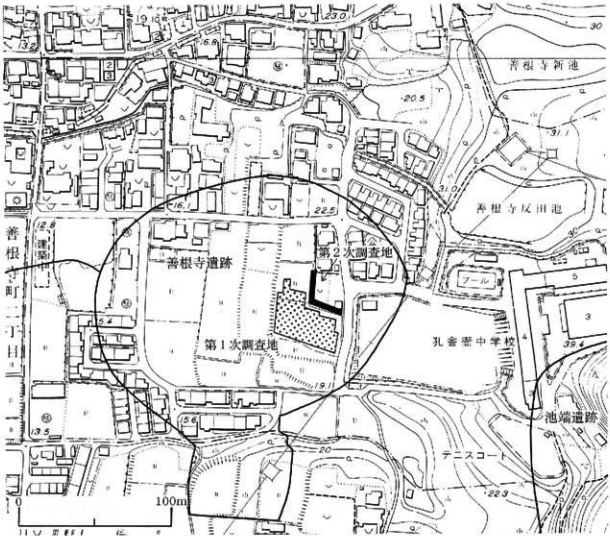
第６章 善根寺遺跡第２次発掘調査

１）はじめに

善根寺遺跡は、東大阪市善根寺町1丁目を中心に所在する弥生時代から中世期にかけての集落跡である。遺跡は生駒山地西麓部の斜面を流下する、小河川が形成する扇状地上に立地する。この扇状地は傾斜変換点に近い。位置は善根寺春日神社の北側尾根に発する大川ないしその先行河川の左岸域にあたる。標高で19～22mを測る。

善根寺町周辺ではこれまで大きな開発はなく、善根寺遺跡の調査は皆無であったが、平成14年６月～８月に老人ホーム建設に先立って第１次調査が実施された。調査の結果、①奈良時代中期、②奈良時代末期、③平安時代前期～中期の３時期に含まれる掘立柱建物が合計６棟検出された。建物の軸は全て真北を向き、強い計画性に則って営造された集落であることが判明した。

平成14年12月、善根寺町１丁目662-1・663-2番地において、擁壁工事建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が個人から提出された。工事予定地は第1次調査の東側と北側に接する箇所であり、掘削による埋蔵文化財への影響が懸念された。そこで事前に調査を実施することとなった。調査は平成14年12月10日・11日の２日間行なった。調査対象地は工事の箇所約68㎡である。



第１図　調査地位置図

2）調査の概要

まず検出した層位は以下のとおりである。

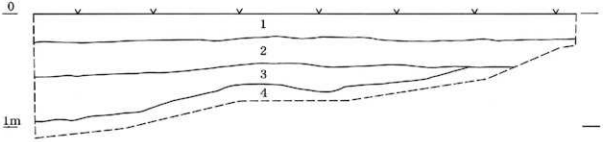
第1層　耕土層。2.5GY4/1暗オリーブ灰色粗粒砂混じりシルト。

第2層　床土層。5YR4/4にぶい赤褐色シルト質中粒砂。

第3層　7.5YR5/4にぶい褐色粗粒砂混じりシルト。マンガンの沈着が著しい。中世～近世の耕土層と考えられる。

第4層　地山層。2種あり、Aは10YR7/6明黄褐色粘土、Bは2.5Y6/6明黄褐色細礫。相互の層序はAの下部にBが存在する。

第1層から第4層の層準と土質は第1次調査とほぼ同様の結果を示す。なお、第1次調査の北西側に広がる奈良～平安初期の遺物包含層は全く確認されなかった。



第2図　調査地断面図

検出した遺構には土坑2基、溝4条、ピット2個、落ち込み1ヵ所、自然河川1本がある。遺構は自然河川を除き、全て東側のトレンチで確認された。落ち込みは、第1次調査で類似のものがあり、近世期を遡るものではない。溝は耕作に伴うもので、鋤溝などと考えられる。溝1は幅25～40cm、深さ2～12cmを測り、東から西へ落ち込みに向かって流下する。西側で検出したピットは、地山層(B)に5Y3/1オリーブ黒色シルトがブロック状に混入した土壌を埋土としており、柱痕部も確認された。出土遺物はないが、土質などから奈良～平安初期の掘立柱建物を構成するピットである可能性が考えられる。北端部の自然河川は第1次調査に先立つ試掘(確認)調査の結果、その存在が予想されたもので、今回はじめて検出した。奈良～平安初期の集落の北を限る機能をもつ可能性がある。今回の調査では、機械掘削時に数片の土師器・須恵器が認められた程度で極めて僅少である。中央部の溝から土師器・須恵器の破片が、近世期の落ち込みからサヌカイト片と須恵器片が出土した。土器はいずれも奈良時代ごろのもの

断面写真

ピットと落ち込み

と考えられる。

3）まとめ

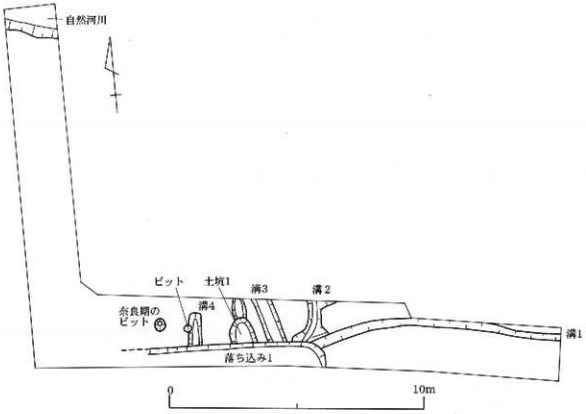
今回の調査成果を箇条書きでまとめておく。

① 自然河川を確認した。前期のように集落の北限に位置するものと考えられる。

② 地山層上面の旧地形を確認した。第１次調査では、段Ⅰと段Ⅱで大きく段差がつき、建物３の復原は推定であったが、今回の東西ライン面には耕作に伴う崖面はなく、東西約10m間で１mの緩傾斜面を検出した。

溝１(右)と溝２(左)

③ 奈良期のピットを１個検出したが、建物の復原には至らなかった。トレンチの幅が最大３mであくまで現地の所見であるが、この結果により今回の立会調査地の東側に建物の存在を予想することは困難と思われる。



第３図 遺構平面略測図

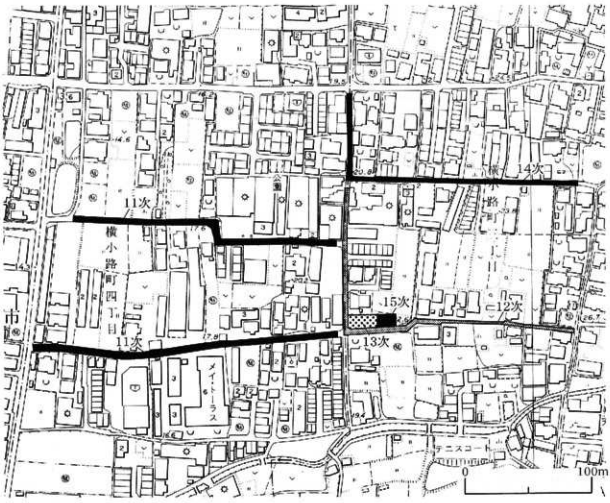
第７章　馬場川遺跡第15次発掘調査

１）はじめに

馬場川遺跡は、東大阪市横小路町３～４丁目にわたる、縄文時代中期から古墳時代にかけての集落跡である。本遺跡は東西約400m南北約300mの範囲に広がると推定されている。遺跡は箕後川ないしその先行河川が生駒山地西麓で形成する扇状地上、標高14～26mに立地している。

馬場川遺跡は昭和42年６月、工場の新築工事時に多数の石器・サヌカイト片が採集され、縄文時代の遺跡として知られるようになった。また昭和44年度から継続した発掘調査によって、近畿地方有数の縄文時代晩期の集落跡であることが明らかとなった。その後、宅地開発工事に伴う小規模な発掘調査が行なわれたが、縄文時代における本遺跡の様相は不明の点を多く残していた。

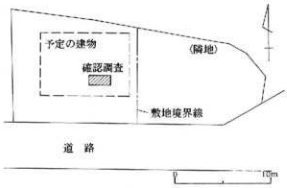
いっぽう、近時下水道築造工事に伴う発掘調査が歴年実施されている(第11・12・14次調査)。各々調査成果の詳細については各報告書(章末に別記)に拠られたいが、従前不詳であった遺跡南部で晩期の遺物包含層が検出され、該期の生活域を捉える上で大きな成果であった。ところで、遺跡南部の第13次調査では、平成14年11月に発掘調査が行なわれ、滋賀里Ⅲｂ式(篠原式中～新段階)期の所産にかかる土壙墓が2基検出された。南面する道路下の下水道関係調査(第11次調査)で人体の頭骨が出土していることから、遺跡南部、第13次調査地付近に該期の墓域が広がることが判明し、注目を集めることとなった。



第１図　調査地位置図

2）調査の概要

平成15年３月、横小路町３丁目1151-3番地の一部において、個人住宅の建設を予定していた個人から「埋蔵文化財発掘(確認)調査依頼書」が提出された。建物の申請地は先述の第13次調査地に東隣する箇所である。調査依頼者側でも縄文時代の遺構・遺物が発見されたことを熟知しており、できるだけ埋蔵文化財を破壊しない基礎掘削にとどめるため、調査データを得る目的で調査依頼書を提出されたものであった。調査は平成15年３月26日に実施した。なお調査の趣旨に鑑み、試掘坑は最小限にとどめ、1m×2mの２㎡とした。



第２図　調査箇所位置図

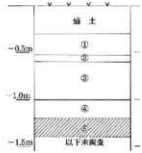
まず層位は次のとおりである。

第１層　旧耕土層。　第２層　床土層。

第３層　7.5Y4/1灰色粘土質砂。層厚は約40cmを測る。上部約20cmまでは遺物は出土しなかった。下部から土師器高坏片が出土。

第４層　2.5Y6/6明黄褐色粗粒砂。古墳時代の土器小片を含む。層厚約20cm。

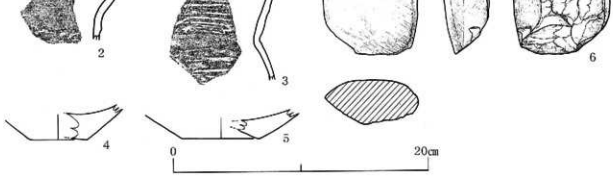
第５層　N3/暗灰色シルト混じり粘土。縄文時代晩期・弥生時代後期～庄内期の遺物包含層。層厚20cm以上。現地表面から第５層上面までは約1.2mを測る。



第３図　調査地断面柱状図

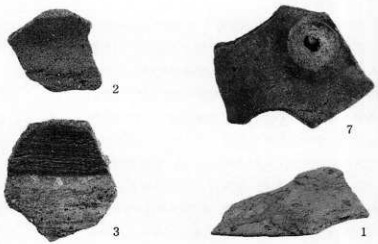
まず第13次調査の層序との相当関係をみると、第３層・第４層は古墳時代ごろの堆積層であり、第13次調査第２層各層に対応する。第5層が第13次調査第3層各層に相当する。多量の縄文時代遺物に少量の弥生時代遺物が混入することも同様であった。また第13次調査では遺物包含層の上面レベルが東から西へ緩く傾斜することが知られていた。第13次調査東端の上面レベルは-1.15mでこれも大差なく試掘坑周辺に遺物包含層が広がることが確認できた。

調査依頼者は調査結果に基づき、平成15年４月に現地表面から50cmにとどまる「埋蔵文化財発掘の届出」を提出された。東大阪市教育委員会では基礎掘削は遺物包含層に遠く抵触しないことから慎重に工事を実施するよう届出者に指示した。

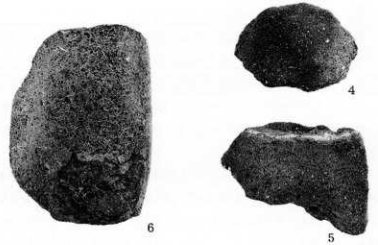


第４図　出土遺物実測図

次に主な出土遺物について説明しておきたい。遺物には古墳時代の庄内式～布留式土器・土師器、縄文土器、石器、1は土師器高坏の脚部である。裾部は大きく外へ広がる。裾端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。庄内式～布留式期。第3層出土。2は縄文土器浅鉢である。口縁部は外反し、口唇部は尖り気味に終わる。胴部外面はケズリ調整し、口縁部内外面はナデ調整する。3は縄文土器深鉢である。体部から口縁部にかけて外折し、口唇部は丸く終わる。胴部外面と口縁部外面に二枚貝条痕を施し、頸部と口唇部をナデ調整する。内面はナデ調整する。4・5は縄文土器の底部である。4は底部が厚い。5は底部が大きく凹む。外面をケズリ調整し、底部外面と内面はナデ調整する。2～5は生駒西麓産。縄文時代晩期。6は石斧である。裏面と上下部を欠損する。形状は楕円形を呈する。側面と刃部に使用痕がある。長さ10.4cm、幅7.4cm、厚み3.6cm、重さ406.93gである。色調はオリーブ灰色を呈する。縄文時代晩期。7は土師器の坏下半部である。脚部との接合面が残る。外面を6条/cmのハケメ調整、内面をナデ調整する。古墳時代。2～7は全て第5層出土。



出土遺物(1)



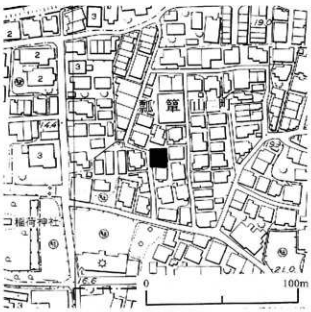
出土遺物(2)

3）まとめ

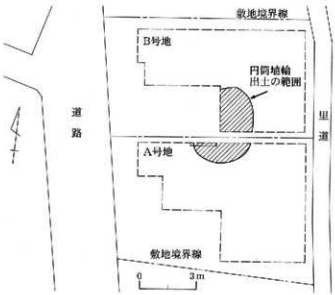
今回の調査では小規模の試掘坑を設けたに過ぎなかったが、第13次調査の層準と同様の層位を確認することができた。また出土遺物では縄文時代晩期(後半)に属する石斧がみられ注目される。調査の性格上、散えて第5層(遺物包含層)を掘り抜いて下面の遺構を確認するには至らなかったが、第13次調査の成果を勘案すると、同様の遺構が広がっていることが予想された。晩期後半(滋賀里Ⅲb式期)の遺構追及には、さらに東側での調査が必要であり、今後が期待される。

〔報告書一覧〕(第11次調査)東大阪市教委『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告- 平成11年度-』平成12年。及び東大阪市教委『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告- 平成12年度-』平成13年。
(第12次調査) 東大阪市教委『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告- 平成13年度-』平成14年。
(第13次調査) 東大阪市教委『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報- 平成14年度-』平成15年。
(第14次調査) 東大阪市教委『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告- 平成14年度-』平成15年。

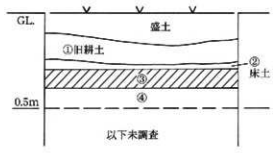
第８章　山畑古墳群の第24次調査



第１図　調査地位置図



第２図　第24次調査概況図



第３図　調査地断面柱状図

１）調査の概要

平成15年5月、甕篠山町65-3・65-12番地の各一部でにおいて、分譲住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が建設会社から提出された。工事は、現地表下0.38mの基礎掘削であることから、東大阪市教育委員会は埋蔵文化財への影響は少ないと判断、工事に併行して立会調査が必要な旨届出者に通知した。立会調査を平成15年７月14日に実施したところ、ほとんどの工事箇所で掘削深度は旧耕土層ないし床土層にとどまっていたが、工事箇所の中央部、東西約２m南北約３mの範囲のみ黒褐色土がみられ、そこから後述の円筒埴輪が多数露出していた。工事箇所中央部の層位は次のとおりである。

第１層　旧耕土層。第２層　床土層。
第３層　10YR3/1黒褐色砂質粘土。
第４層　2.5Y5/3黄褐色粘土質シルト。

第３層が円筒埴輪を多数含む遺物包含層である。第４層は地山層である。

円筒埴輪はコンテナ約２箱分に及ぶほど多量であったため、基礎掘削工事が申請地全体で終了するまで調査を実施した。期間は平成15年７月14日から７月16日である。また現地で掘削レベルについて協議を行ったところ、届出者の協力をいただき、0.38mから0.2mに変更することができた。このため遺物の出土量を最小限に抑えることができた。

２）出土遺物

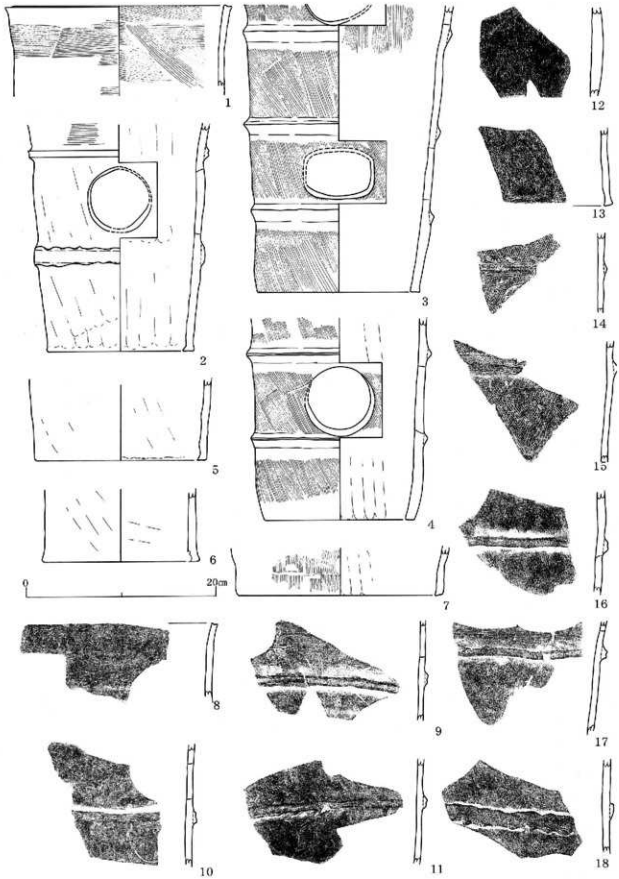
今回の調査で出土した円筒埴輪のうち18点を図化した。以下概要を記す。1・8は口縁部、2～7・13は基底部、残りは体部破片である。1は口縁部が外方上に伸び、口縁端部はやや凹むが、面をもつ。外面は横方向のハケメ調整、内面は横方向と斜め方向のハケメで調整する。口径22.0ｃｍ、残存高9.5ｃｍを測る。胎土中に石英、長石、雲母、くさり礫を含む。色調は内面が浅黄橙色(5YR6/6)，外面が浅黄橙色(7.5YR6/4)を呈する。2は基底部が外方上に伸び、乾燥時に下部が自重に耐えられず変形し、器壁底部の粘土

が内側へ倒れ込む。円形の透かし孔は一段目と二段目の間に確認できる。突帯は一段目が断続ナデ技法により指で押しつぶされた不定形を呈し、二段目は台形を呈する。外面は1、2段目がユビナデ調整、3段目が横方向のハケメ調整、内面はナデ調整する。底径15.2ｃｍ、残存高24.0ｃｍを測る。胎土中に石英、長石、くさり礫、黒色砂礫を含む。色調は内面が橙色(5YR7/6)，外面が橙色(5YR6/6)を呈する。3は基底部が外方上に伸び、円形の透かし孔が一段目と二段目の間、二段目の上に確認できる。突帯は低い断面三角形を呈する。外面は斜め方向のハケメ調整、内面は1～3段目がユビナデ調整、4段目が縦方向のハケメで調整する。底径17.0cm、残存高30.5cmを測る。胎土中に石英、長石、くさり礫を含む。色調は内面が浅黄橙色(7.5YR8/3)、外面が浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈する。4は基底部が緩やかに外方上に伸び、円形の透かし孔が一段目と二段目の間に1個確認できる。突帯は断面三角形を呈する。外面は斜め方向のハケメ調整、内面はナデ調整する。底径15.6cm、残存高21.3cmを測る。胎土中に石英、長石、くさり礫を含む。色調は内面が浅黄橙色(7.5YR8/3)、外面が浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈する。5は基底部が緩やかに外方上に伸び、器壁底部の粘土が内側へ倒れ込む。内外面はユビナデ調整する。底径17.6cm、残存高8.0cmを測る。胎土中に石英、長石、雲母を含む。色調は内面が浅黄橙色(7.5YR8/6)、外面が浅黄橙色（10YR8/4）を呈する。6は基底部がまっすぐに伸び、器壁底部の粘土が外側へ倒れ込む。内外面は板状工具によるナデ調整する。底径16.0cm、残存高7.7cmを測る。胎土中に石英、長石を含む。色調は内外面が浅黄橙色（10YR8/3）を呈する。7は基底部が外方上伸びる。外面は縦方向のハケメ調整、内面はユビナデ調整する。底径20.0cm、残存高5.0cmを測る。胎土中に石英、長石、雲母を含む。色調は内外面が橙色(7.5YR7/6)を呈する。8は口縁端部が面をもつ。内外面は横方向のハケメで調整する。残存高7.8cmを測る。胎土中に石英、長石、雲母を含む。色調は内面が灰白色(10YR8/2)、外面が浅黄橙色(10YR7/3)を呈する。

9は突帯が低い台形を呈する。円形と思われる透かし孔が1個確認できる。外面は横方向のハケメ調整、内面はナデ調整する。胎土中に石英、長石、雲母を含む。色調は内面が浅黄橙色(7.5YR8/6)、外面が浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈する。.10は突帯が低い台形を呈する。円形と思われる透かし孔が1個確認できる。1本の線刻を施す。内外面は横方向のハケメで調整する。8と同一個体である。11は突帯が低い台形を呈する。外面は横方向のハケメ調整、内面は板状工具によるナデ調整した後、斜め方向のハケメで調整する。胎土中に石英、長石を含む。色調は内外面が浅黄橙色（7.5YR8/6）を呈する。12は外面をナデ調整、内面を縦方向のハケメで調整する。胎土中に石英、長石、雲母を含む。色調は内面が橙色(5YR7/6)、外面が浅黄橙色(7.5YR8/6)を呈する。13は内外面を板状工具によるナデ調整する。胎土中に石英、長石、雲母を含む。色調は内面が浅黄橙色(7.5YR8/6)、外面が橙色(7.5YR7/6)を呈する。14は突帯が低い断面三角形を呈する。外面は斜め方向のハケメ調整、内面はユビナデ調整する。3と同一個体である。15は突帯が断面三角形を呈する。外面は斜め方向のハケメ調整、内面はナデ調整する。4と同一個体である。16は突帯が明瞭な台形を呈する。円形と思われる透かし孔が1個確認できる。外面は横方向のハケメ調整、内面はナデ調整する。色調は内外面が浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈する。17は突帯が明瞭な台形を呈する。円形と思われる透かし孔が1個確認できる。外面は横方向のハケメ調整、内面はナデ調整する。16と同一個体である。18は断続ナデ技法により、指で押しつぶされた不定形の突帯を呈する。内外面は板状工具によるナデ調整する。13と同一個体である。

3）まとめ

円筒埴輪は形状から6世紀代に属するものである。既往の山畑古墳群の調査では円筒埴輪の出土は少量であり、今回の調査は限られたものといえ、大変貴重な成果が得られた。



第4図　円筒埴輪実測図

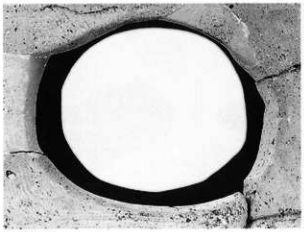
図版1　山畑古墳群第24次調査　遺物

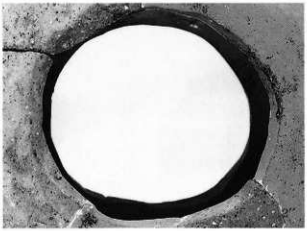
3

4

3′

2

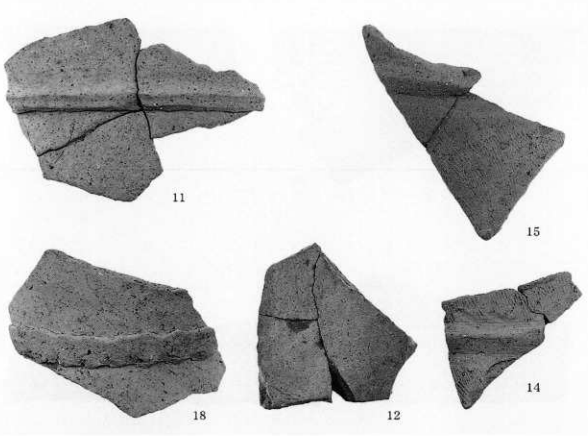




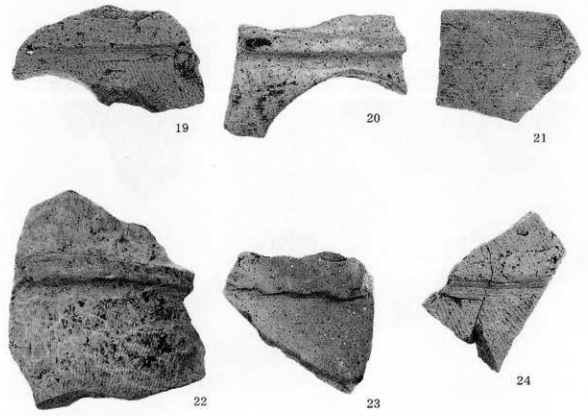
円筒埴輪

円筒埴輪

円筒埴輪



円筒埴輪



円筒埴輪

報告書抄録(その1)

ふりがな	ひがしおおさかしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう －へいせい15ねんど－
書名	東大阪市埋蔵文化財調査概報　－平成15年度－
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	菅原章太　釜田有理絵　吉岡賢吾
所在地	〒577-0843　東大阪市荒本北50番地の４
発行年月日	2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
やまはたいせき 山畑遺跡	東大阪市上四条町1716-3番地の一部	27227	67	平成14年12月5日 ・12月16日	11㎡	個人住宅建設
しばがおかいせき 芝ヶ丘遺跡	東大阪市中石切町4丁目2176-2,2178-4番地	27227	23	平成14年12月25日 平成15年２月28日	6㎡	個人住宅建設
わかえいせき 若江遺跡	東大阪市若江北町3丁目704-1番地	27227	98	平成14年12月13日 ～12月24日	48㎡	個人住宅建設
	東大阪市若江北町3丁目860-3番地	27227	98	平成14年12月13日 ～12月24日	60㎡	個人住宅建設
	東大阪市若江本町４丁目966番地	27227	98	平成15年８月18日 ～９月５日	90㎡	個人住宅建設
みやのしたいせき 宮ノ下遺跡	東大阪市長堂１丁目70-6,70-11番地	27227	158	平成15年２月６日 ～２月22日	41㎡	賃貸共同住宅建設
ぜんこんじいせき 善根寺遺跡	東大阪市善根寺町１丁目662-1,663-2番地	27227	131	平成14年12月10日 ・12月11日	68㎡	擁壁工事
ばばがわいせき 馬場川遺跡	東大阪市横小路町3丁目1151-3番地の一部	27227	89	平成15年３月26日	2㎡	依頼による調査
やまはたこふんぐん 山畑古墳群	東大阪市瓢箪山町65-3番地の一部65-12番地の一部	27227	66	平成15年７月14日 ～７月16日	79㎡	分譲住宅建設

報告書抄録(その2)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山畑遺跡 (第23次調査)	集落跡 散布地	古墳時代	古墳状の石組	須恵器 鉄製品	
芝ヶ丘遺跡 (第13次調査)	集落跡	古墳時代～ 奈良時代	(遺物包含層)	土師器 須恵器	
若江遺跡 (第78次調査)	集落跡・官衙跡 城館跡・社寺跡	鎌倉時代～ 安土桃山時代	ピット・土坑	土師器 須恵器 瓦器	
若江遺跡 (第78次調査)	集落跡・官衙跡 城館跡・社寺跡	鎌倉時代～ 安土桃山時代	ピット・土坑	土師器 須恵器 瓦器	
若江遺跡 (第78次調査)	集落跡・官衙跡 城館跡・社寺跡	鎌倉時代～ 安土桃山時代	溝・土坑・井戸・ ピット	土師器 須恵器 瓦器	
宮ノ下遺跡 (第13次調査)	集落跡・貝塚	鎌倉時代	土坑・ピット・ 溝	土師器 須恵器 瓦器	
善根寺遺跡 (第13次調査)	集落跡	奈良時代・ 江戸時代	土坑・ピット・ 落ち込み・溝・ 自然河川	土師器 須恵器 瓦器	
馬場川遺跡 (第13次調査)	集落跡	縄文時代～ 弥生時代	(遺物包含層)	縄文土器 石器 石材 (チャート)	
山畑古墳群 (第13次調査)	古墳	古墳時代	(遺物包含層)	円筒埴輪	

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

－平成15年度－

発行日　平成16年3月31日
編集・発行　東大阪市教育委員会
〒577-8521　東大阪市荒本北50番地の4
TEL. 06－4309－3283
印刷所　グランド印刷（株）